



*Newsletter*

The United Graduate School of  
Agricultural Sciences  
Kagoshima University

鹿児島大学 大学院 連合農学研究科  
ニュースレター

Volume 37, 2017

佐賀大学 鹿児島大学 琉球大学



## 目 次

◇鹿児島大学大学院連合農学研究科長挨拶……………	籾 井 和 朗	1
◇鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科長挨拶……………	寺 田 竜 太	2
◇退職の挨拶		
16年間の連大を振り返る……………	小 山 次 朗	3
お世話になりました……………	玉 城 政 信	3
◇旧代議委員の挨拶		
……………	早 川 洋 一	5
代議員を終えるにあたり……………	濱 洋 一 郎	5
代議委員を終えて……………	中 西 良 孝	6
代議委員の退任のご挨拶……………	境 雅 夫	7
代議委員を終えて-雑感-……………	屋 宏 典	8
◇新代議委員の挨拶		
代議委員就任にあたって……………	小 林 元 太	9
ご挨拶……………	三 好 和 睦	10
ご挨拶……………	豊 智 行	11
人を育てる職業-博士課程学生の人材教育は楽しい・でもつらい……………	西 隆 一 郎	12
ご挨拶……………	平 良 東 紀	13
◇新入生の素顔		
平成28年10月入学……………		15
平成29年4月入学……………		23
◇学生の研究活動　—2016年度在学生の学会等発表—……………		46
◇研究室紹介……………		88
◇留学生の近況……………		89
◇修了生より……………		90
◇学会賞等受賞……………		92
◇連大行事と活動		
平成28年度 連合農学研究科学位記授与式(前期)……………		97
平成28年度 連合農学研究科学位記授与式(後期)……………		98
平成29年度 農学研究科入学式……………		99
平成29年度 入学式告辞(平成29年4月14日)……………		100
平成28年度 連合農学研究科秋季入学式……………		102
平成28年度 全国連合農学研究科協議会……………		103
連合一般ゼミナール「農学共通講義」……………		105
中間発表会……………		106
ティーチング・アシスタント(TA)研修会……………		109
連合農学研究科 第3回男女共同参画セミナーを開催……………		110
連合農学研究科 ハラスメント防止のための講演会を開催……………		111

分野別セミナーの開催	111
平成 28 年度 連合農学研究科（博士課程）	
「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」実施報告	113
平成 28 年度 連合農学研究科「人材養成学生支援セミナーⅠ」実施報告	116
平成 28 年度 連合農学研究科	
「人材養成学生支援セミナーⅡ（洋上セミナー）」開講報告書	118
◇資料 一学生数・教員組織等一	
年度別入学者数	124
平成 28 年 10 月・平成 29 年 4 月入学生及び指導教員名簿	127
平成 28 年度 奨学金及び研究助成金受給状況・入学料及び授業料免除状況	131
学位記授与状況	132
平成 28 年度 学位取得者名簿	134
平成 28 年度 学位取得者（課程博）就職状況	137
研究科教員組織	138
代議委員会委員名簿	139
平成 29 年度 年間行事予定表	140
平成 28 年度 連合農学研究科活動記録	141
事務局だより	143
代議委員会委員・連大事務室事務係メールアドレス一覧表	144
編集後記	145

## ◇ 連合農学研究科長挨拶

鹿児島大学大学院連合農学研究科長

梶井 和 朗

鹿児島大学大学院連合農学研究科（連大）科長として2年目となります。昨年度、連大における特記事項として、那覇市自治会館での1年生、2年生合同の一般セミナー、学位記授与式・入学式、さらに研究科長裁量経費による先進的研究推進事業などが挙げられます。一般セミナーでは、73名の連大生（佐賀大学11名、鹿児島大学（水産）25名、鹿児島大学（農）12名、琉球大学25名）が参加し、武田薬品工業㈱、宮崎大学、三重大学、九州大学の先生からの最先端研究に関する講義に触れ、今後の各自の研究の展開に役立つものであったと思います。また、情報交換セミナーでの研究紹介とディスカッションを通じて、「研究」を軸に、今を切磋琢磨する連大生間の交流が深められたと思います。学位記授与式（写真は2016年9月16日、科長：前列左から3人目）では、鹿児島大学長より、「独立した研究者として、新たな目標に向かって出発されますが、本連合農学研究科で切磋琢磨し、自らの学習と研究目標を達成されたことに誇りを持ち、今後ますます高い志を持ってご活躍していただきたい」との告辞（2017年3月13日）があり、今後も、高い目標に向かって、連大における教育・研究を展開させていきたいと思っています。さらに、各研究科・大学間共同で研究を推進する先進的研究事業を連大独自に公募し、平成28年度は6件（総額1560万円）を支援しました。研究課題「スサビノリを用いた機能性発酵食品の開発」、「高効率イソプレン発酵のためのハイブリットイソプレン合成酵素の分子基盤構築」、「遺伝子改変小型魚類の養殖魚モデル動物としての評価」など、食品・バイオ分野での先進研究ならびに農水産学分野での地域課題研究に関する共同研究が大いに期待されます。この研究推進事業では、連大を核に、科研費などの大型外部資金獲得に向けての基盤づくりを目指しています。今後は、連大生への先端研究のフィードバックの観点から、セミナーでの発表会などを企画中です。今年度も、連大の先端研究推進のために、多くの先生からの申請をお待ちしています。

連大では、困難な課題に果敢にチャレンジする連大生を心から応援していきます。今後とも構成教員のご協力の下、これまでに築きあげてきたすばらしい連大の仕組みを維持しながら、さらなる連大の発展のために前進していきますので、よろしくお願い致します。



## ◇ 連合農学研究科副研究科長挨拶

### ご挨拶



鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科長  
寺田 竜太

新入生の皆さん、鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科への入学、おめでとうございます。これからの3年間は実り多いものとなり、目標である博士の学位を取得されることを期待しています。また、連大に参加していただいている教員の皆様には、日頃より連大の教育研究活動にご協力いただいておりますことを厚く御礼申し上げます。

昨年は、15年間在籍した鹿児島大学水産学部から連大に異動し、多くのことを学んだ1年間でした。これまでも一教員として連大での教育研究に携わっていましたが、連大の管理運営を通して教育システムの素晴らしさを改めて実感すると共に、3大学4研究科の教育研究環境のさらなる向上を目指すことを目標に、思いを新たにしました次第です。また、9月と3月の学位授与式では、晴れて博士の学位を授与された皆さんの雄姿と祝賀会での感謝のスピーチを拝聴し、思わず涙腺が緩みました。

学生の皆さんが3年間で博士の学位を取得するためには、地道な努力の蓄積が必要です。特に、研究課題の目的設定や方法、解析、考察等が妥当かどうかなど、指導教員との意見交換を深めながら研究を進めていくことが望まれます。また、論文は投稿から受理に至るまで、普通は数ヶ月を要します。できる限り、1年時または2年時の段階で論文を複数投稿し、学位論文の基準を早期に満たすことをお勧めします。連大では、学生の研究指導の経費の他に、様々な研究支援の制度を設けています。どのような支援が得られるかについても、指導教員と綿密に相談しながら研究を進めていきましょう。

昨今、研究者には専門分野の高度な知識と共に、コンプライアンスの遵守を含む高い倫理観が求められています。研究に関する不正行為を行わないことはもちろんのこと、著作権の保護や国内外の法令を遵守することが求められます。また、フィールドワークでは、安全管理を常に徹底し、事故に巻き込まれないようして下さい。3年後、皆さんが満ち足りた笑顔で学位授与式に参列し、博士の学位を授与されることを心より楽しみにしています。

先生方におかれましては、国立大学を取り巻く環境が厳しさを増す中で、連大の教育研究にご尽力いただけることに深く感謝申し上げます。私の使命は、連大を通して先生方の教育環境の向上に努めることです。「連大があってよかった」と思っただけのような管理運営に努めますので、どうぞよろしくお願いします。琉球大学と佐賀大学にも足繁く通いますので、連大生の教育と研究に関してご不明な点がありましたら、何なりとお問い合わせいただけますと幸いです。

今年度が皆様にとって実り多き1年になりますことをお祈り申し上げます。

## ◇退職の挨拶

### 16年間の連大を振り返る



鹿児島大学教授 水産学部  
小山 次朗

前任の水産研究所から鹿児島大学水産学部に転任してから16年が経ちました。無事、定年退職を迎えられましたのも、連大をはじめ鹿児島大学の皆様に支えられてのことと改めて感謝申し上げます。

大学に転任してから1年後に連大主指導教員資格を得て、博士課程の学生を指導することができるようになり、留学生4名を含む多くの院生を指導しました。博士課程の院生がいることで研究室の学生の研究に対する態度が明らかに前向きになりました。また、常時留学生がいたので、学生の国際的感覚が少し養われた気がします。私自身は、研究に対する熱意を保ち続けることができました。これも連大からの種々の支援のおかげです。

一教員として連大にあまり貢献できず申し訳ありませんでした。退職後も連大の益々の発展を祈っております。

### お世話になりました



琉球大学教授 農学部  
玉城 政信

2005年度から琉球大学に12年勤務させていただいき、それを機に「鹿児島大学大学院連合農学研究科」にお世話になることとなりました。沖縄県庁で29年勤務したせいもあって、大学の教授会運営には全くの別世界にきた感がいたしました。このような私を、親切に対応していただいた連大の先生方、職員の方々に感謝申し上げます。

私は1976年沖縄県庁に入庁、1989年に県畜産試験場大家畜研究室に配属された。そこで、乳牛の暑熱防止技術の一環として、「バイパス油脂」、「バイパスアミノ酸」、「ビタミンE高濃度牛乳」、管理応用技術としての「乳用初産牛の難産防止技術」、「子牛ベッド」、「体型と産乳性」、黒毛和種の研究として「経済性の高い子牛生産のための種雄牛選定」、「黒毛和種の徐角」、「受胎率向上技術」、「乗駕発見棒」、「飼槽高さ」と飼料摂取量」、「血清中ビタミンA濃度水準と肉質」、「牛舎床面と蹄の状況」などを行った。琉球大学に配属されてからは、同僚教員や学生とともに「飼養管理状況と分娩間隔」、「黒毛和種の妊娠長期化」、「ギンネムの制御」、「泡盛もろみ酢粕の子牛飼料としての利用」、「法面の牛放牧利用」、「放牧牛の行動調査」などを行った。研究・教育に関するどの分野もその奥深さは大きなものがありますが、鹿児島連大に参加することにより、鹿児島大学および佐賀大学の教員との交流が増し、私自身の研究・教育に他大学教員の知恵を大いに利用させていただきました。また、鹿児島連大教授会は、琉球大学教員同士の連携にも一役かっってもらった経験があります。数年前、連大教授会が終了し、鹿児島空港で帰りの便を待っていると、急遽、欠航のアナウンスがあり困り果てていたところ、6名が空港近くの宿に泊まることとなりました。その夜、普段は分野が違うため話す機会がほ

とんどない教員とも打ち明けて会話ができ、その後のネットワークがうまく機能しています。

博士課程で指導した学生は少ないが、学生の潜在能力や実行能力の高さなどがみられ、有意義な時間を共有することができ幸せを感じます。彼らは学位を取得し、研究者として各方面で活躍していますが、その中でもまだ学位を取得していない者もあり、残られる先生方に面倒をみてもらうこととなりますが、よろしくお願いをいたします。

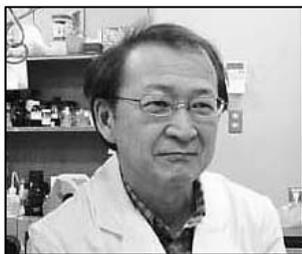
2017年3月で定年退職を迎えるが、大変充実した教員生活を送ることができしみじみと、その喜びを感じているところです。

最後に、今後の鹿児島大学大学院連合農学研究科のますますのご発展と教員および職員のご活躍を祈念しております。

鹿児島大学教授 水産学部 増田 育司

琉球大学教授 農学部 高野 良

## ◇旧代議委員の挨拶



生物環境保全科学専攻  
生物環境保護学連合講座  
佐賀大学教授 農学部  
早川 洋一

今、この拙文を書き始めて、まず第1に想起されるのは、鹿児島大や琉球大の代議員そして事務の方々との色々な場面での会話のようです。普段の大学での生活では、自らの専門と全く異なる分野の方、あるいは、他大学の方々との交流は滅多にありません。しかも、それが2年間に涉ってほぼ毎月1回顔を合わせる訳ですから、何とも貴重な体験でしたし、記憶に残らないはずがありません。ただ、皆さん本当に良い方ばかりで、会議の席上、さらに、会議の後の懇親会における雰囲気も大変心地好いものだったと思ひ返されます。

代議員としての貢献など皆無であったにも拘らず、時として口を衝いて出てしまった当方の極論をも暖かく受け入れていただいた皆様にはただ感謝するばかりです。私も定年まで僅か4年となりましたが、代議員を終えた今、少なくとも定年までは連大の発展に積極的に貢献したいという思いを新たにしております。2年間、本当にありがとうございました。

## 代議員を終えるにあたり



応用生命科学専攻  
食品機能科学連合講座  
佐賀大学教授 農学部  
濱 洋一郎

平成29年3月をもちまして二年間の代議委員任期を終えることが出来ました。この間、杉元研究科長、靱井研究科長をはじめ、大富副研究科長、寺田副研究科長および代議委員の先生方には大変お世話になり、ありがとうございました。また、連大のルールに対する知識が不足している状態で就任したにも関わらず、こうして無事に任期を終えることが出来たのは、一重に連大事務係の方々の強力なご支援の賜物と、深く感謝しています。

私は、代議委員として教務委員会、入学試験検討委員会に携わりました。また、一般セミナーは一年目に鹿児島大学農学部、二年目には琉球大学で開催され、学外講師の先生を選定する役割も務めさせていただきました。ほぼ毎月開催される代議委員会のみならず、一般セミナー、人材養成セミナー、入試などを経験するにつれて、連大のシステムの素晴らしさが実感でき、連大創設時から今日に至るシステムを構築されてきた先生方に対して畏敬の念を感じざるを得ませんでした。また、連大生からも、一般セミナーでの発表や学位論文審査会などを通じて、私自身の教育研究に対する情熱を活性化してもらえました。

多くの代議委員経験者の先生がおっしゃっておられるように、代議委員を務めることにより、通常では交わることのない多くの異分野の先生方をはじめ事務の方々とも親交を深めることが出来ました。これは、今後の私の人生の貴重な財産になると確信しています。

教務委員会、入試検討委員会が14時から、代議委員会が15時から開始と決まっていたので、佐賀駅発のJR特急に乗車して新鳥栖で新幹線に乗り換えるという経路、時間もルーチン化し、新幹線車中での座席も毎回同じところに座って鹿児島中央駅に向かい、中央駅からは甲南高校の前を歩いて鹿児島大学農学部に向かう、というパターンも二年目には確立しました。今年3月の代議委員会、学位授与式後に開催していただいた代議委員会の送別会の席でも申し上げましたが、ほぼ毎月同じ場所に二年間通い続ける、という経験が今までにありませんでしたので、任期末の頃には、鹿児島に来た、というよりも、鹿児島に帰ってきた、という気分になっていました。送別会の翌日には、一人でフェリーに乗って桜島に渡り、桜島の雄姿を最後に目に焼き付けてから佐賀に戻りました。

連大はシステムがよく整備されていますが、最終的には人と人の交流や信頼関係によってそのシステムが維持され機能していると感じています。今後効率化を求められることが予想されますが、交流の場も大切にしてください、益々連大が発展することをお祈りしています。私個人としては、連大生を連れてまた鹿児島に「帰れる」ように努力し、少しでも連大に貢献したいと思います。

## 代議委員を終えて



生物生産科学専攻  
動物資源生産科学連合講座  
鹿児島大学教授 農学部  
中西 良孝

この度、代議委員の任期を満了しました。当初、連大学生への指導業務の他に管理運営業務が加わることに對して多少の不安と戸惑いがありましたが、他の代議委員の先生方や事務職員の方々の支えもあり、お陰様で何とか2年間の職責を果たすことが出来ました。また、任期2年目に専攻長を拝命したことも貴重な経験となりました。

代議委員会での重要課題の1つに3年以内での学位取得率の向上があります。私も在籍期間3年を超えた社会人学生（社会人入学ではなく、2年次に県職として就職）を抱えており、代議委員の任期中に何とか取得させなければと思ひ、県職としての業務と学業の両立することの難しさに悩む学生本人には何度も尻を叩いて指導し、任期の最終年にやっと取得させることが出来ました。代議委員であれば模範となるよう率先して3年以内で取得するよう指導しなければならなかったのですが、在籍中に進路変更という学生本人の事情があったとは言え、4年もオーバーしたのは私の指導不行き届きの至りで、反省しております。ともかく、在任期間中に学位取得させることが出来て安堵しており、肩の荷が下りました。

代議委員を経験して有難かったのは、何よりも多くの方に出会い、交流出来たことです。佐賀大学や琉球大学での会議のための日程調整に苦慮したこともありますが、出張先でのafter-fiveでは、他大学の代議委員の先生方や事務職員の方々と懇親を深め、地元の酒肴に舌鼓を打ちつつ専門分野が異なる先生方と杯を酌み交わし、微醺を帯びて話が盛り上がったことが楽しい思い出となっております。

入試や学位論文公開審査会などで他大学の先生方と接する機会もありますが、どうしても同じ分野の方との交流になってしまい、異分野の方と接する機会はなかなかありません。その点、代議委員会では学部・大学横断的な付き合いとなり、より広い視野からの意見やアドバイスをいただくことが出来ました。また、各種セミナーにおいていろいろな立場の講師の先生方や学生の皆さんと交流出来たことも有難く思います。これらのことが学生の論文指導において傍目八目の視点につながったものと思います。

この2年間で多くの知己を得たことは私にとっての知的財産（知識を意味する「知」ではなく、知人を意味する「知」の財産）になるものと信じており、改めて人生とは邂逅の連続であり、それに対する謝念を抱いている次第です。

末筆ながら、前研究科長の杉元康志先生や現研究科長の靱井和朗先生をはじめ、連大関係者の方々には大変お世話になり、心よりお礼申し上げます。特に、事務職員の方々には様々な面でご協力いただき、感謝しております。

### 連大代議員の退任のご挨拶



農水圏資源環境科学専攻  
生物環境保全科学連合講座  
鹿児島大学教授 農学部  
境 雅夫

平成27年度から2年間にわたる代議員としての活動を終えて、ほっとしているところです。鹿児島大学に平成17年12月に赴任して、次の年の9月から主指導教員として連大に参加し、この間10年が過ぎましたが、これまで主指導教員として学生を送り出した実績は1名のみであり、現在やっと2人目を指導している状況です。連大における学生教育への貢献や経験はそれほど多くはありませんが、副指導教員として、佐賀大学、琉球大学といった他の大学や鹿大水産学部などの多くの学生の指導のため、行き来しながらのアドバイスや議論を行う過程でよい経験をさせていただきました。博士課程の学生の指導は学生と教員の1対1の関係になりがちですが、副指導教員の立場から異なる角度や分野から指導・アドバイスができたように思います。また、私が主指導している学生については、他大学の副指導の先生方から、こちらが考えつかないアドバイスをいただき、おおいに学生の研究の進展に効果を上げています。近年の人件費削減にともなう教員の補充停止の影響を受け、学内の教員だけでは十分な指導体制が確保できなくなっている現状では、連大の枠組みは特に貴重です。また、連大における講義やセミナーについても、学生は所属以外の大学の教員の講義を受けることができたり、他大学の博士課程の学生と交流・議論する場が設けられていたりするため、学生の視野も広がることが期待できます。異なる視点からの指導や多様な学生との交流を通して、博士課程における研究、学習などの経験ができる、このような体制は連大のよい特徴であり、これからも維持していくべきと思います。

ただしその分、代議員の仕事が重要（大変）であることも実感しました。様々な講義の講師の選任や共通セミナーの準備・運営などがあり、これまでも代議員の先生方に支えられてきたことがよくわかりました。また、毎月1回の会議があり、時間の確保に苦労しましたが、異なる大学や分野の先生方の意見をうかがい、組織運営の違いや教育の考え方の違いなどがあることを知ることができ、有意義な経験をさせていただきました。

今後は、連大の構成教員としてわずかながらでも貢献できるよう努めて行きたいと思います。2年間ありがとうございました。

### 代議員を終えて-雑感-



応用生命科学  
先端応用生命科学  
琉球大学 農学部  
屋 宏典

2015年4月から2年間連大の代議員を担当させていただきました。今、2年前のニュースレター  
の原稿をながめつつ、毎月一度は鹿児島に出張して代議員会に参加した日々がなつかしくもあり、なん  
とか皆様にご迷惑をおかけすることなく職務を終えることができたことにほっとしたり、感謝したりの  
この頃です。長い間連大にはお世話になる一方で、代議員の責務を免れつつけていることに若干の罪悪  
感も感じておりましたが、この度の代議員の職責を果たしたことで少しは恩返しができるのではないかと  
こころもち安心したりもしております。また、遅きに失した感もありますが、代議員を務めることによ  
り連大のシステムをやっと理解できたようにも思います。その意味においてもこれまでの連大の発展  
にご尽力いただきました研究科長、代議員のかたがたに改めて感謝申し上げたいと思います。本当にあ  
りがとうございました。

代議員の職責は時間を割かれますので、負担に感じることも無きにしもあらずでした。ただ、2年間  
の活動を通じて他の大学或いは同じ大学の教員と親睦を深める機会にもなりました。教授会でお会いす  
るだけでなかなか親しくお話する機会がない先生方と代議員会の懇親会でゆったりした雰囲気の中  
で、いろいろなお話をさせていただき、新しい接点が見いだせたのも私にとっては財産となりました。  
また、懇親会の場所も鹿児島、佐賀、沖縄と場所をかえ、その土地々々でのおいしいものをいただけ  
たのも楽しい思い出です。

また、去年は琉球大学が一般セミナーの当番校となっており、鹿児島、佐賀の教員及び学生さんと沖  
縄の地でお会いでき、充実した時間をすごせたことにもやりがいを感じました。このセミナーの実施は、  
ひとえに琉球大学農学部の事務職員の献身的なご尽力および連大事務の方々のサポートによるもので  
あり、裏方としての努力に頭が下がりました。この紙面をお借りして、感謝の意を申し述べさせてい  
だきます。本当にありがとうございました。

また、代議員の仕事とあわせて、主指導教員としての責務も2年間大過なく果たすことができ、3人  
の博士を世に送り出すことができたのも幸いでした。学生さんとの協同での研究は苦しい場面もありま  
したが、終わりよければすべてよしというところでしょうか。研究室のメンバーに対しても感謝してお  
ります。私の手のとどかない部分をカバーしていただき有難うございました。

いろいろと申し述べましたが、連大は学生にとって、また教員にとっても素晴らしいシステムだと思  
います。今後の益々のご発展を祈るとともに、私も構成員の一員として貢献できるよう努力したいと思  
います。

## ◇新代議委員の挨拶

### 代議委員就任にあたって



応用生命科学専攻

生物機能化学連合講座

佐賀大学教授 農学部

小林 元太

平成29年より初めて代議委員を務めることになりました。平成28年度の学科長の任務も終盤になりホッと安堵していた頃、前委員の濱先生から連大代議委員就任の打診がありました。佐賀大学農学部副学部長としての務めもあり、お話しを伺ったときは戸惑いもありましたが、各構成大学の先生との交流が広がるということで、有り難くお引き受けすることにしました。靱井研究科長のもと連大の発展に向けて頑張りたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

私の専門分野は応用微生物学分野で、後藤正利教授と協同して、乳酸発酵、アルコール・有機酸発酵を中心とした微生物の有効利用に取り組んでいます。特に、生ハム製造や日本酒製造の生酏・山廃造りに不可欠な低温性乳酸菌や新規抗菌性物質生産能を有する乳酸菌の分離と性状解析、*Clostridium*属細菌を用いた未利用資源からのアセトン・ブタノール発酵の効率化などに取り組んでいます。さらに、地元の酒蔵と共同して佐賀大学オリジナル日本酒「悠々知酔」の製造にも携わっており、毎年研究室の学生諸君とお酒造りの醍醐味を満喫しております。佐賀県の前海である有明海は広大な干潟を有しており、その有効利用が期待されており、新しい酵母や乳酸菌等の分離源として今後の日本酒醸造等に利用していきたいと考えています。趣味が釣りなので、構成大学の水産関連の先生方との交流や、沖縄や鹿児島島の海を見るのが密かな楽しみの一つです。また、日本酒のみならず焼酎も泡盛も大好きなので、発酵産物を飲むだけでなく、それぞれの発酵微生物の育種や応用等の分野でも様々な先生方と交流していきたいと思っています。

これまで、連大では博士論文審査委員としての役割と、分野別セミナー（農芸化学）を佐賀大学で開催したときに関連の先生方を酒蔵にご案内したくらいですので、連大の代議委員の職務は十分に理解できておりません。しかし、これまで培われてきた連大の仕組みは、構成大学間の緻密な連携と協力により成り立っているもので、非常に貴重な組織であろうと思っています。学生・事務・教員連携のもと、我々の教育研究の基盤組織として引き続き支えていきたいと考えます。

## ご挨拶



生物生産科学専攻  
動物資源生産科学連合講座  
鹿児島大学教授 農学部  
三好 和睦

本年度より連合農学研究科の代議委員を務めることになりました、鹿児島大学の三好です。ご迷惑をお掛けすることも多々あるとは存じますが、精一杯務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私が大学院博士課程に進学したのは25年前のことですが、3年間の博士課程における体験は研究の魅力を痛感させ、その後の人生を決定付けるものでした。当時、私が在籍した研究室では哺乳動物の受精卵を対象とした研究が行われていました。哺乳動物の受精卵は雌の体内で発生するので、研究を行うためには、まず体内と同様に体外発生させ得る培養液を開発する必要があります。そこで多くの動物種において各々に適した体外培養液が開発され、それをを用いて受精卵に関する新知見が次々に得られていました。ところが、マウスと共に実験動物として広く用いられているラットの受精卵を体外発生させることには、誰も成功していませんでした。ラット受精卵を体外培養すると、翌日にはほぼすべてが2個の細胞に分裂して2細胞期胚に発生します。しかし、発生はそこで停止し、培養を継続してもそれ以上分裂する胚は全く現れませんでした。このような2細胞期での完全な体外発生停止現象は「2-cell block」と呼ばれ、多くの研究者が多大な労力と時間を費やして研究を積み重ねてきたにもかかわらずその原因が解明されなかったことから、ラット受精卵の体外培養は不可能なのではないかという意見も出される始末でした。在籍した研究室でラットが飼育されていたことから、私はこの2-cell blockを解除する方法を見つけるための研究を始め、最終的に当該現象が2つの要因によって引き起こされていることを明らかにしました。1つ目の要因はリン酸の存在です。自然条件下において受精卵が発生する場である卵管液中にリン酸が含まれていることから、培養液にもリン酸を添加する必要があると考えられてきました。ところが、 $10\mu\text{M}$ という極めて低い濃度のリン酸を培養液に添加するだけで、2-cell blockが引き起こされたのです。2つ目の要因は不適切な浸透圧でした。本来の発生場である卵管液の浸透圧が $300\text{mOsm}$ 前後であることから、培養液の浸透圧もそれと同等の値に調整されてきました。しかし、そのような浸透圧下ではリン酸を含まない培養液を用いてもほとんどの受精卵が2-cell blockを引き起こしました。対照的に、培養液の浸透圧を $250\text{mOsm}$ 前後まで低下させた場合には、ほとんどの受精卵において2-cell blockが解除され、多くが胚盤胞という着床直前の段階にまで体外発生したのです。これらの知見をもとに、リン酸を含まない低浸透圧のラット受精卵用培養液を開発することに成功しましたが、この培養液が非生理的であることは明らかです。おそらく、「体内環境に近い条件を備えた培養液が最適であるはずだ」という思い込みが、長い間ラット受精卵の体外培養に成功しなかった原因だったのでしょうか。この経験は、生物を対象とした研究においては論理的に導かれる仮説が正しいとは限らず、一見あり得ないと思える仮説も実験によって確認されるまでは排除すべきではないということを教えてくれました。同時に、研究によってそれまで謎とされてきたことを解明することが、体験したことのないような興奮や達成感をもたらすことを知り、自分も研究者という職業に就きたいと強く願ったものです。

連合農学研究科の学生にも研究の面白さに気付いて欲しいと願っています。そのような学生が1人でも

増えるよう、代議委員としてサポートしたいと考えています。

## ご挨拶



生物生産科学専攻  
地域・国際資源経済学連合講座  
鹿児島大学教授 農学部

豊 智行

この度、初めて代議員に就任しました鹿児島大学農学部の豊 智行と申します。鹿児島大学農学部には2008年10月に着任し、その後、大学院連合農学研究科では2009年から副指導教員として、2012年から主指導教員として指導にあたっております。

鹿児島大学農学部の地域・国際資源経済学連合講座に所属する教員については、代議員の任務は回って来ないようなことを、同じ所属の上の先生から聞いてましたので、よく調べることもなくそのように思っていました。ところが、不意をつかれたように、鹿児島大学農学部からの平成28年度までの講座外選出代議員の境 雅夫先生から次は私の番だというご連絡があり、順番についてご説明をいただき、その後任を引き受けました。

それまでに代議員は大変と聞いていましたし、現在も代議員についてよく分かってはいませんので、不安は否めません。しかし、まず、沖縄、佐賀に行く機会が増えることは旅が好きな私にとって望むところであり、また、様々な教育研究分野の先生方とより密に交流できる機会に恵まれることは確かですので、新たなものを吸収して参りたいと思っております。

専門科目は農業市場学ですが、研究については、農産物取引における価格支配力の発現メカニズムと実証、農産物の輸出拡大、食品の安全性に関する買い手の判別と需要の関係、農業・食品製造業に由来する副産物の需給と価格形成の理論を課題として取り組んでいるところです。研究フィールドは国内外を問わず、いかなる事例を研究対象としても、それを分析する普遍的な理論と方法を構築することを重視し、その達成を目指しています。また、どれも市場に関する研究ですが、市場原理に委ねては社会に望ましくない状態となっている場合には、その因果関係を説明し、それを解決する制度的な課題、技術的な課題を指摘していくという姿勢でおります。

現在は3名の学生の主指導教員です。3名とも留学生で、1名は中国から2名はベトナムからです。中国からの留学生は中国における資源循環型農業システム、ベトナムからの留学生の一人はメコンデルタ地帯における稲作の契約農業、もう一人はメコンデルタ地帯における唐辛子のマーケティングチャンネルに関する研究を行っています。彼らの研究課題と私の研究課題は重なっていますので、必然的に彼らとの研究室での議論や日本とは異なることも多い留学生の母国の現地実態を調査することは私にとって非常に新鮮で、楽しく、有意義なものとなっています。ただ、そうは申しましても、まだ、一人も博士学位を授与された学生を主指導で育てたことがありません。すでに4年目の学生もいます。どのように育てたらよいのか考え、試行錯誤している最中でもあります。

連大では、普段は教育で交流することの少ない佐賀大学や琉球大学の先生が主として指導されている学生の副指導教員になることがあります。そのことは特に博士課程学生への教育について学ぶ絶好の機会でもあると思っています。また、他大学の副指導教員からの学生へのご指導は別の視点からの貴重かつ重要なものだと感じています。指導教員としての経験も浅く、また連大のシステム、その中での代議員の任務についても分かっていないことばかりですが、これから代議員として微力を尽くして参ります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## 人を育てる職業-博士課程学生の人材教育は楽しい・でもつらい

農水圏資源環境科学専攻  
水産資源環境科学連合講座  
鹿児島大学教授 水産学部  
西 隆一郎

私は、陸と海の境界にある海岸（なぎさ）を主な研究対象にしています。大学で働き始めてから論文博士の学位取得に13年かかり、何回か辞め時かなと思いましたが、自分の師匠がよく我慢してくれたものだと感謝しています。師匠との関係は良好でしたが、10数年間、他の教員のハラスメントに悩まされたので、学生さん達はその様な事で研究断念しない様に気にかけている次第です。水産学部移籍後に主指導教員（主査）として面倒を見た10名の学生さんは、本体の学部とは無縁の所から誰かに頼まれた学生さんがほとんどです。どうも、水産の学生さん達には人気が無いと反省しています。

私が連大に参加したほぼ10年前は、理工学研究科に2名の学生を在籍させた状態でした。連大へ学生を転籍できず、水産学部内の近場の研究室に年齢が30代後半の留学生と50代の2名分の机を間借り状態し、学生指導を行いました。学生の所属先を変更できないと、正式な研究費無し・研究スペース無し状態で学生指導を行うこととなりますので、移籍は負担が大きいと感じたものです。しかし、二人とも今では大学の教授と准教授なので良い思い出です。その後、私の師匠が退職する時に留学生をそちらで面倒を見ろと頼まれました。躊躇したのですが、スマトラ沖地震津波後でインドネシアの海岸保全のためと思い、また、国費奨学金の受給上の問題もなかったので、学生を引き受けました。まじめで英語能力も高かったのですが、数式理解やプログラミングなどの基礎学力が貧弱で、3年では学位が取れず帰国しました。しかし、帰国一年目に2編目の論文が受理され、連大入学後4年で博士の学位を連大から授与されましたので、本人のやる気さえあれば何とかかなると思ったものです。また、ほぼ同時期に博士課程の無い大学の先生から、沿岸域の生態系を支える栄養塩供給機構に関し研究したい学生を頼まれました。個人的にはかなり難しい研究内容と思いながら本人の意志を尊重したのですが、入学後1年半ほどは、最大限の努力をしながらも成果なしの暗中模索状態の日々でした。そして、ある日、途方に暮れながら研究内容をどうするか議論していたら、突然、当方にコロンブスの卵みたいなアイディアが浮かび、その後、現地調査や実験、数値解析的な考察が順調に回り始め、残りの1年で論文を二つ書き、連大で無事に学位を取得できました。とても優秀な学生で3年で学位を取得したのですが、最初の一年半はまさしく薄氷を踏む日々が続く、博士論文研究の怖さを再認識した次第です。実は、教員が一人しかいない

研究室なのに、5人の博士課程学生が所属していた時期があります。博士課程学生の指導に関し精神的に最もつらい時期でした。あの指導教員なら博士論文を書いてくれるので、博士号と共に帰国できるとどうもアドバイスされた同じ大学からの高齢研究者集団を引き受けたのが原因でした。こちらの善意は振り回され、他の学生に悪影響を与え、自分自身とても反省すべき事態となりました。基礎学力も意欲もない学生を博士課程に引き受けてはいけないという当たり前の教訓と目利きの大事さを再認識した次第です。

最後ですが、私の研究室の外部資金で薄給の非常勤技術職員をしながら、別の分野で論文博士号を狙う30代の（半）社会人がいました。私の研究能力よりも彼の能力が高い事に気づき、最大限サポートしたところ、流体力学系と可視化情報系の論文それぞれに対し二つの学会から論文奨励賞を授与され、連大からも論文博士号を授与されました。また、昨年3月に社会人早期修了プログラムで課程博士を授与された30代後半の学生は、家庭事情で大学教育を受けていないにも関わらず、本人の努力で今年の四月から他の国立大学の准教授になりました。博士学生さん達の頑張りとはキャリアアップを見ていると、人を育てる教員商売はやめられないと言えそうで、学生さん達に感謝しています。

## ご挨拶



応用生命科学専攻  
先端応用生命科学連合講座  
琉球大学教授 農学部

平良 東紀

この度、代議員を仰せつかりました琉球大学農学部の平良と申します。鹿児島連大では、これまでに研究室から2人の博士号を出していただくなど、大変お世話になっており、代議員という仕事を通じて少しでも鹿児島連大に恩返しができたらと思っています。現在の研究室においても、社会人ドクター1名を含む2名がお世話になっています。他にも研究室には修士が3名、学部学生が4名、そして私と上地敬子助教の合計11名で、日々研究に邁進しています。

我々の研究室は「応用微生物学研究室」という名前でも50年間続いている歴史ある研究室です。当山清善教授をはじめとする本研究室の歴代の先生方は多くのご功績を残されており、その後を引き継ぐことに重圧を感じておりますが、研究室の伝統を引き継ぐと共に、新しいことにもチャレンジして行きたいと思っております。伝統的には、泡盛醸造に係わる微生物及びその酵素の研究を行っており、最近では泡盛蒸留粕の有効利用、乳酸菌とその利用に関する研究、植物の生体防御蛋白質の構造と機能に関する研究を行っています。泡盛醸造に係わる研究では、泡盛の古酒香の1つであるバニリンの生成過程に係わる酵素の構造-機能、その発現誘導に関する研究を麴製造会社と共同で行い、香り豊かな泡盛古酒の製造に役立てることを目標としています。また、泡盛製造過程で得られる蒸留粕の有効利用についての研究開発も精力的に行っており、その成果として今年度5月に泡盛蒸留粕を乳酸菌で再発酵させた新規乳酸菌飲料が県内泡盛酒造メーカーから発売されています。その他にも泡盛蒸留粕の飼料化に向けた技術開発を養豚農家および泡盛酒造所と協力して行っています。風味豊かなヨーグルト製造に適した乳酸菌

のスクリーニングを沖縄の自然界から酪農家さんと一緒に行っています。これらの共同研究は、最初は研究と呼べるものではなかったのですが、進めて行くうちに魅力的な研究要素が多くあることに気づかされました。泡盛蒸留粕の研究では、蒸留粕中に乳酸菌の増殖因子があることが分かり、現在その同定を進めています。蒸留粕の飼料化においては、真菌類による飼料の腐敗を乳酸菌が抑制するメカニズムや乳酸菌の育種によって不足しているアミノ酸を作り出すなどの研究ニーズがありました。ヨーグルト製造では、複数の乳酸菌を用いることにより乳中での発酵が飛躍的に進むことが分かり、現在は乳酸菌同士の増殖因子の探索を行っています。基礎研究としては、植物の生体防御タンパク質であるキチン分解酵素（キチナーゼ）の構造と機能に関する研究を精力的に行って来ました。植物由来キチナーゼはカビの主な細胞壁構成成分であるキチンを分解することにより、その侵入・生育を阻止する生体防御タンパク質と考えられています。私たちは、これまでに蓄積して来たキチナーゼの構造と抗カビ活性の相関に関する知見に基づき、タンパク質工学的手法を用いて「最強の抗カビ酵素」を創出することを目標にしています。抗カビ酵素の研究開発は、生活現場における安全なカビ防除剤や医療における有効な抗真菌剤としての利用が期待されています。

このような研究を進めていく上で、鹿児島連大に属していることは大きなメリットになっています。教員にとっては他大学の先生方との情報交換や共同研究を行えること、また学生にとっても他大学の同じ志しを持つ学生さんとの交流が、研究のためにも、卒業後のためにも大きな財産になっていると思います。鹿児島連大および構成大学が共に発展するために、代議員として微力ながら貢献できるようにがんばって行きたいと思いますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

農水圏資源環境科学  
生物環境保全科学連合講座  
佐賀大学教授 農学部  
染谷 孝

◇新入生の素顔

平成 28 年 10 月入学 (9 名)

**【生物生産科学専攻・Science of Bioresource Production】**  
**地域・国際資源経済学・Regional and Global Resource Economics**

ティ ゴ ク トウ オン  
Thi Ngoc Thuong (Vietnamese)



Title of Research: Farmers' Adaptive Strategies for Sustainable Farm Economy under Rapid Changes of Socio-Economic Conditions: Focusing on Land Revocation and Contract Farming in Bac Giang and Hai Duong provinces, Vietnam.

Advisory Professor: Prof. Dr. Tsukasa INAOKA (Saga University)

First Vice - Advisory Professor: Assoc. Prof. Dr. Kazunari TSUJI (Saga University)

Second Vice - Advisory Professor: Prof. Dr. Tomoyuki YUTAKA (Kagoshima University)

My name is Nguyen Thi Ngoc Thuong. I was born in 1985 in Bac Giang province, Vietnam.

I work as a lecturer and researcher at department of resources and environmental economics, faculty of economics and rural development, Vietnam National University of Agriculture (VNUA) in Hanoi, Vietnam.

As a lecturer, I am teaching three subjects for undergraduate students, which are geographical economics, land economics and real estate management. As a researcher, I am taking part in projects of our department and faculty, especially in some projects to solve socio-economic problems of vulnerable people in rural areas.

I have graduated my master at Khon Kaen university in Thailand, majoring in rural development management under the scholarship of Southeast Asian Regional Center for graduate study and research in Agriculture (SEARCA).

With aims to further enrich my knowledge for my professional career, I have applied for the doctoral course at The united graduate school of agricultural science, Kagoshima university, under the scholarship of Vietnamese government.

For this doctoral course, my research is about farmers' adaptive strategies for sustainable farm economy under rapid changes of socio-economic conditions in my home country. Especially, I focus on two issues which are land revocation and contract farming in Bac Giang and Hai Duong provinces. The study expects to analyze farmers' adaptive strategies for sustainable farm economy in Bac Giang and Hai Duong, as it has been successfully applied for other areas in Vietnam.

I wish that the doctoral course will equip me with more professional knowledge and practical experience so that I can deliver more effective lectures to students after returning home. I want to transfer the best of my knowledge to all students and support them to have better chances for their career in the future. Besides that, in research, I hope all knowledge about agricultural economics gained from this course will help me enhance my research capacity, so I will be able to involve in and carry out more rural development projects to help farmers in my country have higher income and a better life.

Holding these desires and honorably be a student of The united graduate school of agricultural science, Kagoshima university, I will do my best to successfully complete the doctoral course and join hands to the development of my faculty, my university and my country in the future.

## 【応用生命科学・Biological Science and Technology】

### 生物機能科学・Bioscience and Biotechnology

瀬戸口 翔 (日本)



研究 題 目：芋焼酎の香味改善に関する研究黒麹由来の抗菌活性成分に関する研究

主 指 導 教 員：玉置 尚徳 (鹿児島大学)

第一副指導教員：二神 泰基 (鹿児島大学)

第二副指導教員：外山 博英 (琉球大学)

こんにちは、鹿児島大学所属の瀬戸口翔です。現在は宮崎県都城市にある霧島酒造株式会社に勤務しており、今回は社会人ドクターとして入学しました。

私は鹿児島大学農学部を2009年に卒業し、鹿児島大学大学院農学研究科を2011年に修了しました。5年6ヶ月が経ち、再び故郷でもある鹿児島で学ぶ機会をいただけたことに感謝したいと思います。今回は社会人として学位取得を目指すこととなりますが、学生の頃から現在まで取り組んでいる仕事の内容はほとんど変わっていません。学生時代は農学部の焼酎学講座（現焼酎・発酵学教育研究センター）で焼酎製造に用いられる麹菌の育種に関する研究を行い、大学院でも同じ研究を続けました。2011年に現職である霧島酒造(株)に入社し、研究開発部に配属されました。職場では焼酎麹菌の研究や焼酎の製造法に関する研究を行っており、まさに焼酎漬けの日々を送っています。また、この度主指導教員を引き受けてくださった玉置先生は学生時代の恩師ということもあり、非常に心強く感じているところです。

入学後の研究テーマは微生物を利用した芋焼酎の香味改善に関する研究と黒麹に含まれる抗菌活性成分に関する研究です。焼酎はほとんどが水とエタノールで構成されており、全体の1%未満の成分で香味が決まる非常に繊細なお酒です。これまでの研究により良い香気成分や悪い香気成分は見つかっていますが、それらの香気成分を制御する方法は不明な部分も多いのが現状です。良い香りは伸ばし、悪い香りは除くことで芋焼酎ファンを増やすことができれば良いと思います。また、麹菌は様々な二次代謝産物を生産し、中には実用化されている機能性成分もあります。今回見出された成分は未だ不明な部分が多いですが、構造解析等も実施し、有効利用の可能性を探っていけたらと思います。

これからよろしくお願ひします。そして、皆さんと焼酎で乾杯できる日を楽しみにしています。

田中 剛士 (日本)

研究 題 目：ソルガム、サトウキビの細胞壁構造と糖化に関する研究

主 指 導 教 員：金子 哲 (琉球大学)

第一副指導教員：高島 幸司 (琉球大学)

第二副指導教員：藤田 清貴 (鹿児島大学)

【農水圏資源環境科学・Resource and Environmental Science of Agriculture,  
Forestry and Fisheries】  
生物環境保全科学・Environmental Science and Conservation Biology

かこき きとし  
鹿子木 聡 (日本)



研究題目：チャ栽培における殺虫剤散布量削減に関する研究

主指導教員：津田 勝男 (鹿児島大学)

第一副指導教員：坂巻 祥孝 (鹿児島大学)

第二副指導教員：徳田 誠 (佐賀大学)

鹿子木聡と申します。鹿児島県農業開発総合センター茶業部に所属する社会人学生です。鹿大農学部（害虫学研究室）を卒業後、鹿児島県職員として働いております。入庁後は茶技術普及の現場に4年間、その後、本庁異動で農村振興・むらづくりに係る事務的な仕事を3年、再び現場へ戻り4年間、そして現所属が4年目になります。研究歴は4年目と浅いですが、現在の研究に大きな可能性を感じていること、また、そのことでじっとしていられなくなり、連大進学を決めました。

私の研究テーマは「チャ栽培における農薬（殺虫剤）の削減」です。茶（農作物）を病害虫から守るために農薬は必要なものですが、今までは「したたり落ちる程度までしっかり農薬を散布すること」が常識とされてきました。しかし、その様子を見て「過剰防衛」ではないか？害虫の天敵も「害虫の巻き添え」になっていないか？と考えたことが始まりです。

そこで、「したたり落ちない程度」に標的を絞った農薬散布を行い、農薬散布量を従来約 1/2～1/5 程度まで大幅に削減する装置を地元企業と共同開発し、実用化を図る研究に着手しました。農薬散布量の削減と、天敵類を「害虫の巻き添え」から保護活用する試みです。当初はその効果を信じてもらえないこと等もありましたが、これから再びお世話になる害虫学研究室や、理解ある方々の支えがあって、今に至ります。開発した装置の名は「かごしま式防除装置」。最近、いち早く導入した農家から喜びの声も届き始めました。

私は現在 36 歳、夫婦共働きであり、4 歳児と 2 歳児を抱えております。仕事のことも何かとあります。いろいろな意味で闘いの日々ですが、この「かごしま式」の研究は日本農業の防除のあり方を劇的に変える可能性も秘めています。この希望を胸に、「雨ニモマケズ」全力で前進したいと思っております。

## 地域資源環境工学・Regional Resource Environment Engineering

マーワナーネ ヘーワール ジャナカ プラサダ ラージャバクセ  
Mawanane Hewa Janaka Prasad Gunarathna (Sri Lanka)

Title of Research: Irrigation and Water Management Options for Sub Tropical and Tropical  
Climates: Coping Mechanisms for Changing Climate

Advisory Professor: Kazuhito SAKAI (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Tamotsu NAKANDAKARI (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Kazuro MOMII (Kagoshima University)



I am Mawanane Hewa Janaka Prasad Gunarathna from Sri Lanka. I obtained my basic degree, Bachelor of Science in Agriculture (Specialized in Agricultural Engineering) from University of Ruhuna, Sri Lanka in year 2003 with a First Class. Just after the graduation, I was recruited as a Temporary Lecturer at the Dept. of Agricultural Engineering of the same university where I graduated. I worked as a Temporary Lecturer until 30<sup>th</sup> November 2005. Then, I was recruited as a Lecturer at the Department of Soil and Water Resources Management, Faculty of Agriculture, Rajarata University of Sri Lanka with effect from 1<sup>st</sup> December 2005. Since recruited, I have been working in the Department of Soil and Water Resources Management (presently known as Department of Agricultural Engineering and Soil Science) for teaching courses and conducting researches related to the agricultural water management.

In 2007, I received Asian Development Bank - Japanese Scholarship Program (ADB-JSP) scholarship to study in International Rice Research Institute / Central Luzon State University, Philippines to pursue my postgraduate degree, Master of Science in Agricultural Engineering. During my master's program I specialized in soil and water management. I earned my Master's degree in year 2009.

Later on, I was promoted to the post of Senior Lecturer (Grade II) on 01<sup>st</sup> December 2010 and continued to serve the university. While I was working in the department as a Senior Lecturer, I have served in the various positions including Head of the department, Coordinator of the University Outreach Centre, Deputy Proctor, Deputy Director (Examinations) of Centre of Distance and Continuing Education etc. In addition, I was involved in community development activities and research activities as well.

In July 2016, I came to Japan to get a placement in University of the Ryukyus, one of the allied Universities of the United Graduate School of Agricultural Sciences of Kagoshima University. In October 2016, I was fortunate enough to enroll to the doctoral course in Resource and Environmental Science of Agriculture, Forestry and Fisheries of United Graduate School of Agricultural Sciences of Kagoshima University. I started my research work at the Department of Regional Resource Environmental Engineering under the supervision of Professor Kazuhito SAKAI; a well experienced Environmental Hydrologist in the world.

I am very much grateful to the University of the Ryukyus and the Kagoshima University for giving this valuable opportunity to study here to get great experiences about water management. I am very much happy to staying and studying here with the marvelous support extended by all the staff in University of the Ryukyus and Kagoshima University.



Title of Research: Use of Bamboo and Rice Hull Biochar to Enhance the Quality and Postharvest Life of Japanese Strawberries, *Sagahonoka* during Transportation and Storage

Advisory professor: Munehiro Tanaka (Saga University)

First Advisory professor: Zheng Shao-Hui (Saga University)

Second Advisory professor: Daisuke Hamanaka (Kagoshima University)

Hello, I'm Sakalya from Sri Lanka. I came to Japan, in February 2016, following my husband, who came here for higher studies. My country was called as Ceylon back in the history and it is famous for fine Ceylon Tea, stunning beaches, abundant wild life and many other attractions.

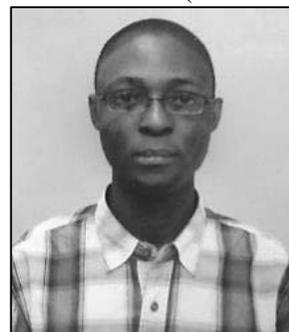
I love traveling and experiencing the different cultures, scenery, food, exclusive festivals and crafts in different regions. Therefore Japan is like a heaven for my wanderlust. Other than the beauty of Japan, people's friendliness, kindness and self-disciplined nature admired me and makes my stay in Japan happy and comfortable.

In Sri Lanka, I Completed both my Bachelors and Masters in University of Peradeniya, one of the most beautiful and high quality education institutes in South Asia. After that, I worked in the same University as an English Instructor for two and half years (Teaching English for Academic Purposes). While completing the research component required for Bachelors', I developed interest on the field of postharvest technology specially for fruits and vegetables. It made me continue my further study in Masters' as well as in doctoral on preventing ethylene action for a longer postharvest life. I think starting doctoral study in Saga University in this October (2016) is like a new chapter in my life; Constant support given by my sensei, Prof. Tanaka, other two advisory professors and my fellow lab mates, has made it an easier and an enjoyable time.

As well as my research studies in Saga University, I want to improve my Japanese language ability to a higher level, so that I can have a closer look in to the way of living in Japan, get closer to their hearts and share those good things in my country and vise versa. It is still the beginning of my three years of hard study. I want to make sure that the study I do benefit, both my mother country, Sri Lanka and Japan. I'm looking forward for the good days to come and will work hard for that!

## 水産資源環境科学・ Fisheries Science on Resources and Environments

トホウイド オリビエ オスワルド アディシン  
Tohouindo Olivier Oswald ADISSIN (Beninese)



Title of Research: Nutritive values of microalgae in Kuruma shrimp, *Marsupenaeus japonicus* (Bate) culture

Advisory Professor: Manabu ISHIKAWA (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Shunsuke KOSHIO (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Ryuta TERADA (Kagoshima University)

Hi, I am Olivier ADISSIN student in laboratory of Aquatic Animal Nutrition. I am from Benin in West Africa. BENIN is a country where traditional religion and many others are cohabiting in peace. In my country, I graduated from The Faculty of Agricultural Sciences where I studied Agronomy with focus on Aquaculture and I completed a Master in Fisheries and Aquaculture at University of Abomey-Calavi.

My interest for Aquatic resources production has grown since Master Courses so I came in Kagoshima University in order to pursue my training. Kagoshima has humid subtropical climate looking alike my home country. Kagoshima University is very famous in Fisheries research becoming by the way one of the most favourite destination for African students.

My choice to study about shrimp was motivated by the fact that shrimp capture in my country for almost half century, nowadays leads to insufficient product to meet the market demand and over exploitation of this aquatic species.

I am going to conduct from this year experiments on shrimp and follow Doctoral Courses at Kagoshima University. I am looking forward to learning and sharing with all students and members of University. I am planning to develop shrimp culture Company in BENIN and through many countries in Africa at the end of my studies.

I like to do sport and travel by car. Thank you all very much.

Sincerely yours.

Olivier ADISSIN.

モハメド マスム ビラー  
M d. Masum Billah (Bangladesh)



Title of Research: Accumulation and toxicities of alkylated PAHs (A-PAHs) in Aquatic organisms

Advisory Professor: Seiichi Uno (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Kazuhiko Anraku (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Takeshi Yoshikawa (Kagoshima University)

Assistant Advisory Professor: Emiko Kokushi (Kagoshima University)

The student was born on 10<sup>th</sup> August 1988, in Mymensingh District, Dhaka, Bangladesh. He received his primary education at Purabari Primary School, Trishal, Mymensingh and his secondary education in 2003 at Hazi Osman Ali

High School, Mymensingh. He received higher secondary education in 2005 from Shaheed Sayed Nazrul Islam College, Mymensingh. He pursued his B.Sc. (Hons.) in Marine Science from the Institute of Marine Sciences and Fisheries (IMSF), University of Chittagong (CU), Chittagong, Bangladesh in 2011. He was awarded a Master degree in Marine Science by the IMSF, CU in 2013. In May 2015 he received his second Master degree in the field of Marine Ecology and Biology by the Universiti Putra Malaysia for the work on the occurrence, abundance and heavy metal content of mangrove macroalgae from a Malaysian estuary.

From October 2015 onwards he has been working as a PhD research student at the Research Center for Marine Resources and Environment, Faculty of Fisheries, Kagoshima University, Kagoshima, Japan under Japanese Govt. Scholarship (MEXT-2015) Programme. After passing the entrance exam on September 2016 he is now working as a regular PhD student of the United Graduate School of Agricultural Science, Kagoshima University, Kagoshima, Japan. His research interests include pollution ecology of mangroves and water quality.

ライナス アサマキ  
Linus Asamaki (Papua New Guinea)

Title of Research: Effect of Rice Protein on the Performances of Aquatic Animals

Advisory Professor: Manabu Ishikawa (PhD), Kagoshima University

First Vice- Advisory Professor: Shunshuke Koshio, Kagoshima University

Second Vice-Advisory Professor: Atsushi Yamamoto (PhD), Kagoshima University

Assistant Advisory Professor: Saichiro Yokoyama, Kagoshima University



Hello, it's my pleasure to introduce myself. I'm Linus Asamaki from Papua New Guinea. I have just entered the doctoral program in the United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University, as a first year student. Well, about my education; I have done all my schooling in Papua New Guinea except for my post-graduate studies, my master's degree and now doctoral program for my PhD degree in South Korea and Japan respectively. I have done my elementary up to senior high school in my province called Eastern Highlands Province. Papua New Guinea has 22 provinces. For my bachelor degree program, I attended University of Papua New Guinea in the Capital City, Port Moresby. My major field of study during my term there was marine biology. I finished the program and graduated in 2009 with a Bachelor of Science degree in biology. Before graduating, I was fortunate to get employed with the Papua New Guinea National Fisheries Authority in Port Moresby. I worked with the organization as a Research Assistant for three and a half years prior to getting a Korean International Cooperation Agency scholarship to South Korea and now in Japan, under the Japanese MEXT scholarship. About my achievements, not yet at the state level except for the academic awards certificates, leadership awards certificates, training certificates and short courses certificates during my employment.

My strengths are always willing to learn new things, self-motivating and dedicated towards my work. During my research phase here, my first trial project was on the effect of docosahexaenoic acid on the growth performances of kuruma shrimp (*Marsupenaeus japonicus*). I did it as a practice to understand the management aspect of the shrimps, esp. feeding regime, measuring important parameters and knowing other important requirements to manage shrimps in

general. My current research will be on the effect of rice protein on the performances of aquatic animals including shrimps and fish, specifically Kuruma shrimps, Red sea bream, (*Pagrus major*) and Olive flounder (*Paralichthys olivaceus*). The aims of this research are the substitution of fish meal with rice protein in the nutrition of kuruma shrimp and other species and taking into consideration their eventual effects on fish health. Prior to starting my experiment, I am now doing amino acid analysis on the rice protein to determine the amino acids present that are important in the making of diets for target species.

About my hobbies, I like cycling, watching movies, sightseeing, music and cooking. I like adventurous travels. I do these things esp. during my free times and in weekends. My dislikes include; endless TV commercials, people on cell phones in the checkout lines, rude and careless drivers on cell phones, racists and arrogant people.

My short-term goal is to get employed in a well reputed organization. My long term goal is to do my best in the organization that I work, fully utilize the skills I have and share information with my colleagues to solve issues and problems that arise and help make the organization grow. That's all about me. Thank you for giving me such a wonderful opportunity.

平成 29 年 4 月入学 (31 名)

【生物生産科学・Science of Bioresource Production】  
熱帯資源・植物生産科学・Tropical Bioresource and Plant Resource Production

マジュンダ エムディ サギル イスラム  
Majumder M d. Sagirul Islam (BANGLADESH)

Title of Research: Tropical Legume Crops for Red Soil Improvement and Turmeric  
(*Curcuma longa* L) Cultivation.

Advisory Professor: Md. Amzad Hossain (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Akamine Hikaru (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Michio Onjo (Kagoshima University)

Assistant Advisory Professor: Ichiro Nakamura (University of the Ryukyus)



It's my pleasure to introduce myself as a citizen of Bangladesh, a land of greenery, rivers and a wide range of diversity. The land is famous for its World's Longest Sea Beach; Cox's Bazar, Largest Delta and Largest Mangrove Forest; The Sunderban with a huge biodiversity including Royal Bengal Tiger, Dotted Deer and so on.

It was my sneaky ambition for higher studies in the field of Organic Agriculture in Japan as an excellent country for higher education and research. Getting Japanese Government Scholarship (Monbukagakusho) was the gateway to execute my dream. As a Japanese government scholar I came in Japan and enrolled as a research student at University of the Ryukyus in October, 2014. I continued onward for the Master Course in Agriculture in which I conducted a research work on Tropical Green Manure Plants for Improving Growth, Yield and Quality of Turmeric (*Curcuma longa* L) in Red Soil. I finished my Master Course in March, 2017 and then enrolled at The United Graduate School of Agricultural Science, Kagoshima University for doctoral program on Tropical Legume Crops for Red Soil Improvement and Turmeric (*Curcuma longa* L) Cultivation, in Science of Bioresource Production.

I will be contributing on improving the physical, chemical and biological properties of red soil through tropical legume crops. These acidic and nutrient deficient soils are mostly found in tropical and subtropical areas and are the third most important soil of the world, covering 13% of total land areas.

I hope to gain sufficient knowledge and expertise on Red Soil Treatment through Legume Cropping so that to implement these practices in my home country and other areas of the world as well by taking some development initiatives through my esteemed voluntary organization named BCDF, Bangladesh Coastal Development Foundation, a national level NGO.

I am very happy with staying in Okinawa as well as in Japan. The climate, natural beauties and environment of Okinawa is very similar to my home country. I am enjoying heartiest cooperation in a friendly working environment of our university campus and also being affectionate to the culture and norms of my dear Japanese people, the most kind and peaceful around the world. I hope the next three years of my research period will be more enjoyable.

I would like to express my deepest sense of gratitude and gratefulness to my honorable mentor, Dr. Md. Amzad Hossain for his continuous supports and kind supervision. I would also like to thank to my honorable vice advisory professors Dr. Akamine Hikaru, Dr. Michio Onjo and Dr. Ichiro Nakamura sensei for their important encouragement in pursuing my PhD Course under their valuable supervision.

I am greatly acknowledged to the Japanese Government for providing me Monbukagakusho scholarship. I am grateful to the authority of the University of the Ryukyus and loving people of Japan for their kind cooperation.

I would like to extend my heartfelt thanks to my lab mates for their cordial and continuous assistance in my research work.

I deeply owe my profound gratitude to my family members including my beloved wife for their countless sacrifices, contributions, patience and inspirations in my life.

サルカー エムディ アブドゥル ローフ  
SARKAR MD ABDUR RAUF (BANGLADESHI)

Title of Research: Studies on metabolic engineering for isoflavone-biosynthetic pathway via modification of MYB-related transcription factors in soybean

Advisory Professor: Toyoaki Anai (Saga University)

First Vice-Advisory Professor: Akihiro Suzuki (Saga University)

Second Vice-Advisory Professor: Fumio Hashimoto (Kagoshima University)



I feel honored for completed my Master course study from the Laboratory of Plant Genetics and Breeding, Faculty of Agriculture at Saga University in March, 2017. And it's my immense pleasure to enter at the United Graduate School of Agriculture, Kagoshima University from April, 2017.

My research area is Plant Molecular Biology. Using the functional genomic approach, I am trying to isolate and characterize some new and unravel MYB-related transcription factors for isoflavones biosynthesis in soybean seed.

I hope, my Doctor course study will be more enjoyable with my research and overall life in Japan.

とよもと だいき (日本)  
豊元 大希 (日本)

研究 題 目：イネにおける雑種弱勢現象の遺伝解析

主 指 導 教 員：一谷 勝之 (鹿児島大学)

第一副指導教員：清水 圭一 (鹿児島大学)

第二副指導教員：穴井 豊昭 (佐賀大学)



はじめまして、鹿児島大学 植物育種学研究室所属の豊元です。現在私は、イネの雑種弱勢について研究を行っています。雑種弱勢とは、ある特定の種類同士を掛け合わせると雑種が弱勢症状を示すという生殖隔離の一つです。雑種弱勢の現象を分子レベルで解明することができれば、交雑育種の障害となっている生殖隔離の防止、また逆に雑種弱勢を利用し、形質転換遺伝子の拡散防止など農業において様々な利点があります。そこで、その雑種弱勢の現象を分子レベルで解明するためにモデル植物であるイネを用いて研究に励んでいます。

具体的には、雑種弱勢は、2つの遺伝子が対の遺伝子として組み合わさり、両方が発現した場合に雑種弱勢という表現型を示します。この2つの遺伝子はさまざまなものが見出されていますが、中でも *HWA1* と *HWA2* について研究を行っています。この遺伝子は、1957年にイネの雑種弱勢で見出されてから具体的な研究はされておらず、本研究室では2011年ごろからこの2つの遺伝子についての研究が始まっています。現在は、2つの遺伝子の染色体上の位置や、どのような過程で弱勢症状を示すのか、どのイネがこの遺伝子を保有しているのかがわかってきており、私はさらにそれら2つの遺伝子の位置を絞り込むことによって原因遺伝子の塩基配列の特定や単離を行うことを目的として研究を行っています。

私は、この鹿児島大学でこのような研究を行っていく上で、農業における様々な問題の解決方法、実験技術、結果から導き出される考察をすべて自分で行うことのできる一人前の研究者になり、将来は日本や世界の農業に貢献できる人物になりたいと考えています。

くりはら かずとし  
栗原 一寿 (日本)



研究 題 目：カメルーンにおける陸稲 *NERICA* 品種の特性評価による  
栽培技術の開発

主 指 導 教 員：藤田 大輔 (佐賀大学)

第一副指導教員：鄭 紹輝 (佐賀大学)

第二副指導教員：坂上 潤一 (鹿児島大学)

国際協力機構 (以下、*JICA*) のカメルーンコメ振興プロジェクト (以下、プロジェクト) で専門家として派遣されている栗原一寿と申します。高校の頃に国際協力に興味を持ち漠然と途上国の現場で働きたいと考えていた私は大学で国際地域開発について学び、修士課程はフィリピンの *Bicol* 大学で農学を学ぶとともに、電気・水道が安定しない生活やフィリピン人特有のホスピタリティを経験しました。修士課程修了後は青年海外協力隊としてウガンダに2年間陸稲の普及に携わりました。主食がバナナやイモ類などコメ以外の食物であったことや、マントヒヒなどの野生動物を日常的に目にするなど驚きの連続でした。2011年からは *JICA* 専門家としてカメルーンでコメ振興に従事しています。本学では稲作知識と研究方法の研鑽を目的に発展途上国での研究に経験豊富な先生方の下で、アフリカの稲作に貢献する研究を行いたいと考えています。また、佐賀県はカメルーンへの専門家派遣、研修員の受け入れなどプロジェクトと様々な形で協力していることも佐賀大学で研究する理由の一つです。

私の研究対象の陸稲 *NERICA* (*New Rice for Africa*) は1990年代に *WARDA* (現 *Africa Rice Center*) においてアジア稲 (*O.sativa*) とアフリカ稲 (*O.glaberrima*) の異種間交雑によって開発された品種・系統で、高収量とアフリカの環境に耐性を持つとされ2000年代よりアフリカのサハラ以南の国で広く普及されています。カメルーンでも2000年代後半より普及進められています。しかし、現地での *NERICA* の特性調査や営農調査がしっかりと実施されずに普及が進められたため、播種遅れに起因する乾燥害や、未熟な栽培技術による収量低下が多く見られます。そこで本学ではカメルーンでの *NERICA* の特性を把握したうえで新しい栽培技術の開発のための研究を行います。

卒業後も本学で得る知見をもとにアフリカの稲作の発展に貢献し、佐賀とアフリカの架け橋となれればと思います。

グエン ディン クン  
Nguyen Dinh Cuong (Vietnam)



Title of Research: Genetic studies for brown planthopper resistant (*Nilaparvata lugens* Stål)  
in rice

Advisory Professor: Daisuke Fujita (Saga University)

First Vice-Advisory Professor: Shao-Hui ZHENG (Saga University)

Second Vice- Advisory Professor: Katsuyuki ICHITANI (Kagoshima University)

My full name is Nguyen Dinh Cuong. I am 31 years old.

I come from Danang City, a quite beautiful city located in central region of Vietnam, and nearly 600km from Ha Noi capital city to the south. I have lived in this city for 5 years, and I love this city as my second home because my family live here and local citizens are very friendly.

I am a lecturer at Biotechnology Faculty of The College of Food Industry. It is an interesting job because it gives me not only money to raise my family but also opportunity to pursue my passion in biotechnology. Additionally, it brings me the chance to connect with young generations who are very active and creative. My job characteristics and my concern about plants attract me to study higher degree after I graduated Master degree.

When I was a child, Japan has impressed me strongly because of it's miraculous development in over past 150 years after Meiji Restoration (1868) to become a great nation. I really admire Japanese for their technology and agriculture because Japan's natural resources are very limited. That is reason why I chose Japan to study Doctoral course to improve my knowledge, skill and working style. I also see that is a precious chance for me to experience the Japanese culture, society and enviroment. Finally, I hope that I can contribute to the strengthen bilateral relationship between Vietnam and Japan.

モハメド カビル イスラム  
Mohammad Kabirul Islam (BANGLADESHI)

研 究 題 目 : PHOSPHATIC BIOFERTILIZER PRODUCTION FOR PLANT CULTIVATION

主 指 導 教 員 : モハメド アムザド ホサイン (琉球大学)

第一副指導教員 : 佐野 文子 (琉球大学)

第二副指導教員 : 坂上 潤一 (鹿児島大学)

かわせ ふみえ  
川瀬 史恵 (日本)



研究 題 目：母胎境界における自然免疫担当細胞の機能的特異性に関する研究

主 指 導 教 員：建本 秀樹 (琉球大学)

第一副指導教員：金野 俊洋 (琉球大学)

第二副指導教員：三好 和睦 (鹿児島大学)

はじめまして。今年度より鹿児島大学連合農学研究科に進学しました，川瀬史恵と申します。所属は琉球大学で，学部・修士を通して沖縄生活7年目になります。

私は現在，金野俊洋先生の動物機能形態学研究室に在籍しており，学部・修士を通して，胚の着床や妊娠，母胎間相互作用について研究してきました。胎盤は母体と胎児との境界をなす妊娠特異的な器官で，その機能不全は妊娠の損失や子宮内での胎児の発育遅延などの原因となります。胎盤の形成には栄養膜細胞の高度に調節された増殖と分化が必要ですが，その制御機序は未だ不明です。また，妊娠は重要な生命現象の一つですが免疫学的視点からは謎の多い現象です。胎児は母親にとって異物性が強く免疫応答の標的となるはずですが，正常妊娠では胎児に対して免疫による拒絶反応は起こりません。妊娠維持には胎児に対する免疫応答を抑制しつつ病原体に対する感染防御を両立させることが必要です。一方，樹状細胞やナチュラルキラー細胞など，免疫担当細胞が妊娠においては着床や胎盤形成に重要な役割を果たします。近年，ヒトの着床胎盤形成部位において自然免疫リンパ球様細胞の誘導が報告されており，着床や胎盤形成に関与していると考えられていますが，その誘導機序や機能の詳細は不明です。

我が国では不妊症・不育症に悩むカップルの割合が増加傾向にあり，胚盤胞期以降の胚発生および着床の不全を原因とする不妊症症例に対する有効な治療戦略は未だ確立されていません。また産業動物においても不受胎による経済的損失は重大な問題です。このため胚盤胞期以降の胚発生と妊娠の成立に介在する胚母体間相互作用を解明することは，不妊症や不育症に対する治療戦略の確立，産業動物の受胎率向上に向けた取り組みの基盤として重要です。本研究では，着床・胎盤形成部位における自然免疫担当細胞の誘導と機能発現の機序解明に向けた基盤となる知見の獲得が期待されます。

これから3年間，学位取得に向けて精一杯励んでいきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。



Title of Research: Improvement of *in vitro* bovine embryo production by controlling autophagy and endoplasmic reticulum stress

Advisory professor: Yasuhiko Wada (Saga University)

First Vice-Advisory Professor: ken-ichi Yamanaka (Saga University)

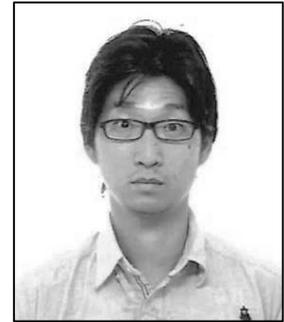
Second Vice-Advisory Professor: Hideki Tatemoto (University of Ryukyus)

Firstly, I would like to express my thanks for this opportunity to introduce myself. I'm Hafiza Khatun from Bangladesh a small country blessed with evergreen natural beauties, located in the south-east Asia. Bangladesh is a riverine country where agriculture is the main occupation of the nation. From childhood, agricultural activities attracted to me and my dream was to become an agriculturist.

Holy, in 2010, I obtained my graduation degree (Bachelor of Science in Animal Husbandry) from Bangladesh Agricultural University, a biggest agricultural university in south-east Asia. Then I entered the Department of Animal Science for my post-graduation degree (Master's in Animal Science) in the same university. Fortunately, before completing Master degree, I joined as a lecture in the same department in 2012. Later after finishing my post-graduation, university allowed me to come in aboard for higher study.

To pursue my higher study, I come in Japan with MEXT scholarship on 2 October 2014. I started my education life as a research student in Saga University under the supervision of Dr. Yamanaka Ken-ichi. In April, 2015 I enrolled as a graduate student. My research them was "Study on *in Vitro* Embryo Production by Sericin Supplementation in Cattle". During this research period, I learned a lot of technique related with *in vitro* embryo production which helps me for further study in livestock. I am profoundly indebted to my supervisor for his patience and guidance throughout my study. I am also thankful to my lab-mates for their easy-going behavior, companionship and help.

Presently, I have enrolled in the United Graduate School of Agricultural Science, Kagoshima University with the continuation of my scholarship. I feel very grateful and thankful to all especially my supervisor Dr. Yamanaka Ken-ichi who provided the facilities and encouraged to me for entering PhD course. During my Doctoral course, I will study about improvement of *in vitro* bovine embryo production. *In vitro* embryo production is currently one of the most important biotechnologies in cattle breeding and husbandry. So, improvement of *in vitro* culture systems is important for production of embryos with high developmental competence that are used in embryo transfer programs. With the number of bovine embryos transferred worldwide increasing annually, there is a greater need than ever to optimize conditions of embryo culture *in vitro* to maximize embryo quality, cryotolerance, and pregnancy rate. Hopefully, this research finding will play a vital for increasing quality in vitro embryo production in cattle. I am confident that the knowledge I will gain during PhD course will be beneficial for further research, my department and country as well as all over the world. Apart from research, personally I would like to make friends, hangout with friends. My hobby is travelling and taking photographs. Now my enjoyable pastime is playing with my little son. I am also enjoying in japanese culture, food and fruits. I hope next few years in japan will be more joyful for me.



研究 題 目：動物の健康管理に関する研究

とくに高度病原性人獣共通真菌感染症対策に関する研究

主 指 導 教 員：佐野 文子 (琉球大学)

第一副指導教員：寺嶋 芳江 (琉球大学)

第二副指導教員：山本 淳 (鹿児島大学水産学部)

私はこれまで、国の動物衛生行政に2年、その後犬猫を中心とした小動物診療（いわゆる動物病院）の現場で6年間仕事をしてきました。特に前職で国の動物衛生行政に携わっていた経験から、感染症の恐ろしさと重要性を強く認識しています。しかし、現職である動物病院の現場はそのような概念がまだまだ乏しく、現場の個々の獣医師の考えと裁量に委ねられているのが現状です。

現在、私は感染症を診断する機会を多数経験し、中には人獣共通感染症を保有している患者もおります。そして、これらの人獣共通感染症は当然、獣医療従事者や動物の飼い主にまで感染が及ぶ危険性があるにも関わらず、双方ともに、認識が十分であるとは言えないと強く感じております。

近年、大きな社会問題になった人獣共通感染症として、プリオン病や高病原性鳥インフルエンザなどが挙げられますが、これらに比べると真菌感染症は認知度が低いと思われます。しかし、一部の高度病原性真菌は、プリオン病、高病原性鳥インフルエンザと同等かそれ以上の危険レベルとされています。それにもかかわらず、認識が十分でない一つの要因として、診断の難しさがあります。

そこで臨床現場における診断法として、高度病原性真菌の血清学的抗体価測定による検査系の確立および疫学的調査に着目しました。予定している研究内容は高度病原性真菌症、特にロボミコーシスとヒストプラズマ症を対象として沖縄県の犬における血清学的調査による抗体保有率調査から疫学的な評価を行うものです。

犬・猫を始めとする愛玩飼育動物は、昔と比べてはるかに近い生活圏で人と暮らしています。さらには飼い主の高齢化により日和見感染症も増加することが予測されます。正しい理解と病気の早期診断、そして疫学的流行の把握は彼らとの生活をより安全で楽しいものとするためにも必要です。

私は、博士課程での研究を通じて、安全な診断法ならびに疫学データとして臨床現場に還元するだけでなく、少しでも真菌感染症への理解が深まり、世の中に広く啓発される一端になることを願っております。



Title of Research : Genetic Evaluation of Fertility Traits of Okinawan Beef Cattle Using a Multiple-Trait Animal Model

Advisory Professor: Takuro Oikawa (Ryukyu University)

First Vice- Advisory Professor: Hideki Tatemoto (Ryukyu University)

Second Vice- Advisory Professor: Yasuhiko Wada (Saga University)

I am Asep Setiaji from Indonesia. I was born to a low class educated family as the first son. Both of my parents are farmer and live in the village. I am single and now I have 26 years old.

I have completed my primary studies at Diponegoro University at Semarang, Indonesia and joined to the Faculty of Animal and Agricultural Sciences. There I studied an animal breeding specialty in rabbit. On February 2012, I completed my BSc Animal special degree as the best student was graduate on that period. On April 2014, I finished my Master Thesis on “Analysis of Quantitative Traits of Partial Diallel Cross among, Local, Flamish Giant and Rex Breeds of Rabbit” graduated as Master of Science at Diponegoro University. Now, I am a junior staff on laboratory Genetic, Breeding and Reproduction, Faculty of Animal and Agricultural Sciences, Diponegoro University.

As I received the Monbukagakusho scholarship, I came to the University of the Ryukyus, Okinawa, Japan on September 2016. During my first six months, I completed the Intensive Course on Japanese. As I am interested on completing a doctoral degree and got the chance to enter to the United Graduate School of Agriculture at Kagoshima University.

My utmost intend is to serve to my mother country in my fullest capacity after successful completion of the PhD course.

## 地域・国際資源経済学・Regional and Global Resource Economics



研究 題 目 : 拠点産地における果樹の生産・流通および組織体制の  
実態と課題に関する研究

主 指 導 教 員 : 内藤 重之 (琉球大学)

第一副指導教員 : 杉村 泰彦 (琉球大学)

第二副指導教員 : 豊 智行 (鹿児島大学)

私は、沖縄美ら島財団の参与として、総合研究センターで研究業務や県連携業務のアドバイザーをしています。沖縄美ら島財団は、沖縄海洋博公園、熱帯ドリームセンター、沖縄美ら海水族館、首里城などを管理しています。沖縄美ら海水族館等を訪れる際にご一報頂ければと思います。

一昨年3月まで、沖縄県の農業振興統括監として、園芸、畜産、経営、担い手、研究開発など、多面的に農業振興に取り組んできました。

沖縄県では、県産品目のうち市場競争力を強化することにより、生産拡大、付加価値を高めることができる品目を戦略品目として位置づけ、一定の要件を備えた産地を拠点産地として認定し、補助事業の優先的導

入をはじめ、栽培技術指導、経営指導など、施策・事業等を集中的に支援することになっています。

しかしながら、拠点産地においては、産地育成への取り組みに違いがみられ、生産性、価格、高齢化、担い手不足などの問題により、認定後の各拠点産地の生産活動、活性化等に差が生じているのが現状であります。

このようななか、私は、拠点産地における生産・流通、組織体制等の実態調査、消費者・市場ニーズ調査等を通じて、拠点産地の抱える課題を解明し、農家経営力の向上、活性化等につなげ、引いては沖縄県の農業振興に寄与していきたいと考えています。

また、私は、農業の観光への貢献度は大きいと考えており、初の試みとして、沖縄農業の沖縄観光への貢献度について定量的に金額評価を行った結果、献度額は年間612億円となり、大きく貢献していることが確認されました。私は、沖縄県のフルーツ戦略として、観光への貢献度が高いトロピカルフルーツを周年楽しめるよう、熱帯果樹の生産拡大、収穫時期の拡大に取り組んできました。今後とも、研究活動等を通じて熱帯果樹の生産振興に取り組んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

フアム クォック フン  
Pham Quoc Hung (Vietnam)



Title of Research: Building An Efficient Marketing Channel Through Contract Farming  
in Vietnamese Mekong River Delta

Advisory Professor: Tomoyuki YUTAKA (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Norio SAKAI (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Kazunari TSUJI (Saga University)

I am Pham Quoc Hung. My home town is Can Tho City, Vietnam. I did my master degree on agribusiness in The University of Queensland. I used to work for an agricultural trading company for more than 8 years before applying a new job as a lecturer in Can Tho University. I was granted a three-years doctoral course scholarship sponsored by Vietnamese government. My hobbies are reading, going out with my friends for coffee and eating out with my family at weekend.

I was born in a farmer family, so I have been interested in agricultural issues such as farmer income, poverty, production efficiency and marketing efficiency. Farming in my home town - Vietnam is predicted to be adversely affected by climate change in the coming time. Therefore, how to help farmers to produce efficiently, sustain their income and successfully adapt to new risky farming environment is the big question for policy makers as well as researchers. This is also one of the reasons for me to apply a doctoral course in The United Graduate School of Agricultural Sciences - Kagoshima University. It is great to be here, Japan - a beautiful developed country. I feel happy and be proud of having a chance to study in the Kagoshima University which has a long history in education, experienced professors and professional studying environment. I hope that what I will learn in Kagoshima University will help me enrich my knowledge and contribute to the development of agricultural industry in my home town.

Yours Sincerely

Pham Quoc Hung



Title of Research: Japanese spirit: global marketing strategies for the honkaku shochu

Industry.

Advisory Professor: 李 哉絃 (鹿児島大学)

First Vice-Advisory Professor: 高峯 和則 (鹿児島大学)

Second Vice-Advisory Professor: 内藤 重之 (琉球大学)

Christopher Pellegrini was born in Vermont (USA) to two high school teachers that met while working overseas. The oldest of three children, he secretly started making homebrewed beer in his bedroom closet at the age of 16 after learning about it in a high school history class. His parents were unhappy when they found out, and shut down his homebrewing operation. The following year he applied for an apprenticeship at a local craft brewery called Otter Creek Brewing and worked there on and off for four years. During those years, he developed an intense admiration for the creation of small-batch drinks, and by the time he stopped working at the brewery he had become the youngest commercial beer brewer in the United States.

Pellegrini studied Spanish Literature at Wittenberg University in Ohio. He was also a pole vaulter and decathlete during his time there, which means that he did not sleep much. Later he earned a Master's Degree in English Education from University College London.

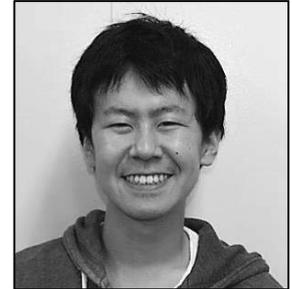
He brought his appreciation of craft drinks to Japan in 2002, after living in Spain for one year and South Korea for two. He was soon introduced to honkaku shochu by a bartender and was immediately fascinated by its variety and complexity. Pellegrini traveled to Kyushu to learn more about it because Wikipedia was still very young in those days, and it did not yet have an English page for shochu. Several years and trips later, he began to do shochu tastings and seminars to share his knowledge with people in Tokyo.

He earned the SSI's Shochu Kikisakeshi certification and SSA's Shochu Advisor license, and is the only person in the world who currently holds both. Pellegrini published "The Shochu Handbook" in 2014, and he is also the Chief Editor of The Kyushu Advantage's shochu magazine. In early 2017 he was recognized as a shochu and awamori ambassador by Cool Japan. Additionally, he is a contributor to the upcoming Oxford Companion to Spirits and Cocktails. He regularly conducts tastings and seminars both in Japan and internationally, and was a featured speaker at numerous events including at the FCCJ in both 2015 and 2016, the 2016 Shochu Renaissance (Tokyo), the 2017 Honkaku Shochu and Amami Kokuto Shochu Festival (Fukuoka), and the JSS's "Taste the Spirit of Japan" events the last two years.

Pellegrini also has an extensive acting career which includes stage, TV commercials, dramas, and movies. Some examples are the films Hagetaka and Vancouver Asahi, and the morning TV drama, Massan. He currently lives in Tokyo, eats lots of abura soba, and regularly visits Kyushu, Japan's shochu island. He considers shochu and awamori to be the perfect meeting point of his three passions—craft drinks, education, and acting—and he hopes to spend many years promoting them. He is thrilled to be a member of the class of 2020 at Kagoshima National University.

【応用生命科学・Biological Science and Technology】  
生物機能科学・Bioscience and Biotechnology

かどおか ちひろ (日本)  
門岡 千尋



研究題目：白麹菌におけるクエン酸高生産機構の解明

主指導教員：二神 泰基（鹿児島大学）

第一副指導教員：玉置 尚徳（鹿児島大学）

第二副指導教員：後藤 正利（佐賀大学）

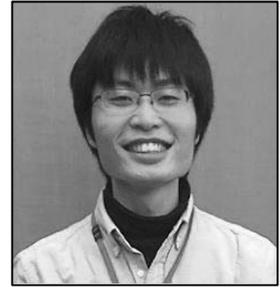
このたび連合農学研究科に入学いたしました、門岡千尋と申します。鹿児島大学・醸造微生物学研究室に配属されてから、いつのまにか2年半もの月日が過ぎてしまいました。研究室に入ったときに感じた実験の楽しさ、面白さを忘れずに、これまで以上に研究に励んでいこうと考えております。

研究内容についてですが、私は白麹菌のクエン酸高生産機構に関する研究を行っております。白麹菌は焼酎製造に用いられる麹菌であり、清酒や味噌、醤油の製造に用いられている黄麹菌と同様に、原料となる米や大麦などのデンプン質を糖化する糖質加水分解酵素を高分泌するという性質に加え、黄麹菌と異なる特徴として、菌体外にクエン酸を排出する性質をもっています。この白麹菌が生産するクエン酸により、もろみのpHが低く保たれるため、比較的温暖な南九州地方においても雑菌汚染の危険にさらされることなく、安定した焼酎製造が可能となっています。しかし、このクエン酸高生産機構について未解明な点があり、特に1) クエン酸の排出経路についてと、2) 白麹菌が高温条件（40℃付近）でクエン酸を高生産できないことについて、全容は解明されておられません。

そこで私は糸状菌の比較ゲノム解析というアプローチから、白麹菌を含むチャワントケ壺門の糸状菌において、クエン酸合成酵素遺伝子上流に推定RNA結合タンパク質が、また下流に推定クエン酸輸送体をコードする遺伝子が高度に保存されていることを見出しました。現在、これらの遺伝子がクエン酸高生産機構における不明な点を解明する手がかりになるのではないかと考えて、研究を進めています。

これまでの大学生活が一瞬であったのと同様、これからの生活もあっという間に過ぎてしまうと思います。ひたすら研究に励み、研究者として生きていくためのスキルとセンスを身につけていきたいと考えています。皆様、これから3年間よろしくお願ひします。

おおいし かずき  
大石 一樹 (日本)



研究 題 目: 魚類複合糖質の脱シアリル化の生理的意義

主 指 導 教 員: 塩崎 一弘 (鹿児島大学)

第一副指導教員: 小松 正治 (鹿児島大学)

第二副指導教員: 藤田 清貴 (鹿児島大学)

はじめまして、応用生命科学専攻の大石一樹です。私は、魚類における「糖鎖」の機能について調べています。おそらくほとんどの方は、「糖鎖」という言葉を初めて耳にしたと思います。「糖鎖」は、グルコースやガラクトースなどの10種類ほどの糖分子が鎖状に結合したものの総称で、タンパク質や脂質に糖鎖が付加されたものが研究題目にある複合糖質です。複合糖質は、細胞の識別や感染、タンパク質の品質管理、保護作用などに関与することが知られています。これまでの研究から、哺乳類における複合糖質の重要性は明らかになってきましたが、哺乳類以外での知見はほとんど得られていません。そこで、私の研究室では糖鎖構造の制御を担っているシアリダーゼという糖鎖分解酵素に注目しています。

シアリダーゼは糖鎖末端からシアル酸を切り離し、糖鎖分解の初期反応に関与する糖鎖分解酵素です。哺乳類では性状が異なる4つのシアリダーゼが存在することが分かっています。これらシアリダーゼがシアル酸を「糖鎖」から切り離すことで糖鎖構造が変化し、様々な分子が影響を受けることが分かっています。しかし、魚類におけるシアリダーゼの機能についてはほとんどわかっていません。哺乳類では、発生や分化、免疫機能に関係していることが報告されているので、魚類においても類似の機能を担っていることが予想されます。魚類における「糖鎖」の機能が明らかになれば、養殖業を中心に水産業への応用が期待できます。

これから始まる博士課程では、乗り越えなければならぬ多くの問題に直面することが予想されますが、正面から向き合って実りあるものにしたいと思います。

しまもと さき  
島元 紗希 (日本)



研 究 題 目: 肉用鶏における骨格筋量の個体差を支配する要因の解明と  
鶏肉生産への応用

主 指 導 教 員: 井尻 大地 (鹿児島大学)

第一副指導教員: 大塚 彰 (鹿児島大学)

第二副指導教員: 永尾 晃治 (佐賀大学)

鹿児島大学 栄養生化学・飼料化学研究室所属の島元紗希と申します。学部3年生の研究室配属から3年半が経ち、先生方や研究室の仲間たちに支えられながら、毎日楽しく研究に励んでいます。

私の研究は肉用鶏の成長量(体重増加量や骨格筋重量)に個体差を生じさせる要因の解明を目的としています。現在、ブロイラーや地鶏などの肉用鶏の生産には、産肉性や飼料効率の向上が求められていますが、一方で、生産現場では、肉用鶏の成長(体重や骨格筋の増加量)に大きな個体差が生じています。肉用鶏の

体重や骨格筋量の個体差を最小化し、斉一性を高めることで産肉性と飼料効率の改善が可能となりますが、個体差が生じる原因は不明です。これまでの研究より、私たちは成長速度が異なる個体間において骨格筋の $\beta_2$ -アドレナリン受容体の発現量に差異があることを見出しました。博士課程では、骨格筋における $\beta_2$ -アドレナリン受容体シグナルの作用を基礎レベルで解明し、得られた知見の応用性を検討し、生産現場への還元を目指したいと思います。

これからの3年間も楽しみながら研究したいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

## 先端応用生命科学・Advanced Life Science

ヴァイナ アムレタ ラクスマ  
Fina Amreta Laksmi (Indonesia)

Title of Research: Improved L-Arabinose Isomerase Performance

For Industrial Application

Advisory Professor: Matsujirou ISHIBASHI (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Isao HANASHIRO (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Keiichi WATANABE (Saga University)

Assistant Advisory Professor: Hirohito TSURUMARU (Kagoshima University)



I am an Indonesia citizen who lived in Bogor, West Java. Pursuing study in Japan has been my interest since my earliest school days. The advance technology and rapid development in every sector in Japan harmonize with the rich and flourished culture giving me a constant inspiration. Besides that, I was participated in a 3 months internship under the supervision of Prof. Ishibashi at Applied and Molecular Microbiology Laboratory in Kagoshima University in 2011 prior my master and doctoral degree. I am very impressed with Kagoshima, particularly Kagoshima University, which provide a full support for a foreign student like me and am very eager to continue my study here since then. Therefore, I am very grateful that I have got the opportunity to pursue my master degree in the Graduate School of Agriculture, Kagoshima University and now continue my doctoral degree in the United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University.

I have been interested in the protein engineering field as soon as I started to work in Research Center for Biotechnology, Indonesian Institute of Sciences. As I would like to improve my knowledge in my interest of field, my current laboratory matches my interest. It is an honor for me to be supervised by Prof. Ishibashi, Prof. Hanashiro, Prof. Watanabe and Prof. Tsurumaru, who have expertise in their field. This opportunity would help me develop my scientific skills.

I received my master degree with a master thesis titled "Improved L-Arabinose Isomerase Performance For Industrial Application". For more advanced study, my Ph.D work will be a continuation of my master thesis. L-Arabinose Isomerase (LAI) is an enzyme that helps to catalyze the conversion of D-galactose to D-tagatose *in vitro*. D-tagatose itself is a natural and low calorie sugar that has numerous advantages for human health. One of the advantages of D-tagatose is to relieve the symptom of diabetic type II. D-tagatose could be applied in a wide variety of foods, beverages, health foods and dietary supplements. Hopefully, the success of this research would lead to the development of protein engineering field and also for diabetic patient.

かみから みゆ  
上村 美優 (日本)



研究題目：抗がん作用を持つ植物由来の生理活性物質に関する研究  
主指導教員：橋本 文雄 (鹿児島大学)  
第一副指導教員：岡本 繁久 (鹿児島大学)  
第二副指導教員：石丸 幹二 (佐賀大学)

はじめまして、私は上村美優です。生まれてこの方、鹿児島を離れたことはありません。私の一日は犬に餌を与えることから始まります。今朝もいつものように、餌をあげようと立ち上がったところ、足の親指を畳にひっかけて爪が剥がれました。実は元々私の親指の爪は内出血をされていて見るも無残な姿だったのです。こうなったのも、高校、大学と続けたハンドボールが原因です。この競技は接触が激しいから、と言いたいところですが、単純に靴が合っていなかっただけでしょう。剥がれた爪を見て、学部の頃は勉強もせずに部活動に明け暮れていたことを思い出しました。あの頃は本当に部活動と友情以外には目もくれず過ごしました。部活を引退し研究室に配属されてからは、研究の面白さにのめり込み、全エネルギーを実験に注いでいます。喧嘩っ早い私は岡本先生や研究室の学生と一悶着も二悶着もあります。しかし、そうした日々が何だかんだ楽しいです。こんな私ですが、どうぞよろしく願いいたします。ちなみに、同じく今年博士課程に進学した大谷さんの同期は私です。

ジョホラ ファティマ テュース  
ZOHRA FATEMA TUZ (BANGLADESHI)

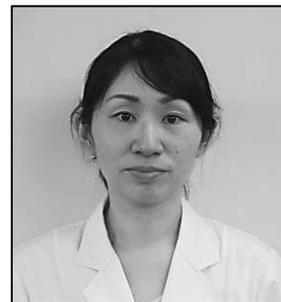


Title of Research: Studies on the functional metabolites in citrus  
Advisory Professor: Susumu Mitsutake (Saga University)  
First Vice-Advisory Professor: Nobuhiro Kotoda (Saga University)  
Second Vice-Advisory Professor: Masashi Yamamoto (Kagoshima University)

I would like to express my gratitude to the United Graduate School of Agricultural Science, Kagoshima University for selecting me as a doctoral student from April, 2017. I am from Bangladesh and had completed my undergraduate (Bachelor of Science in Agriculture) and graduate (Master of Science in Genetic Engineering and Biotechnology) course from the University of Rajshahi, Rajshahi 6205, Bangladesh.

I feel honored as a member of the Fruit Science Laboratory, Saga University and my research area is functional metabolites studies in citrus. Really, it's a very pretty lab. Environment to conduct my Doctoral research and I am grateful to my Advisory and Vice-advisory Professors.

木戸 めぐみ (日本)



研究 題 目：調理加工におけるポリフェノールの構造及び機能性の変化に関する研究

主 指 導 教 員：侯 徳興 (鹿児島大学)

第一副指導教員：坂尾 こず枝 (鹿児島大学)

第二副指導教員：和田 浩二 (琉球大学)

この度、平成29年4月から社会人学生として入学しました木戸めぐみです。現在、鹿児島女子短期大学の栄養士養成コースで実習助手として調理学や加工学に携わっています。業務の関係から、レシピ開発や商品開発等に携わることも多くあるのですが、その際に、食品の栄養面や嗜好性だけでなく、生体調節機能に関わる機能性成分にも着目したものが求められるようになりました。食品中の機能性成分の研究は盛んに行われていますが、調理加工によりどのように変化するかということについては、十分に解明されておりません。私は、ポリフェノールやアントシアニンを有する食材の調理加工による成分構造及び機能性の変化を明らかにするとともに、それら成分がヒトの健康維持増進に役立つ状態で存在しているのかなどを含め、機能性を損なわない調理加工方法を確立していきたいと思えます。そして、日常の食生活や加工品開発等に応用できるように食材の基礎データを構築し農業や地域産業の発展、また栄養士の養成に寄与する力をつけられるよう知識と技術を深めていきたいと思えます。

今回、幅広い分野の先生方からご指導いただける機会を得たこと、また様々な学生さん方と交流できることを大変ありがたく思っています。仕事との両立に不安も多くありますが、精一杯頑張ってまいりますのでどうぞよろしく願いいたします。

高島 智也 (日本)

研究 題 目：キチン分解酵素の抗真菌活性に関わる構造の同定

主 指 導 教 員：平良 東紀 (琉球大学)

第一副指導教員：橘 信二郎 (琉球大学)

第二副指導教員：光富 勝 (佐賀大学)

指導補助教員：上地 敬子 (琉球大学)

【農水圏資源環境科学・Resource and Environmental Science of Agriculture,  
Forestry and Fisheries】  
生物環境保全科学・Environmental Science and Conservation Biology

おの まさや  
小野 雅弥 (日本)



研究題目：線虫の包囲化回避機構の解明

主指導教員：吉賀 豊司 (佐賀大学)

第一副指導教員：早川 洋一 (佐賀大学)

第二副指導教員：津田 勝男 (鹿児島大学)

はじめまして。本年度より連合農学研究科に入学しました小野雅弥と申します。出身は福岡県北九州市で、生まれも育ちも九州ですが鹿児島に行ったことはなく、連大の入試のときにはじめて鹿児島を訪れました。これからも鹿児島に行けることをうれしく思っております。

所属は佐賀大学になります。学部3年生のときに研究室に配属されて以来、佐賀大学で線虫の研究をしてきました。佐賀大学線虫学研究室は日本で唯一線虫だけを扱う研究室です。そんな珍しい研究室があるのと線虫という不思議でマニアックな生物に魅かれて研究室を決めました。線虫というと魚類に寄生するアニサキスなどを想像するかと思いますが、ほとんどの線虫は非寄生で、形態や大きさも種によって様々です。

私の研究テーマは昆虫に寄生する線虫がどのような方法で昆虫の免疫を抑制もしくは回避し、寄生を成立させているのかを明らかにすることです。私の研究の特色は昆虫寄生性線虫のモデルとして *C. elegans* を使っている点です。*C. elegans* のような培養や遺伝的な解析が比較的容易に行える線虫を用いることで、昆虫免疫に対する線虫の抑制・回避機構が明らかにできないかと考えました。昆虫は線虫のような異物が体内に侵入すると包囲化と呼ばれる免疫を働かせ、昆虫体内にある大量の血球で異物を囲い込み、封じ込めるようなことをします。これまでの自身の研究で、*C. elegans* のような寄生性ではない線虫をチョウ目のハチノスツヅリガ幼虫に注入しても、昆虫寄生性線虫のように包囲化を受けないことがわかりました。このことは、寄生・非寄生に関わらず線虫が寄生虫としてのポテンシャルを有している可能性を示唆しています。博士課程では、*C. elegans* を用いて、線虫が包囲化を回避するための構造や機構について明らかにしたいと考えています。

大学に入学してこれまでが一瞬で過ぎ去っていったように、これからの3年間もあっという間だと思いません。一日一日を大切に3年間過ごしたいと思えます。よろしくお願ひします。

おおたに ゆい  
大谷 結 (日本)



研究 題 目：ブラシノステロイド情報伝達経路で働く BES1/BZR1 転写因子群の  
分子生物学的研究

主 指 導 教 員：岩井 久 先生 (鹿児島大学)

第一副指導教員：岡本 繁久 先生 (鹿児島大学)

第二副指導教員：鈴木 章弘 先生 (佐賀大学)

皆さんこんにちは。大谷結です。学部1年生のときに鹿児島に来て、今年で7年目になります。引っ越してきて最初の頃は道端の灰に感動していましたが、もうすっかり慣れてしまいました。学部生のおときからずっと植物ホルモン・ブラシノステロイド(BR)について研究しています。皆さんはブラシノステロイドって高校までに習いましたか？今は植物ホルモンとして高校の教科書にのっているみたいですが、私が高校生の頃はオーキシシン、サイトカイニン、ジベレリン、アブシジン酸、エチレンの5つしか習わなかったもので、大学生になって初めてBRというものを知りました。BRはとても高価で10mgで35000円くらいします。あまりの高さに、扱うときには手が震えます。何よりこのホルモンを使わせてくださる岡本先生に頭が上がりません。研究室では、すっかりお局になってしまいました。私の研究室には同期の女の子がもう一人いるので、たまに夜ふたりでお好み焼きを作ったり、研究室のベランダでのんびりしたりすることで心を癒しています。皆さんどうぞよろしくお願いします。

もりやま みほ  
森山 美穂 (日本)



研究 題 目：トマトに感染するエマージングウイルスの発生生態とその侵入  
時期に関する研究

主 指 導 教 員：大島 一里 (佐賀大学)

第一副指導教員：草場 基章 (佐賀大学)

第二副指導教員：岩井 久 (鹿児島大学)

初めまして。私は熊本県に在職しています。

私が本学に進学しようと思いましたが、農業研究センター時代に携わったトマトに感染するウイルスについて、基礎的な知見を広げたいと考えたからです。

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、熊本県はトマトやスイカ等の果菜類の栽培が盛んです。特に、促成栽培(9月頃に定植、翌年6~7月頃まで栽培する作型)トマトの生産量は全国一位です。しかしながら、産地では、エマージングウイルスである *Tomato yellow leaf curl virus* (TYLCV) と *Tomato chlorosis virus* (ToCV) が発生し大きな被害を及ぼしています。両ウイルスは我が国で初確認されてから短期間で全国に広がっています。特に ToCV は初確認後8年間で11県に広がっています。また、最近の私たちの研究により両ウイルスの重複感染も確認されています。一般的に、ウイルスの重複感染は単独感染より病徴が激化するとされていますので、TYLCV と ToCV の重複感染によるトマトの被害激化も懸念されます。このような背景の下、本学での研究は ToCV について分子進化的な解明を行うとともに重複感染についても生物学的に解明したいと考えています。

私は現在、4月の定期異動で阿蘇地域振興局農業普及・振興課に配属になりました。ご存知のとおり、昨年、阿蘇地域は熊本地震で甚大な被害を受け、さらに、豪雨や中岳の爆発等自然の力の恐怖を痛感する一年でした。しかしながら、2013年に世界農業遺産に認定を受けた阿蘇地域では、千年以上にわたる草資源を循環的に利用した持続的農業を次世代に繋げようと頑張っています。皆様も是非、世界最大の巨大カルデラと美しい自然が織りなす風景を見に来て頂ければと思います。

私も、本課程での研究が少しでも熊本の農業の為、日本の農業の為に役に立つよう努力していきたく思います。

よろしくお願ひ致します。

リ ス カ  
RISKA (INDONESIA)

Title of research: Diagnosis of East Asian passiflora distortion virus:  
a new potyvirus causing deformation in fruits of passionfruit  
in Japan

Advisory professor: Hisashi Iwai (Kagoshima University)

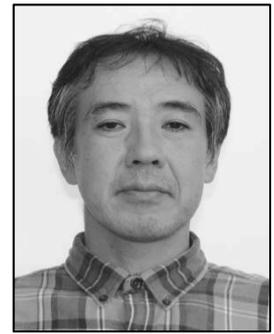
First vice-advisory professor: Kazusato Ohshima (Kagoshima University)

Second vice-advisory professor: Masayuki Nakamura (Saga University)



First of all, I would like to say big thank to Kagoshima University to give me a great chance to pursue my study for Ph.D. program. My name is Riska, from Indonesia. I graduated from Andalas University in 2001, one of National University in Indonesia. I took biology major in Math and sciences faculty. After graduated, I work in Indonesian Tropical Fruit research Institute since 2002, one of national research institute belong to the Indonesian Agency for Agriculture Research and Development as a junior researcher in plant pathology field. I did some research about tropical fruit disease such as banana, dragon fruit, mangosteen diseases etc. During my work in ITFRI, I got many experience to improve my capability in research. In 2005, the institute and ACIAR project fund me to take molecular training of banana bacterial disease for a month In Queensland University. In 2014, I got one good opportunity to pursue my study to magister program in Kagoshima University. I took plant pathology major supervised by Prof. Hisashi Iwai and Prof. Masayuki Nakamura for two years. The research topic I carried out is about DIAGNOSIS OF NEW VIRUS INFECTED IN PASSION FRUIT IN OKINAWA JAPAN. Another experience I had that in 2016 I attended a regional symposium for controlling dragon fruit disease held in Thailand. Last April 2017, I applied to Kagoshima University to take Ph.D program. In this program I will continue my research study in plant pathology laboratory. I plan to obtain a complete region of a new virus temporary named East Asian passiflora virus. This a new virus cause deformation of fruit in passion fruit. Thus find control method of this virus.

ごとう ひであき  
後藤 秀章 (日本)



研究題目：媒介昆虫カシノナガキクイムシ *Platypus quercivorus* の遺伝的  
系統がブナ科樹木萎凋病被害に与える影響について

主指導教員：坂巻 祥孝 (鹿児島大学)

第一副指導教員：津田 勝男 (鹿児島大学)

第一副指導教員：徳田 誠 (佐賀大学)

私はこの度、社会人として鹿児島大学大学院連合農学研究科で勉強させて頂くことになりました。普段は熊本市にある森林総合研究所九州支所で、穿孔性の森林害虫の防除や、沖縄島での森林施業が穿孔性昆虫の群集構造に与える影響評価に関する研究に従事しています。

九州に来て14年目になります。この間、2010年には、カシノナガキクイムシの媒介するブナ科萎凋病、通称ナラ枯れによるナラ、シイ、カシ類の集団枯損が全国的に大発生し、社会的にも大きな問題となりました。被害の大きい本州などでは、枯損は主にミズナラやコナラで発生しますが、鹿児島を含む九州南部などでは、主としてスダジイ、マテバシイが枯損します。私はそれ以前からこの昆虫の調査・研究をしており、ミズナラ・コナラとスダジイ・マテバシイなどの照葉樹では、被害の発生傾向に様々な違いがあること注目してきました。そこで2010年からは、さらに本格的に、照葉樹で発生するナラ枯れの被害に関する調査を行ってきたところです。これから大学院で行う研究は、主としてこの間に行ってきた調査結果をまとめていきます。

ここ数年は上記調査のため、九州本土を始めとして、屋久島、種子島、三宅島、御蔵島、八丈島など、被害が発生した多くの場所に試験地を設置し、それらを飛び回ってきました。それらの場所の中には、非常に不便な場所もいくつかあり、台風などの影響で、予定通り帰れなくなったことも1度や2度ではありません。調査以外でも、なかなか得がたい様々な経験をさせてもらったそれらの試験地で得られたデータは、今後、照葉樹林で発生するナラ枯れ被害を管理していく上で、重要な情報をたくさん含んでいると考えています。これから大学院での3年間で、これらデータを論文として社会に還元するとともに、確実に学位が取得できるよう、頑張っていきたいと思います。

## 地域資源環境工学・Regional Resource Environment Engineering

いずみかわ よしなり  
泉川 良成 (日本)



研究 題 目：分光技術を用いたサトウキビの製糖プロセス管理に関する研究

主 指 導 教 員：中村 真也 (琉球大学)

第一副指導教員：平良 英三 (琉球大学)

第二副指導教員：田中 宗浩 (佐賀大学)

初めまして、私は琉球大学所属の泉川良成と申します。学部頃からずっと琉球大学に在籍していますが、同期がどんどん卒業していき寂しい気持ちでいっぱいです。また、新しい後輩との年齢差も大きくなっていき、オジサンは仲良くなれるか心配です。私は両親共に沖縄出身の生粋のウチナーンチュで、出身は恩納村という細長い村です。田舎で育った私は地元のことを深く愛しており、修士の研究テーマを泡盛、博士ではサトウキビを選択するほどです。またお盆にはエイサーに参加し、しばしば研究がおろそかになっていました。しかし博士課程では気持ちを切り替え研究に全力を尽くし、地域貢献をしていきたいと考えています。

サトウキビの製糖工場では、ロスを減らし最大限の糖分を回収することが求められています。しかし現状では品質分析に時間がかかるため、工程管理へ利用できていません。サトウキビの品質取引にも用いられる NIR 法は、検量線を作成することで多成分を迅速に測定できる特徴があります。そこで私は博士課程において、NIR 法を中心とする分光技術を用いた糖生産の品質向上に関する研究を行いたいと考えました。

修士からテーマが変更になったのでほぼゼロから勉強、下手な英語でタイ人のチューター、諸々の申請に追われ、現在も自分の紹介文を焦って書いています。私は頭も良いほうではないので指導教員にも迷惑をかけると思いますが、3年で卒業できるよう精進したいと思います。

ドアン チ ク オン  
DOAN CHI CUONG (Vietnam)



Title of Research: Effects of integrated environmental factors and fertilizers under the control of artificial intelligence to the quality of fruits and vegetables

Advisory Professor: Munehiro TANAKA (Saga University)

First Vice-Advisory Professor: Hiroyuki Cho (Saga University)

Second Vice-Advisory Professor: Takeshi Shikanai (Ryukyu University)

Hi everyone, it is so nice to meet all of you, the clever students come from different regions, nations, and variety of specific cultures.

People often call me with the nickname CHI CUONG. I was born in Quangtri Province, which is located in the Central of Vietnam. But now I am living and working in Danang City, which are about 200 kilometers far from the place I grew. At Danang University of Science and Education, I work as a teacher and a training assistant, a position that I have a lot of opportunities to meet a range of ambitious students from many regions around my country.

One day in 2016, one of my brothers, a former student of Saga University and a venerable Saga's Professor who came

from Agriculture Faculty on occasion he took his students to attend an overseas short training course in Danang, Vietnam. Luckily, he introduced me to the Professor, and a thing that makes me so surprised is that he spent plenty of valuable time for my presentation and showed me some breakthrough achievements and ideas related to his research. These inspire me to pursue my ambition to study on the field of agriculture in a developed nation like Japan that I believe it will be critical not only for my career but also helpful for my nation.

Finally, I would like to take this opportunity to meet all of you, study as much as possible to enhance and sharpen my profession.

マヤカデユワゲ ナディーカール クマール  
Mayakaduwege Nadeeka Kumari (Sri Lanka)

Title of the Research: Assessment and modeling of water resources in sub-tropical and tropical climates: Comprehensions from Okinawa prefecture, Japan and Anuradhapura, Sri Lanka

Advisory Professor: Kazuhito SAKAI (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Shinya NAKAMURA (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Kozue YUGE (Saga University)



I am Nadeeka Kumari from Sri Lanka. I graduated from Faculty of Agriculture, University of Ruhuna, Sri Lanka in 2006 with a First Class honors (Majoring module: Agricultural Engineering) while, claiming a gold medal for the most outstanding performances in the final examination. Just after the graduation, I started my career as a Temporary Lecturer in the same university. In 2009, I was fortunate to recruit as a Probationary Lecturer in the Department of Agricultural Engineering and Soil Science, Rajarata University of Sri Lanka and was promoted as a Senior Lecturer in 2014.

Meantime, I successfully completed my Master of Philosophy by coursework and research from Postgraduate Institute of Agriculture, University of Peradeniya, Sri Lanka (Major: Agricultural Engineering/Integrated Water Resources Management) with an overall grade point average (GPA) of 3.85. Title of the research thesis was “Quality and Availability of agro-well water in *Malwathu Oya* Cascade-I in Anuradhapura District”.

As I was awarded MONBUKAGAKUSHO scholarship from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan to pursue my postgraduate studies, I arrived in Okinawa as a research student in April 2016. Currently, I am continuing my PhD studies at the Laboratory of Water Resource and Water Use Engineering, Department of Regional Resource Environment Engineering, University of the Ryukyus.

I am truly blessed to be under the supervision of Prof. Kazuhito SAKAI and wish to extend my heartfelt appreciation for his guidance, kindness and spending his valuable time while understanding me. After successful completion of my PhD studies, I wish to serve my country in my fullest capacity.

まきの こうすけ  
牧野 耕輔 (日本)



研究 題 目：大隅地域の立地条件を考慮した適正な素材生産・販売のシステム化に関する研究

主 指 導 教 員：岡 勝 (鹿児島大学)

第一副指導教員：寺本 行芳 (鹿児島大学)

第二副指導教員：芝 正己 (琉球大学)

社会人博士課程、鹿児島大学所属の牧野と申します。修士課程を修了した後、法人設立、コンサル会社の特別研究員、愛媛大学非常勤講師、そして、森林経営計画が始まる節目の時期から森林組合に常勤職員として就職等、事業の現場で様々な実務を行ってきました。林業は産業としての自立性が乏しいと言われて久しいのですが、多くの問題を直視するなかで、職域や立場は違えども、それぞれ苦しい事情があり、それらが複雑に絡み合っていることを身をもって感じてきました。

さて、そうこうしているうちに、一昨年前にご縁があり、十数年間生活をしていた愛媛県から鹿児島大学農学部附属演習林の特任講師として鹿児島県にやって参りました。演習林では、平成26年度から始まりました教育関係共同利用拠点の担当として、鹿児島大学以外の大学や短期大学等からの高隈演習林利用を推進しております。鹿児島県内はもとより、北は東北地方、南は沖縄まで様々な大学からご利用いただいております。本演習林は、スギを中心とした人工林1,171ha、広葉樹林1,877haを有する大変魅力ある実習・研究フィールドですので、対象地を探している方がおられましたら是非ご活用ください。

連大在学中は、これまで培ってきた現場の視点を大事にしつつ研究を行っていきたくと考えております。同窓の皆様、指導教員の先生方からご教授賜りながら見識を深めていけることを楽しみにしております。よろしくお願いたします。

## 水産資源環境科学・Fisheries Science on Resources and Environments

ここの じゅんぺい  
小園 淳平 (日本)



研究 題 目：淡水紅藻類の生育環境と生態に関する研究

主 指 導 教 員：寺田 竜太 (鹿児島大学)

第一副指導教員：山本 智子 (鹿児島大学)

第二副指導教員：本村 浩之 (鹿児島大学)

指導補助教員：遠藤 光 (鹿児島大学)

はじめまして、連合農学研究科農水圏資源環境科学専攻の小園淳平です。長崎大学環境科学部、鹿児島大学大学院水産学研究科を卒業して博士課程に進学しました。鹿児島生まれ鹿児島育ちです。藻類学について研究しており、卒業研究においてはある海岸域の海藻相調査、修士においては淡水域に生育する大型紅藻の

光合成活性について研究してきました。

博士課程のテーマは、修士過程で行った研究を更に発展させた、淡水紅藻類の生育環境と生態に関する研究です。淡水紅藻というあまり馴染みのない分類群は、清澄な河川に生育する大型紅藻のことで、日本においてはそのほとんどが絶滅危惧種に指定されています。そういった淡水紅藻を保護・保全するためには生理生態的な知見を蓄積しなければなりません。私は淡水紅藻について光合成活性という観点から生理生態を明らかにし、その保護や保全に役立てることを目的としています。

長くなりましたが、博士課程の3年間を充実したものにしたいと思っています。授業やセミナー等でお話しする機会があれば、よろしく申し上げます。

◇学生の研究活動

2016年度在学生の学会等発表

生物生産科学専攻（熱帯資源・植物生産科学連合講座）

● 著書・論文等

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
下村 彩	*Aya Shimomura, Ayumi Naka, Nobuyuki Miyazaki, Sayaka Moriuchi, Susumu Arima, Shusei Sato, Hideki Hirakawa, Makoto Hayashi, Maskit Maymon, Ann M. Hirsch, Akihiro Suzuki	Blue light perception by both roots and rhizobia inhibits nodule formation in Lotus japonicus	Molecular Plant-Microbe Interactions	Volume 29, Issue 10, P786-796	Oct-17	paper
下村 彩	*Aya Shimomura, Susumu Arima, Makoto Hayashi, Maskit Maymon, Ann M. Hirsch, Akihiro Suzuki	Blue light does not inhibit nodulation in Sesbania rostrata	Plant Signaling and Behavior	Volume 12, Issue 1, Article number e1268313	Jan-17	paper
下村 彩	*Maki Nagata, Naoya Yamamoto, Taro Miyamoto, Aya Shimomura, Susumu Arima, Ann M. Hirsch, Akihiro Suzuki	Enhanced hyphal growth of arbuscular mycorrhizae by root exudates derived from high R/FR treated Lotus japonicus	Plant Signaling and Behavior	Volume 11, Issue 6, Article number e1187356	Jun-17	paper
シェイク モハメド マス	* Sheikh Muhammad Masum, Md. Amzad Hossain, Hikaru Akamine, Jun-Ichi Sakagami and Prasanta C. Bhowmik	Allelopathic potential of indigenous Bangladeshi rice varieties	Weed Biology and Management	16: 119-131	2 March, 2016	—

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
寶川 拓生	*Hiroo Takaragawa・Shin Yabuta・Kenta Watanabe・Yoshinobu Kawamitsu	Effects of Bagasse- and Sunflower Residue-derived Biochar Application in Soil on Growth and Yield of Oilseed Sunflower	Tropical Agriculture and Development	—	—	論文
渡邊 健太	*Kenta Watanabe, Jun Tominaga, Shin Yabuta, Hiroo Takaragawa, Ryuichi Suwa, Masami Ueno, Yoshinobu Kawamitsu	Effects of different kinds of potassium and chloride salts on sugarcane quality and photosynthesis	Sugar Tech	—	2016/10月	論文
渡邊 健太	渡邊健太・寶川拓生・上野正実・川満芳信	施肥管理を通じたサトウキビの糖度向上に関する研究第3報. 塩化カリおよび硫酸カリが圃場栽培サトウキビの収量および糖度に与える影響	沖縄農業	48巻1号 p45-56	2017/2月	論文
コンスタンティン サカラ ブスング アタス クウィラサ	Busungu, C., S. Taura, J. Sakagami and K. Ichitani	Identification and linkage analysis of a new rice bacterial blight resistance gene from XM14, a mutant line from IR24	Breeding Science	66: 636-645	August 3, 2016	book
島田 温史	*山本雅史・島田温史	パッションフルーツ栽培における開花期間の延長による安定多収生産技術の開発	サンケイ科学振興財団研究報告	No. 26: p23-30	2016/6/20	その他： 参考資料

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
島田 温史	*Shimada, A., Kubo, T., Tominaga, S. and Yamamoto, M	Effect of temperature on photosynthesis characteristics in the passion fruits 'Summer Queen' and 'Ruby Star'	The Horticulture Journal	—	—	論文

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
下村 彩	*下村 彩・有馬 進・鈴木 章弘	マメ科植物への緑色光照射による根粒形成への影響	2016/5/28-29	日本、鹿児島	口頭発表
下村 彩	*下村彩 ・有馬進 ・鈴木章弘	セスバニアの根粒形成は青色光で阻害されない	2016/9/7-9	日本、宮城	ポスター発表
シェイク モハメド マスム	* Sheikh Muhammad Masum, Md. Amzad Hossain, Hikaru Akamine and Jun-Ichi Sakagami	Allelopathy Study of Bangladesh Indigenous Rice	September 10 -11, 2016	Otsu, Japan	Oral
寶川 拓生	*寶川拓生・小橋川隆一・渡邊健太・川満芳信	サトウキビ草型の評価について	2016/8/12	沖縄県糸満市	ポスター発表
寶川 拓生	*寶川拓生・渡邊健太・上野正実・川満芳信	サトウキビ単収低下要因としての品種形質の変化 - 生産力検定試験のデータから -	2016/10/6	沖縄県糸満市	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
寶川 拓生	*寶川拓生・渡邊健太・Dinh Thai Hoang・川満芳信	耐乾性の異なるサトウキビ2品種の混植が地下部形成に与える影響	2016/10/8-9	鹿児島大学	口頭発表
寶川 拓生	*Hiroo Takaragawa・Kenta Watanabe・Thanankorn Jaiphong・Mai Nakabaru・Yoshinobu Kawamitsu	Crop diversity: effect of mixed cultivars on the growth and yield of sugarcane	2016/12/5-8	タイ, チェンマイ	口頭発表
寶川 拓生	*寶川拓生・渡邊健太・Dinh Thai Hoang・川満芳信	サトウキビ草型の多様性およびその評価方法の改良	2017/3/29-30	東京大学	口頭発表
渡邊 健太	*渡邊健太・寶川拓生・浅見祐弥・川満芳信	サトウキビのイオン吸収特性の品種間差とそのデータの利用	2016/10/7	沖縄県糸満市	口頭発表
渡邊 健太	*渡邊健太・寶川拓生・川満芳信	灌漑水中塩濃度がサトウキビの生育および糖度に与える影響	2016/10/8-9	鹿児島県鹿児島市	口頭発表
渡邊 健太	*K Watanabe, H Takaragawa, M Nakabaru, E Taira, M Ueno and Y Kawamitsu	Effects of different kinds of K <sup>+</sup> and Cl <sup>-</sup> salts on sugarcane growth, quality and ion composition	2016/12/5-8	タイ, チェンマイ	口頭発表
渡邊 健太	*渡邊健太・寶川拓生・前川武蔵・松原拓磨・川満芳信	高 KCl 施肥下でのサトウキビのイオン・糖蓄積特性における品種間差異	2017/3/29-30	東京都文京区	口頭発表
ティンタイ ホン	Dinh Thai Hoang*, Kenta Watanabe, Hiroo Takaragawa, Yoshinobu Kawamitsu	Photosynthetic response and nitrogen use efficiency of sugarcane under drought stress conditions	29-30/03/2017	Japan, Tokyo	Oral
浅見 祐弥	*浅見祐弥, 川満芳信	異なる窒素施肥量がニトベギクの光合成特性, 成長および含有成分に与える影響	2017/3/11-12	神奈川県藤沢市	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
コンスタンティン サカガミ アタス クワイサ	Constantine Busungu , K. Ichitani , J. Sakagami, T. Anai, Y. Kawaguchi, K. Kawabe4 and S. Taura.	Fine mapping and characterization of XA42, A gene showing multiple resistance to rice bacterial blight strains	2 days	Nagoya,Japan	Poster
島田 温史	*島田温史・倉本 薫・朴 炳宰・橋本文雄・山本雅史	パッションフルーツにおける成熟期の温度と果実品質との関係	2016/9 月	愛知県	口頭発表
島田 温史	*島田温史・山本雅史	乾燥ストレスを与える時期の違いがパッションフルーツの樹体生育および果実品質に及ぼす影響	2016/3 月	神奈川県	口頭発表
島田 温史	*島田温史・山本雅史	キイロクダモノトケイソウにおける温度と光合成との関係	2016/10 月	鹿児島県	ポスター発表
島田 温史	楊学虎・*島田温史・山本雅史	高温がアボカド数品種の光合成特性に及ぼす影響	2017/3 月	神奈川県	ポスター発表

生物生産科学専攻（動物資源生産科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
ウイン ミトウエ	*Win Mi Htwe, Yin Yin Kyawt, Sarayut Thaikua, Yuriko Imai, Susumu Mizumachi, Yasuhiro Kawamoto	Effects of lead contamination in soils on dry biomass, concentration and amounts of lead accumulated in three tropical pasture grasses	Grassland Science	62 (3): 167-173	2016.7	Paper
ウイン ミトウエ	*Win Mi Htwe, Yin Yin Kyawt, Sarayut Thaikua, Yuriko Imai, Susumu Mizumachi, Yasuhiro Kawamoto	Effects of liming on dry biomass, lead concentration and accumulated amounts in roots and shoots of three tropical pasture grasses from lead contaminated acidic soils	Grassland Science	62 (4), 257-261	2016.1	Paper
溝部 大和	Yamato Mizobe*, Naoto Oya, Reiko Iwakiri, Naomi Yoshida, Yumi Sato, Kazuchika Miyoshi, Makoto Tokunaga, Yuji Ezono	Effects of early cleavage patterns of human embryos on subsequent in vitro development and implantation	Fertility and Sterility	Volume 106, Issue 2, August 2016, Pages 348-353	published online April 30,2016.	paper
溝部 大和	Yamato Mizobe*, Naoto Oya, Reiko Iwakiri, Naomi Yoshida, Yumi Sato, Nanase Onoue, Kazuchika Miyoshi, Makoto Tokunaga, Yuji Ezono	Developmental ability of embryos produced from oocytes with fragile oolemma by intracytoplasmic sperm injection	Journal of Assisted Reproduction and Genetics	2016 33:1685-1690	Published online: 17 September 2016	paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
主税 裕樹	*主税裕樹・高山耕二・中西良孝	舎飼いヤギ群における優劣順位が 飼料採食競合に及ぼす影響	日本暖地畜産学 会報	59 (2) :89-97	2016/9 月	論文

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、 口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
ウイン ミトウエ	*Win Mi Htwe・Yasuhiro Kawamoto	Effects of EDTA on dry matter and lead uptake in Brachiaria decumbens and Paspalum atratum from lead contaminated acidic soil	2017/3/20-22	Japan, Aomori, Hirosaki University	Poster
溝部 大和	溝部大和*,大谷直人,岩切玲子,吉田直美,佐 藤友海,尾上七瀬,徳永誠,榎園祐治	第2極体の放出位置と胚発生の関係性	2016/9/15-16	日本 軽井沢	ポスター 発表
溝部 大和	溝部大和*,大谷直人,岩切玲子,吉田直美,佐 藤友海,尾上七瀬,徳永誠,榎園祐治	発育過程に観察される得意的な現象と流産 の関係性	2016/11/3-4	日本 横浜	口頭発表
モー ルウィン	*Moe Lwin,Misao KANEMAKI,Yoshi KAWAMOTO,Kotaro KAWABE,Shin OKAMOTO,Takeshi SHIMOGIRI	Molecular Genetic Study of Kuchinoshima Feral Cattle using their fecal samples	22-25/8/2016	Japan,Fukuoka	Oral
主税 裕樹	*主税裕樹・高橋 浩・大島一郎・高山耕 二・中西良孝	飼槽の配置間隔が舎飼い山羊群の飼料採食 競合に及ぼす影響	2017 年	日本、神戸市	口頭発表

生物生産科学専攻（地域・国際資源経済学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
出花幸之介	出花幸之介* 与那覇至 加藤 雅明	サトウキビわい化病と種苗対策	植物防疫	70 巻 12 号: 12-16	2016/12 月	総説
出花幸之介	出花幸之介* 島袋正樹	サトウキビにおける甘蔗糖度、純糖 率、還元糖濃度の地域間、年次間、 収穫時期間の変動 — 沖縄県内 における「逆転生産プロセス」の適応 性について—	沖縄の農業と経 済	第 5 号: 75-81	2016/8 月	論文
伊村 達児	伊村 達児	沖永良部島における産地仲買人の 馬鈴薯集出荷行動	—	—	—	—
樊 帆	樊帆	熊本県「えと菜園」におけるエシカ ル消費の可能性の実態分析—農産 物ネット販売を中心に—	食農資源経済論 集	—	—	論文
樊 帆	樊帆・秋山邦裕	農産物の産直ネット販売をめぐる 論点と課題 — 農家連携による産 直ネット販売の意義—	鹿児島大学農学 部学術報告	—	—	紀要
トラン クック ナン	トラン クック ナン	Current status and problems of rice contract farming in the Mekong delta, Vietnam	Agricultural Marketing Journal of Japan	—	—	paper

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、 口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
マヤ スルタナ	Maya Sultana, Dr. Yoshiharu Shiratake	Oral	March	Fukuoka prefecture	Oral presentation
レスマ ホック	Inaoka Tsukasa, Ueno Daisuke	Evaluation of DDTs Intake Through Food Items for Reproductive Age Group Women in Bangladesh	3days	Japan, Okinawa	Poster Presentation
グエン ティ ゴク トウオン	Nguyen Thi Ngoc Thuong	Contract Farming in Lychee Production and Marketing in Northern Vietnam	November 7-9, 2016	Okinawa, Japan	Oral presentation
出花幸之介	出花幸之介*	南西諸島におけるさとうきびの長期連作と 収量の漸減	2016年	那覇市	口頭発表
出花幸之介	出花幸之介*、比屋根真一、与那嶺介功、 比嘉正徳、金城榮毅、大城卓也	サトウキビの発芽改善に関する研究 サト ウキビ黒腐れ病抵抗性の検定法の開発（その 1）	2016/9月	糸満市	口頭発表
前田 藍	前田藍*、内藤重之、杉山泰彦	遠隔園芸産地における物流システムの構築	2016	日本、徳島	口頭発表
樊 帆	樊帆	「熊本県「えと菜園」におけるエシカル消費 の可能性の実態分析 ―農産物ネット販売を 中心に―	2106/9月	日本宮崎市	—
トラン クック ナン	presenter	Current status and problems of rice contract farming in the Mekong delta, Vietnam	July 2-3, 2016	Tokushima	oral
チュウニン ハビエル エトワルト	CHEWNING PRECIADO Javier Eduardo	Seafood Consumption Preferences of Japanese Citizens, With Emphasis on the Millennial Generation	Two days	Oita, Japan	Oral, presentation

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、 口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
チュウニン ハビエル エトワルド	CHEWNING PRECIADO Javier Eduardo	A Study of the Ecolabel System Certification Process and Impact on the Seafood Market in Japan	Three days	Naha, Japan	Oral, presentation

応用生命科学専攻（生物機能化学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
トア <sup>ン</sup> ダ <sup>ン</sup> フィ コ <sup>ン</sup>	Cong Dang Phi DOAN*, Ayako SANO, Hisanori TAMAKI, Hoang Nguyen Duc PHAM, Xo Hoa DUONG, Yoshie TERASHIMA	Identification and biodegradation characteristics of oil-degrading bacteria from subtropical Iriomote Island, Japan, and tropical Con Dao Island, Vietnam	TROPICS	25(4)	2017/3/1	—
廣重 亮一	廣重亮一*,村上知徳,曾我部昭好,井上章二,金城一彦	木質住宅における基礎周囲の防蟻に関する研究（第一報）-ニチュアハウスを用いた基礎周囲におけるシロアリの侵入経路について-	木材保存	42(4),199-207	2016/9 月	論文
廣重 亮一	廣重亮一*,曾我部昭好,山崎一利,高橋信夫,井上章二,金城一彦	木質住宅における基礎周囲の防蟻に関する研究（第二報） —基礎貫通部におけるゴム基材の利用—	木材保存	43(1),13-27	2017/1 月	論文

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、 口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
ジャンナトル フェルトス	—	Effects of Amino acids on the fermentation profile of mitochondria-targeted autophagy deficient sake yeast mutant	3-Dec-16	Japan,Fukuoka	Oral
トアンダン フィコン	Doan Dang Phi Cong*, Yoshi Terashima	Comparison of distribution of oil-degrading filamentous fungi on subtropical Iriomote Island, Japan, and tropical Con Dao Island, Vietnam	2016/9/7-9	Shizouka prefecture	Oral presentation
トアンダン フィコン	Cong Dang Phi Doan*, Hoang Nguyen Duc Pham, Xo Hoa Duong, and Yoshie Terashima	Biodiversity of oil-degrading microorganisms on Con Dao Island, Vietnam	2016/10/30 -11/1	Hochiminh City, Vietnam	Poster
瀬戸口 翔	*瀬戸口 翔、章 超、宮成 亮太、山田 修、水谷 治、岩井 謙一、高瀬 良和	黄変黒麹が焼酎醸造に与える影響とその要因	2016/10/19-20	日本、東京	口頭発表
瀬戸口 翔	*瀬戸口 翔、章 超、宮成 亮太、水谷 治、山田 修、二神 泰基、玉置 尚徳、岩井 謙一、高瀬 良和	黄変黒麹に関する研究	2016/12/14-15	日本、鹿児島	ポスター 発表
瀬戸口 翔	*瀬戸口翔、水谷治、高橋徹、山田修、二神泰基、玉置尚徳、岩井謙一、高瀬良和	黒麹菌 <i>Aspergillus luchuensis</i> の酸性プロテアーゼ遺伝子破壊株および高発現株の解析	2016/11/17-18	日本、京都	ポスター 発表
アハガソコダ アラッチゲ マトウカ スホテイニー	*Maduka Subodinee Ahangangoda Arachchige, Hirohide TOYAMA	Physiological and molecular analyses of yeasts isolated from Toddy in Sri Lanka.	March 27-30, 2016	Japan/Sapporo	Poster

応用生命科学専攻（食品機能科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
マニクハルダ	Manikharda	Physical properties, flavor characteristics and antioxidant capacity of Shimatogarashi ( <i>Capsicum frutescens</i> )	Food Science and Technology Research	—	—	—
舟橋亜希	*Aki Funahashi, Takao Itakura, Abeer A.I. Hassanin, Seiichi Hayashi, Masaharu Komatsu, Yoshio Kaminishi	Ubiquitous distribution of fluorescent protein in muscles of four species and two subspecies of eel (genus <i>Anguilla</i> )	Journal of Genetics	—	—	論文
保 聖子	*保聖子、折田和三、木村郁夫	ゴマサバの蓄養可能期間の検討	日本水産学会誌	—	2017/5 月	論文
保 聖子	*保聖子、里見正隆、舊谷亜由美、仁部玄通、稲盛重弘、木村郁夫	うるめいわし丸干における柑橘精油添加によるヒスタミン蓄積抑制効果について	日本水産学会誌	—	—	論文

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
張 曉霄	*Xiaoxiao Zhang, Akira Ohtsuka, Daichi Ijiri, Yukun Zhang	Effects of Dietary Processed Sweet Potato Waste Products on the Growth of Broiler Chicken	5-9 September, 2016	China,Beijing	oral
張 曉霄	*Xiaoxiao Zhang, Daichi Ijiri, Ryouji Kanda and Akira Ohtsuka	Effect of Feeding Sweet Potato Waste Products on Growth Performance, Digestibility and Meat Quality of Broilers	30-Mar-17	Kobe,Japan	oral
保 聖子	*保聖子、里見正隆、本田（舊谷）亜由美、仁部玄通、稲盛重弘、木村郁夫	イワシ丸干品製造工程におけるヒスタミンの蓄積及びその抑制方法	2016.9.8-11	奈良市	口頭発表
保 聖子	*保聖子、仁部玄通、和田和彦、小路口拓輝、稲盛重弘、木村郁夫	シラス（イワシ稚魚）の冷蔵保存における自己消化	2017.3.26-29	東京	口頭発表

応用生命科学専攻（先端応用生命科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
飯笹さやか	Sayaka Iizasa*, Ei'ichi Iizasa, Sawako Matsuzaki, Hiroyuki Tanaka, Yutaka Kodama, Keiichi Watanabe & Yukio Nagano	Arabidopsis LBP/BPI related-1 and -2 bind to LPS directly and regulate PR1 expression	Scientific reports	6/27527	8-Jun-16	paper
久永 絢美	*Ayami Hisanaga, Rie Mukai, Kozue Sakao, Junji Terao, De-Xing Hou	Anti-inflammatory effects and molecular mechanisms of 8-prenyl quercetin	Molecular Nutrition & Food Research	60(5):1020-1032	2016/5/4	paper
フィービー ザパント トリオ	*Phoebe Zapanta Trio, Satoru Fujisaki, Shunsuke Tanigawa, Ayami Hisanaga, Kozue Sakao, De-Xing Hou	DNA Microarray Highlights Nrf2-Mediated Neuron Protection Targeted by Wasabi-Derived Isothiocyanates in IMR-32 Cells.	Gene Regulation and Systems Biology	10: 73-83	2016/8/11	paper
ムタンダ イシマエル	Ishmael Mutanda*, Seikoh Saitoh, Masashi Inafuku, Hiroaki Aoyama, Tomonori Takamine, Kazuhito Satou, Masako Akutsu, Kuniko Teruya, Hinako Tamotsu, Makiko Shimoji, Haruki Sunagawa, Hirosuke Oku	Gene expression analysis of disabled and re-induced isoprene emission by the tropical tree Ficus septica before and after cold ambient temperature exposure	Tree Physiology	36: 873-882	2016/8/1	paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
ムタンダ イシマエル	Ishmael Mutanda, Masashi Inafuku, Seikoh Saitoh, Hironori Iwasaki, Masakazu Fukuta, Keichi Watanabe, Hirosuke Oku	Temperature controls on the basal emission rate of isoprene in a tropical tree <i>Ficus septica</i> : exploring molecular regulatory mechanisms	Plant, Cell & Environment	39: 2260-2275	2016/10/1	paper
ムタンダ イシマエル	Ishmael Mutanda, Masashi Inafuku, Hironori Iwasaki, Seikoh Saitoh, Masakazu Fukuta, Keichi Watanabe, Hirosuke Oku	Parameterization of G-93 isoprene emission formula for tropical trees <i>Casuarina equisetifolia</i> and <i>Ficus septica</i>	Atmospheric Environment	141: 287-296	2016/9/1	paper
白石 洋平	*Yohei Shiraishi, Yumiko Yoshizaki, Toshifumi Ono, Hiroaki Yamato, Kayu Okutsu, Hisanori Tamaki, Taiki Futagami, Sameshima Yoshihiro and Kazunori Takamine	Characteristic odour compounds in shochu derived from rice koji	Journal of the Institute of Brewing	122(3): 381-387	2016/7/19	paper
白石 洋平	*白石洋平, 安藤有加, 奥津果優, 吉崎由美子, 二神泰基, 玉置尚徳, 和久豊, 高峯和則	芋焼酎へのプロテアーゼ剤添加による揮発成分と官能評価への影響	日本醸造協会誌	—	—	paper
白石 洋平	*白石洋平, 安藤有加, 奥津果優, 吉崎由美子, 二神泰基, 玉置尚徳, 和久豊, 高峯和則	芋焼酎の香気形成に及ぼすアミノ酸の影響	日本醸造協会誌	—	—	paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
伍 樹松	Shusong Wu*, Satoshi Yano, Ayami Hisanaga, Xi He, Jianhua He, Kozue Sakao and De-Xing Hou	Polyphenols from <i>Lonicera caerulea</i> L. berry attenuate experimental nonalcoholic steatohepatitis by inhibiting proinflammatory cytokines productions and lipid peroxidation	Molecular Nutrition & Food Research	—	Feb-17	paper
フィービー サハント トリオ	*Phoebe Zapanta Trio, Satoru Fujisaki, Shunsuke Tanigawa, Ayami Hisanaga, Kozue Sakao, De-Xing Hou	DNA microarray highlights Nrf2-Mediated neuron protection targeted by Wasabi-derived isothiocyanates in IMR-32 cells	Gene Regulation and Systems Biology	10: 73-83	2016	paper
フィービー サハント トリオ	*Phoebe Zapanta Trio, Atsuyoshi Kawahara, Shunsuke Tanigawa, Kozue Sakao, De-Xing Hou	DNA microarray profiling highlights Nrf2-mediated chemoprevention targeted by Wasabi-derived isothiocyanates in HepG2 cells	Nutrition and Cancer	69: 105-116	2017	paper
矢野 敏史	*Wu S, Yano S, Hisanaga A, He X, He J, Sakao K, Hou DX	Polyphenols from <i>Lonicera caerulea</i> L. berry attenuate experimental nonalcoholic steatohepatitis by inhibiting proinflammatory cytokines productions and lipid peroxidation	Molecular nutrition & food research	10.1002/mnfr.201600858	15-Feb-17	paper

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に *印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
高取 由佳	*高取由佳、清水圭一、橋本文雄	トルコギキョウにおける黄色花の遺伝様式	2016/9/10-11	愛知県名古屋	ポスター 発表
ムタンダ イシマエル	Ishmael Mutanda*, Masashi Inafuku, Hironori Iwasaki, Hirosuke Oku	An iterative procedure to optimize predictions of isoprene emissions from tropical trees	2016/9/16-19	Japan, Okinawa, Ginowan	Poster
久場由真仁	久場由真仁*・平良東紀	$\beta$ アノマー特異的ミドリカタヒバ ( <i>Selaginella doederleinii</i> ) 由来キチナーゼの性質	2016/8/18-19	埼玉県川越市	ポスター 発表
印 セン	Xuan Yin, Yumiko Yoshizaki, Haruka Takeuti, Genqiao Liu, Kayu Okutsu and Kazunori Takamine	Study on the Identification of Characteristic Aroma Components of Xiaoqu Mijiu and Quality Stabilization	2017/2/28	佐賀	ポスター 発表
中村 嘉孝	中村嘉孝*、竹元渉、金子健誠、紙谷喜則、 濱中大介、石橋松二郎	ミドリムシを利用したメタン発酵消化液中 の食中毒細菌の殺菌検証	2016/11/25-26	日本、鹿児島県鹿 児島市	ポスター 発表
矢野 敏史	*矢野敏史、坂尾こず枝、侯徳興	ワサビ機能性成分の抗癌作用および抗癌剤 との併用効果の解析	2017/3/17-20	日本・京都	口頭発表

農水圏資源環境科学専攻（生物環境保全科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
佐藤 一輝	*Kazuki Sato, Toyoshi Yoshiga, Koichi Hasegawa	Involvement of vitamin B6 biosynthesis pathways in the insecticidal activity of <i>Photorhabdus luminescens</i>	Applied and Environmental Microbiology	82号、3546-3553 頁	2016/6月	論文
八坂 亮祐	Ohshima K*, Nomiya R, Mitoma S, Honda Y, Yasaka R, Tomimura K	Evolutionary rates and genetic diversities of mixed potyviruses in <i>Narcissus</i> .	Infection, Genetics and Evolution	45、213-223	2016/11月	論文
八坂 亮祐	Gibbs A*, Ohshima K, Yasaka R. Mohammadi M, Gibbs M. Jones R.	The phylogenetics of the global population of potato virus Y and its necrogenic recombinants.	Virus Evolution	—	—	論文
山本 崇	*Takashi Yamamoto, Yoshiaki Tsuda, Gustavo Maruyama Mori, Mariana Vargas Cruz, Yoshimi Shinmura, Alison K. S. Wee, Koji Takayama, Takeshi Asakawa, Takeru Yamakawa, Monica Suleiman, Juan Núñez-Farfán, Edward L. Webb, Yasuyuki Watano, and Tadashi Kajita	Development and Characterization of 27 Microsatellite Markers for the Mangrove Fern, <i>Acrostichum aureum</i> (Pteridaceae)	Applications in Plant Sciences	vol.4, issue 9	2016/9/19	論文

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
樋口 聡志	樋口 聡志*・行徳 裕・飯田 博之・津田 勝男	熊本県でのタバココナジラミバイオタイプ Q（カメムシ目：コナジラミ科）の野外越冬の可能性	日本応用動物昆虫学会誌	61 巻、第 1 号、 p1-8	2017 年	論文
金井 賢一	守山 泰司*・金井 賢一	トカラ列島口之島，諏訪之瀬島，平島，小宝島，宝島の昆虫（2016 年）	鹿児島県立博物館研究報告	36 号:1-18	2017/3/30	紀要
金井 賢一	金井賢一	口永良部島の昆虫（2016 年）	鹿児島県立博物館研究報告	36 巻:19-26	2017/3/30	紀要
金井 賢一	金井賢一	レッドデータブック	南日本新聞「かごラボ」	南日本新聞朝刊	2016/6/11	その他
金井 賢一	金井賢一	新燃岳の噴火と昆虫	南日本新聞「かごラボ」	南日本新聞朝刊	2016/5/14	その他
金井 賢一	金井賢一	雪に耐えたクロボシセセリ	南日本新聞「かごラボ」	南日本新聞朝刊	2016/5/28	その他
金井 賢一	金井賢一	口永良部島のアリ	南日本新聞「かごラボ」	南日本新聞朝刊	2016/6/25	その他
金井 賢一	金井賢一	ブキミなむし・ムシ・蟲	鹿児島県立博物館自然だより	122 号	2016/7/1	その他
金井 賢一	金井賢一	標本を作る意味とは？	鹿児島県立博物館自然だより	127 号	2016/12/1	その他
金井 賢一	金井賢一	擬態	鹿児島県立博物館自然だより	128 号	2017/1/3	その他

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
金井 賢一	金井賢一	鹿児島市で採集されたノコギリクワガタ雌雄型	SATSUMA	157号:91	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一*・福元正範	枕崎市妙見町でオキナワスジボタルを採集	SATSUMA	157号:83	2016/11/19	その他
金井 賢一	守山泰司*・金井賢一	トカラロ之島におけるタイワンモンシロチョウの記録	SATSUMA	157号:46-47	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一*・福元正範	2016年7月南さつま市加世田～坊津でのクロマダラソテツシジミの状況	SATSUMA	157号:44-45	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一	2016年、クロマダラソテツシジミの鹿児島県本土への上陸経過	SATSUMA	157号:42-43	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一	2016年夏、鹿児島市内のクロボシセセリの記録	SATSUMA	157号:39	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一*・福元正範	南さつま市加世田に侵入したクロボシセセリ	SATSUMA	157号:36-38	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一	2016年春から夏、博物館周辺のツマベニチョウ	SATSUMA	157号:11	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一	金峰町におけるミヤマクワガタ11月の記録	SATSUMA	156号:99	2016/6/25	その他
金井 賢一	金井賢一	春のニワハンミョウが新鮮だった記録	SATSUMA	156号:98	2016/6/25	その他
金井 賢一	金井賢一	鹿児島県本土初記録のルリマダラ	SATSUMA	156号:68	2016/6/25	その他

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
金井 賢一	金井賢一*・山見 泰	指宿市開聞岳から沖縄県大宜味村まで飛んだアサギマダラ	SATSUMA	156号:26	2016/6/25	その他
金井 賢一	金井賢一	2016年1月の大雪を乗り越えたクロボシセセリ	SATSUMA	156号:22	2016/6/25	その他
金井 賢一	金井賢一	2015年7月に黒色アゲハチョウ類が多かった記録	SATSUMA	156号:7	2016/6/25	その他
金井 賢一	金井賢一	垂水市の野外で採集された外国産ヒラタクワガタ	SATSUMA	157号:92	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一	県立博物館にサラサヤンマ飛来	SATSUMA	157号:104	2016/11/19	その他
金井 賢一	金井賢一	標本を作る意味	南日本新聞「かごラボ」	南日本新聞朝刊	2017/1/14	その他
金井 賢一	金井賢一	擬態	南日本新聞「かごラボ」	南日本新聞朝刊	2017/1/28	その他
金井 賢一	金井賢一	昆虫の冬越し	南日本新聞「かごラボ」	南日本新聞朝刊	2017/2/11	その他
金井 賢一	金井賢一	イモムシ・ケムシ	南日本新聞「かごラボ」	南日本新聞朝刊	2017/2/25	その他
金井 賢一	金井賢一	薩南諸島の外来昆虫	奄美群島の外来生物	—	2017/3/31	著書
金井 賢一	金井賢一	九州及び南西諸島におけるチョウの分布拡大	環境 Eco 選書 12: チョウの分布拡大	293-314	2016/10/20	著書

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
川内 智裕	Makoto Ikenaga*, Masakazu Tabuchi, Tomohiro Kawauchi, and Masao Sakai	Application of Locked Nucleic Acid (LNA) Primer and PCR Clamping by LNA Oligonucleotide to Enhance the Amplification of Internal Transcribed Spacer (ITS) Regions in Investigating the Community Structures of Plant-Associated Fungi	Microbes And Environments	Vol. 31, No. 3, 339-348, 2016	2016/9 月	paper
川内 智裕	池永 誠*・川内智裕・境 雅夫	分子生態学的手法を用いた植物共存細菌の多様性解析法の確立と新たな研究展開	土と微生物（Soil Microorganisms）	Vol. 70 No. 1, pp.23～34（2016）	2016/4 月	—

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
佐藤 一輝	*Kazuki Sato, Toyoshi Yoshiga, Koichi Hasegawa	Genetic screening of Photorhabdus luminescens using C. elegans revealed vitamin B6 biosynthetic pathways as an essential pathogenic factor	2016/7/17-21	カナダ、 モントリオール	ポスター 発表
佐藤 一輝	佐藤一輝、宮田恵多、小澤壮太、*長谷川 浩一	V-ATPase を標的遺伝子としたクロゴキブリにおける全身性 RNAi 効果の検証	2016/11/9-10	日本、 栃木県宇都宮市	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
佐藤 一輝	*佐藤一輝、吉賀豊司、長谷川浩一	昆虫病原性細菌 <i>Photorhabdus luminescens</i> の病原性におけるビタミン B6 の重要性	2016/9/14-16	日本、東京都小金井市	口頭発表
佐藤 一輝	*佐藤一輝	昆虫病原性線虫とその共生細菌の新たな研究可能性 ～モデル線虫 <i>C. elegans</i> を用いたアプローチを中心に	2016/9/15-17	日本、宮城県岩沼市	口頭発表
八坂 亮祐	Adachi, S.*, Honma, T., Yasaka, R., Ohshima, K. and Tokuda, M.	Seasonal occurrence of TuMV and potential aphid vectors in Kyushu, Japan.	2016年	アメリカ合衆国, フロリダ	ポスター発表
八坂 亮祐	八坂亮祐*, 大島一里	小アジアとその周辺諸国におけるカブモザイクウイルスの拡散	2016年	日本, 佐賀市	口頭発表
八坂 亮祐	八坂亮祐*, 大島一里	カブモザイクウイルス侵入時期の年代推定：長崎産の一分離株を例として	2017年	日本, 熊本市	口頭発表
八坂 亮祐	安達修平*, 尋木優平, 吉田一貴, 八坂亮祐, 大島一里・徳田 誠	野外宿主植物からダイコンへの TuMV の伝搬時期と広食性・狭食性アブラムシが果たす役割	2017年	日本, 熊本市	口頭発表
佐藤 聖	佐藤聖*, 吉田綾美、龍田典子、上野大介、染谷孝	水耕栽培液に接種した大腸菌の作物体への侵入条件の検討	2016/9/5-7	佐賀市	口頭発表
浴野 泰甫	*浴野泰甫、竹内祐子、吉賀豊司、神崎菜摘	<i>Bursaphelenchus</i> 属線虫種の耐久型幼虫における角皮構造の種間比較	2016年	日本、小金井市	口頭発表
浴野 泰甫	*Kanzaki, N., Ekino, T., Tanaka,R., Woodruff, G. C., Ide, T., Yoshiga,T.	Preliminary survey of millipede-associated nematodes in Japan: Nematode isolation from three <i>Riukiaria</i> spp.	2016年	日本、小金井市	ポスター発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
浴野 泰甫	*保谷剛志、田中克、浴野泰甫、竹内祐子	マツノザイセンチュウの増殖力因子の解析	2016年	日本、小金井市	口頭発表
浴野 泰甫	*保谷剛志、田中克、浴野泰甫、中村慎崇、竹内祐子	マツノザイセンチュウの増殖力因子の解析	2017年	日本、鹿児島市	ポスター発表
浴野 泰甫	*浴野泰甫、吉賀豊司、竹内祐子、神崎菜摘	透過型電子顕微鏡を用いたマツノザイセンチュウ近縁種群の角皮構造の観察	2017年	日本、鹿児島市	ポスター発表
山本 崇	*Takashi Yamamoto, Yoshiaki Tsuda, Koji Takayama, Reiko Nagashima, Yoichi Tateishi and Tadashi Kajita	GENETIC STRUCTURE AND POPULATION DEMOGRAPHY OF WIDESPREAD SEA-DISPERSAL PLANTS VIGNA MARINA IN THE PACIFIC	2016/7/18-22	United States of America/Florida	口頭
山本 崇	*山本崇、津田吉晃、高山浩司、永嶋礼子、立石庸一、梶田忠	汎熱帯海流散布植物ハマアズキを用いた太平洋内の「見えない障壁」の探索	2016/10/29-30	日本/京都	ポスター
山本 崇	*山本崇、津田吉晃、高山浩司、永嶋礼子、立石庸一、梶田忠	汎熱帯海流散布植物ハマアズキの個体群動態解析	2017/3/9-12	日本/京都	ポスター
木下 哲	*木下哲 辻和希	沖縄島におけるアリ類の蜜源利用戦略についての考察	2017/3/14-18	東京	ポスター発表
鹿子木 聡	鹿子木聡*、上室剛、猪口真帆実、津田勝男、坂巻祥孝	少量農薬散布が茶園のカブリダニ類の個体数等に及ぼす影響	2016/10月	北海道札幌市	口頭発表
鹿子木 聡	鹿子木聡*、田布尾尚子、深水裕信、福山治郎、飯牟禮啓介、今西浩二、里中一富、堂菌正次	少量農薬散布機「かごしま式防除装置」の各種病害に対する防除効果	2016/10月	静岡県静岡市	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
エルサイト モハメド ト エルナハウェイ アブドルファタ	Elsaid Mohamed Elnabawy abdefatah, Katsuo Tsuda, Yositaka Sakamaki Presenter: Elsaid Mohamed Elnabawy Abdelfatah	Enhancement of web-builder spider populations in eggplant fields by surrounding flowering plants	25-30 September, 2016	Orlando, Florida, USA	Oral presentation
川内 智裕	境雅夫、池永 誠	The analysis of stable microbial community with ability of Cellulose degradation-Nitrogen fixation isolated from sediment of cut grass.	2016/10月	台湾、台北市	ポスター
川内 智裕	境雅夫、池永誠、高田花奈子	植物遺体分解過程で協同する セルロース分解細菌と窒素固定細菌の群集 構造解析	2016/9月	日本、佐賀県	口頭発表
川内 智裕	境 雅夫、池永 誠	植物遺体に存在するセルロース分解 - 窒素 固定機能を発現する微生物集団の解析	2016/6月	日本、岐阜県	ポスター

農水圏資源環境科学専攻（地域資源環境工学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
上村 将彰	*宮本英揮・上村将彰・平嶋雄太	デジタル TDT センサーを用いた土 壌の水分・電気伝 導度の同時計測	日本地下水学会 誌	59 巻 1 号	2017/2 月	論文
李 雨桐	中野拓治*, 李 雨桐, 阿部真己, 畑 恭子	状態空間モデルの適用を通じた農 業集落排水施設流入水の日水量負 荷変動と変動特性抽出に関する研 究	農業農村工学会 会誌	—	—	論文
楫田 優希	楫田優希*・中村嘉孝・金子健 誠・田原千成・勝目一成・紙谷 喜則	アルカリ性電解水による芋脂洗浄 効果及び洗浄メカニズムに関する 検討	農業生産技術管 理学会誌	23(4):11-15	2017/3 月	原著論文
ジャンノック ピヤマト	P. Jannok*, Y. Kamitani, K. Hironaka, M. Shibayama and S. Kawano	Development of an NIR calibration model with temperature compensation using common temperature-difference spectra for determining the Brix value of intact fruits	J. Near infrared Spectrosc	25(1) (2017)	2016/12 月	paper

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
上村 将彰	*上村将彰, 岡本幸大, 中川 啓, 宮本英揮	誘電分光法で測定した不飽和豊浦砂の誘電スペクトル	2016/10/29	京都府	ポスター発表
上村 将彰	宮本英揮, *上村将彰, 岡本幸大, 中川 啓	Maxwell-DeLor モデルで推定した不飽和砂の誘電スペクトル	2016/10/29	京都府	ポスター発表
上村 将彰	*藏座隆寛, 上村将彰, 宮本英揮	TDT および TDR センサーを利用した水位・電気伝導度の測定	2016/10/29	京都府	ポスター発表
李 雨桐	李雨桐*, 中野拓治, 阿部真己, 山本一生, 畑恭子	農業集落排水施設流入汚水量の変動特性に関する考察	2016/8/30-9/3	宮城県仙台市	口頭発表
知念 良之	*知念良之 芝正己	近世琉球期の多良間島における森林管理の展開とその特徴	2016/11/5	福岡県	口頭
楫田 優希	楫田優希*・金子健誠・田原千成・勝目一成・紙谷喜則	電解銀イオン水生成の基礎的研究—Cl イオンによる生成阻害の検討—	2016/9/7-8	日本、福岡	ポスター発表
楫田 優希	馬見塚裕介*・楫田優希・本多晃一・勝目一成・紙谷喜則	銀イオン水のバイオフィーム形成阻害効果の検証	2016/9/7-8	日本、福岡	口頭発表
楫田 優希	勝目一成*・金子健誠・田原千成・中村嘉孝・楫田優希・紙谷喜則	電解技術を用いた栽培液の管理手法の開発—藻類のコントロール法の検討—	2016/9/7-8	日本、福岡	口頭発表
マウナネ ヘーワ ジャカ プラーダ グナラタ	MHJP Gunarathna*, Kazuhito Sakai, Hiroyuki Kaneshiro and Yutaka Uehara	Introducing APSIM-OPIS module: Simulating Sugarcane Growth and Yield under Optimized Subsurface Irrigation System	29-30/10/2016	Kyoto, Japan	Oral

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
ジヤノック ピヤマト	P. Jannok*, Y. Kamitani, K. Hironaka, M. Shibayama and S. Kawano	Development of an NIR calibration model with temperature compensation using common temperature-difference spectra for determining the Brix value of intact fruits	30 November-3 December, 2016	Kagoshima, Japan	Oral
ジヤノック ピヤマト	P. Jannok*, Y. Kamitani, K. Hironaka, M. Shibayama and S. Kawano	Development of NIR calibration model with temperature compensation using common temperature-difference spectra for determining the Brix value of intact several fruit species	7-10 September, 2016	Fukuoka, Japan	Oral
ジヤノック ピヤマト	P. Jannok*, Y. Kamitani, K. Hironaka, M. Shibayama and S. Kawano	Development of an NIR calibration model with temperature compensation using common temperature-difference spectra for determining the Brix value of intact fruits	30 July-5 August, 2016	Chambersburg, USA	Poster
ジヤノック ピヤマト	P. Jannok*, Y. Kamitani, K. Hironaka, M. Shibayama and S. Kawano	Development of NIR calibration model with temperature compensation using common temperature-difference spectra for determining the Brix value of intact several fruit species	7-10 September, 2016	Fukuoka, Japan	Oral
藤山 宗	*藤山 宗、樽屋啓之、中田 達、浪平 篤、伊藤祐二、靱井和朗、酒井一人	開水路における漸縮係数に関する実験的研究	2016/8月	日本、宮城県	口頭発表
藤山 宗	*藤山 宗、伊藤夕樹、長野浩一、樽屋啓之、中田 達、靱井和朗、伊藤祐二	評価板を用いた簡易な粗度係数測定手法の検討	2016/10月	日本、鹿児島県	口頭発表

農水圏資源環境科学専攻（水産資源環境科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
マハムト アブトール ハミット オムランタウット	Dawood, M.A.O., Koshio, S., Ishikawa, M. & Yokoyama, S.	Immune responses and stress resistance in red sea bream, Pagrus major, after oral administration of heat-killed Lactobacillus plantarum and vitamin C.	Fish & Shellfish Immunology	54: 266-275	Jul-16	paper
マハムト アブトール ハミット オムランタウット	Dawood, M.A.O., Koshio, S., Ishikawa, M., El-Sabagh, M., Esteban, M.A. & Zaineldin, A.I.	Probiotics as an environment-friendly approach to enhance red sea bream, Pagrus major growth, immune response and oxidative status	Fish & Shellfish Immunology	57: 170-178.	Oct-16	paper
リチャラポン チュムチュウン	Watcharapong Chumchuen, Tatsuro Matsuoka*, Kazuhiko Anraku, Sukchai Arnupapboon	Size-selective catch in tropical tuna purse seine fishery in the Eastern Indian Ocean: Assessment on new selectivity model for purse seine net	Fisheries Science	82(3): 391-404	28/03/2016	paper
リチャラポン チュムチュウン	Watcharapong Chumchuen, Tatsuro Matsuoka*, Kazuhiko Anraku, Wilailux Premkit	Size-selective catch by fishing operation technique in tropical tuna purse seine fishery in the Western Indian Ocean: Feasibility of free school operation for skippers	Fisheries Science	82(3): 405-426	30/03/2016	paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
アイリス アン ゴリセタ ホーロンガン	*Borlongan, I. A. G., Gerung, G. S., Nishihara, G. N. and Terada R.	Light and temperature effects on photosynthetic activity of <i>Eucheuma denticulatum</i> and <i>Kappaphycus alvarezii</i> (brown and green color morphotypes) from Sulawesi Utara, Indonesia	Phycological Research	65: 69-79	—	Original article
アイリス アン ゴリセタ ホーロンガン	*Borlongan, I. A., Gerung, G. S., Kawaguchi, S., Nishihara, G. N. and Terada, R.	Thermal and PAR effects on the photosynthesis of <i>Eucheuma denticulatum</i> and <i>Kappaphycus striatus</i> (so-called Sacol strain) cultivated in shallow bottom of Bali, Indonesia	Journal of Applied Phycology	doi: 10.1007/s10811-016-0956-7	—	Article
アイリス アン ゴリセタ ホーロンガン	*Borlongan, I. A., Nishihara, G. N., Shimada, S., Terada, R.	Effects of temperature and PAR on the photosynthesis of <i>Kappaphycus</i> sp. (Solieriaceae, Rhodophyta) from Okinawa, Japan as the northern limit of native <i>Kappaphycus</i> distribution in the western Pacific	Phycologia	—	—	Original Article
ジヤナトゥル ファーハナ	Zannatul Farhana* and Jun Ohtomi	Ovarian maturation, size at sexual maturity, and spawning season of <i>Parapenaeus fissuroides</i> Crosnier, 1985 (Decapoda: Penaeidae)	Journal of Crustacean Biology	36(6): 815-822	14 September, 2016	Article

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
ジヤナトウル ファーハナ	Zannatul Farhana* and Jun Ohtomi	Growth pattern and longevity of Parapenaeus fissuroides Crosnier, 1985 (Decapoda, penaeidae) in Kagoshima Bay, southern Japan	Crustaceana	90(2): 153-166	—	—
三次 充和	*Mitsukazu Mitsugi, Yoko Hisamoto, Hiroshi Suzuki	An invasive freshwater shrimp of the genus Neocaridina Kubo, 1938 (Decapoda: Caridea: Atyidae) collected from Boso Peninsula, Tateyama City, Chiba Prefecture, eastern Japan	Crustacean Research	46号	2017年	論文
トスフサ テニオンセルジ	Mohammed Fouad El Basuini*, Abdelaziz Mohammed El-Hais, Mahmoud A.O. Dawood, Adel El-Sayed Abou-Zeid, Saad Zaglol EL-Damrawy, Malik Mohamed EL-Sayed Khalafalla, Shunsuke Koshio, Manabu Ishikawa, Serge Dossou	Effects of dietary copper nanoparticles and vitamin C supplementations on growth performance, immune response and stress resistance of red sea bream, Pagrus major	Aquaculture Nutrition	—	—	paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
福井 美乃	*Motomura, H., A. Habano, Y. Arita, M. Matsuoka, K. Furuta, K. Koeda, T. Yoshida, Y. Hibino, B. Jeong, S. Tashiro, H. Hata, Y. Fukui, K. Eguchi, T. Inaba, T. Uejo, A. Yoshiura, Y. Ando, Y. Haraguchi, H. Senou, and K. Kuriwa.	The ichthyofauna of the Uji Islands, East China Sea: 148 new records of fishes with notes on biogeographical implications.	Memoirs of Faculty of Fisheries Kagoshima University	—	2016年	—
福井 美乃	福井美乃・本村浩之	甌島列島から得られた国内2例目となるイソギンポ科オボロゲタテガミカエルウオ	Nature of Kagoshima	42: 311-314	2016年	論文
福井 美乃	福井美乃・小枝圭太・本村浩之	標本に基づくヒノマルテンス（ベラ科）の奄美大島と加計呂麻島からの記録，および成長に伴う形態変化に関する知見	Nature of Kagoshima	42: 293-297	2016年	論文
福井 美乃	松沼瑞樹・福井美乃・本村浩之	大隅半島東岸と鹿児島湾から得られたコチ科セレベスゴチ Thysanophrys celebica	Nature of Kagoshima	42: 97-102	2016年	論文
福井 美乃	*Fukui, Y. and H. Motomura	<i>Terelabrus flavocephalus</i> sp. nov., a new hogfish (Perciformes: Labridae) from the Maldives, Indian Ocean	Ichthyological research	63 (4): 529-535, DOI 10.1007/s10228-016-0523-x	2016年	論文

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
福井 美乃	*松沼瑞樹・福井美乃・本村浩之	鹿児島市の川魚図鑑	—	—	2016年	図鑑
福井 美乃	*Matsunuma, M., AG. Mazlan, A. Arshad, YG. Seah, S. Tafzilmeriam S. A. K., A. Azmi Ramasamy, R. P. Babaran, Y. Fukui, and H. Motomura	Distribution Range Extensions of <i>Parapercis bicoloripes</i> and <i>P. diplospilus</i> (Perciformes: Pinguipedidae) in the South China Sea and the Adjacent Waters, with Notes on Ontogenetic Changes in <i>P. bicoloripes</i>	Species Diversity	21: 187-196, DOI 10.12782/sd.21.2.187	—	論文
トスフサ テニオンセルジ	Mohammed Fouad El Basuini*, Abdelaziz Mohammed El-Hais, Mahmoud A.O. Dawood, Adel El-Sayed Abou-Zeid, Saad Zaglol EL-Damrawy, Malik Mohamed EL-Sayed Khalafalla, Shunsuke Koshio, Manabu Ishikawa, Serge Dossou	Effects of dietary copper nanoparticles and vitamin C supplementations on growth performance, immune response and stress resistance of red sea bream, <i>Pagrus major</i>	Aquaculture Nutrition	—	—	paper
福井 美乃	*Fukui, Y., N. Muto and H. Motomura	A new species of labrid fish <i>Oxycheilinus samurai</i> from the western Pacific Ocean	Ichthyological research	DOI 10.1007/s10228-016-0561-4	2016年	論文

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
田代 郷国	*田代郷国・木村祐貴・本村浩之	イソギンポ科ジュズダマギンポ <i>Blenniella interrupta</i> の種子島からの 記録. ,	Nature of Kagoshima	42 巻: 305-309 項	2016/5 月	論文
吉田 朋弘	*Yoshida, T., K. Koeda and H. Motomura	First Japanese specimen-based records of Cypho zaps (Perciformes: Pseudochromidae) from Yonaguni-jima Island, the Yaeyama Islands	Species Diversity	21(2),171-175	2016/11/25	論文
吉田 朋弘	*吉田朋弘・本村浩之	奄美群島から得られたテンジクダ イ科の稀種ムナホシイシモチ <i>Ostorhinchus cheni</i>	生物地理学会会 報	71: 253-258	2017/1/2	論文
吉田 朋弘	*Tomohiro Yoshida and Hiroyuki Motomura	A new cardinalfish, <i>Verulux solmaculata</i> (Perciformes: Apogonidae), from Papua New Guinea and Australia	Ichthyological Research	DOI 10.1007/s10228-0 16-0539-2	2017/7/11	論文
吉田 朋弘	*吉田朋弘・本村浩之	大隅諸島初記録のテンジクダイ科 魚類クダリボウズギス	Nature of Kagoshima	42: 173-177	2016/3/31	論文
吉田 朋弘	*吉田朋弘・山田守彦・前川隆 則・本村浩之	標本に基づく鹿児島県初記録のイ ナズマヒカリイシモチ <i>Siphamia argentea</i> (スズキ目：テンジクダイ 科)	Nature of Kagoshima	42: 169-172	2016/3/31	論文

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
吉田 朋弘	*吉田朋弘・本村浩之	鹿児島県におけるマダラテンジク ダイ <i>Apogonichthyoides umbratilis</i> の 分布状況	Nature of Kagoshima	42: 163-167	2016/3/31	論文
吉田 朋弘	*吉田朋弘・本村浩之	大隅諸島種子島から得られたハタ 科魚類トゲメギス <i>Pseudogramma</i> <i>polycantha</i>	Nature of Kagoshima	42: 143-146	2016/3/31	論文
吉田 朋弘	*吉田朋弘・高山真由美・本村浩 之	皮膚毒を有するハタ科魚類：アゴハ タ <i>Pogonoperca punctata</i> の種子島か らの記録	Nature of Kagoshima	42: 139-142	2016/3/31	論文
吉田 朋弘	*吉田朋弘・岩坪洸樹・本村浩之	九州初記録のハタ科魚類ヌノサラ シ <i>Grammistes sexlineatus</i>	Nature of Kagoshima	42: 135-138	2016/3/31	論文
吉田 朋弘	Koeda, K., Hibino, Y., *Yoshida, T., Kimura, Y., Miki, R., Kunishima, T., Sasaki, D., Furukawa, T., Sakurai, M., Eguchi, K., Suzuki, H., Inaba, T., Uejo, T., Tanaka, S., Fujisawa, M., Wada , H., Uchiyama, T.	Annotated checklist of fishes of Yonaguni-jima island, the westernmost island in Japan	—	v + 120	2016/9/24	書籍

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
吉田 朋弘	*Yoshida Tomohiro	Family Antennariidae, Apogonidae, Malacanthidae	Commercial and bycatch market fishes of Panay Island, Republic of the Philippines	55-56, 84, 96-102	—	著書
渡邊 裕基	Watanabe, Y.*, Yamada, H., Mine, T., Kawamura, Y., Nishihara, G. N., Terada, R.	Photosynthetic responses of <i>Pyropia</i> <i>yezoensis</i> f. <i>narawaensis</i> (Bangiales, Rhodophyta) to a thermal and PAR gradient vary with the life-history stage	Phycologia	55(6): 665-672	2016/8 月	学術論文
渡邊 裕基	Terada, R.*, Vo, T. D., Nishihara, G. N., Matsumoto, K., Kokubu, S., Watanabe, Y., Kawaguchi, S.	The effect of photosynthetically active radiation and temperature on the photosynthesis of two Vietnamese species of <i>Sargassum</i> , <i>S. mcclurei</i> and <i>S. oligocystum</i> , based on the field and laboratory measurements	Phycological Research	64(4):230-240	2016/10 月	学術論文
渡邊 裕基	渡邊裕基*, Gregory N. Nishihara, 寺田竜太	九州に生育するオニアマノリとイ チマツノリ配偶体の光合成に対す る光と温度の影響	藻類	64(3): 131-138	2016/11 月	論文

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
渡邊 裕基	Watanabe, Y.*, Morikawa, T., Mine, T., Kawamura, Y., Nishihara, G. N., Terada, R.	Chronological change and the potential of recovery on the photosynthetic efficiency of <i>Pyropia yezoensis</i> f. <i>narawaensis</i> (Bangiales) during the sporelings frozen storage treatment in the Japanese Nori cultivation	Phycological Research	—	—	学術論文
渡邊 裕基	Ryuta TERADA* and Yuki WATANABE	Seaweeds and Coastal Environment in the Osumi Islands	The Osumi Islands	Chapter16, 104-108	2017/3 月	著書

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
王 偉隆	—	Optimum Supplementation of Astaxanthin for Larval and Postlarval Kuruma Shrimp, <i>Marsupenaeus japonicus</i>	2016/10/22-23	鹿児島	ポスター
王 偉隆	—	Optimum supplementation of astaxanthin for larval and post-larval kuruma shrimp, <i>Marsupenaeus japonicas</i>	2016/11/11-14	China shanghai	oral

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
アイリス アン ゴリセタ ホーロンガン	*Iris Ann Borlongan, Grevo S. Gerung, Shigeo Kawaguchi, Gregory N. Nishihara, Ryuta Terada	Thermal and PAR effects on the photosynthesis of <i>Eucheuma denticulatum</i> and <i>Kappaphycus striatus</i> (Sacol strain) cultivated in shallow bottom of Bali, Indonesia	2016/03/18-20	Japan/ Tokyo	Poster
アイリス アン ゴリセタ ホーロンガン	*Iris Ann Borlongan, Gregory N. Nishihara, Satoshi Shimada, Ryuta Terada	Effects of temperature and PAR on the photosynthesis of <i>Kappaphycus</i> sp. (Solieriaceae, Rhodophyta) from Okinawa, Japan as the northern limit of native <i>Kappaphycus</i> distribution in the western Pacific	2017/03/24-25	Japan/ Kochi	Oral
ヒリアメ ヒータ ワカレブ	Viliame Pita Waqalevu	Comparison of growth ratio and fatty acid content in <i>Brachionus rotundiformis</i> and <i>B. plicatilis</i> fed three common Japanese nutritional enrichment diets	26-30/03/2016	Tokyo University of Marine Science and Technology, Tokyo, Japan	Poster
アディシン トウイト オリヒエ オスワルト	ADISSIN Tohouindo Olivier Oswald	Nutritivevalue of microalgae in Kuruma shrimp culture	Oct-16	JAPAN, Okinawa	Oral presentation
三次 充和	三次充和* 鈴木廣志	北海道十勝川流域より確認されたカワリヌマエビ属の一種	2016/10/2-23	鹿児島県	ポスター 発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
トス フサ デニョン セルジ	DOSSOU SERGE	NUTRITIONAL STUDIES ON EFFECTIVE UTILIZATION OF CANOLA BY-PRODUCTS ON CULTURED MARINE SPECIES	2016 NOVEMBER 7-9	JAPAN, OKINAWA	ORAL
アミナ サリナ モス	Amina S. Moss, Shunsuke Koshio, Manabu Ishikawa, Saichiro Yokoyama, Truong H. Nhu, Mahmoud A. O. Dawood	Effect of dietary phospholipids extracted from snails ( <i>Buccinum striatissimum</i> ) on the growth performance, survival rate, stress resistance, immune response, and fatty acid composition of juvenile kuruma shrimps, <i>Marsupenaeus japonicus</i> (Bate)	22-23 October, 2016	Kagoshima University, Kagoshima, Japan	Oral Presentation
小久保洋平		クルマエビの生体防御能におよぼす植物性タンパク質の影響	2017/3/26-30	東京都 東京海 洋大	口頭発表
福井 美乃	*福井美乃・本村浩之	ベラ科ミヤビベラ属魚類の2未記載種	2016/4/14	日本、鹿児島市	口頭発表
福井 美乃	*福井美乃・武藤望生・本村浩之	西太平洋から得られたベラ科ホホスジモチノウオ属の2未記載種	2016/9/24	日本、岐阜市	口頭発表
幅野 明正	*幅野明正、安楽和彦、大川諒、日永康晴、山中有一、三橋廷央	中深層性魚類の分光視感度	20017/3/26-30	日本 東京	ポスター 発表
吉田 朋弘	*吉田朋弘・本村浩之	南西諸島から得られたコミナトテンジクダイ属の1日本未記録種と1未記載種	2016/9/23-26	岐阜市	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
吉田 朋弘	*Keita Koeda, Yusuke Hibino, Tomohiro Yoshida, Yuki Kimura, Ryohei Miki, Taiga Kunishima, Daichi Sasaki, Takanao Furukawa, Momoko Sakurai, Keisuke Eguchi, Hiromu Suzuki, Tomoki Inaba, Takuya Uejo, Saki Tanaka, Misaki Fujisawa, Hidetoshi Wada, Teppei Uchiyama	The ichthyofauna of Yonaguni Island, off eastern Taiwan: 369 new records of fishes with notes on distributional implications	2016/5/18-21	台湾	口頭発表
河野 真知	*Machi Kawano, Seiichi Uno, Emiko Kokushi, Anne E McElroy, Jiro Koyama	Disturbances to metabolic profiles in Java medaka juveniles exposed oxyPAHs.	20-24 June, 2016	Hong Kong	oral

## ◇研究室紹介

応用生命科学専攻  
食品機能科学連合講座  
水産食品工学研究室（鹿児島大学水産学部）  
木村 郁夫

私たちの研究室のメインの研究テーマの一つは水産物の冷凍・解凍についてです。水産物の筋肉タンパク質は畜肉に比べて変性しやすく、また、死後硬直など致死後の鮮度変化も速く進行します。そのため、凍結解凍処理後の魚肉品質を高く維持することは重要な研究テーマです。今時、冷凍解凍の研究かと思われるかもしれませんが、実は、産業界では解決していない重要な技術課題が多数あります。例えば、冷凍中の血合肉や赤身肉の変色防止があります。食品の冷凍温度の国際基準は一般には $-20^{\circ}\text{C}$ ですが、このような温度帯で水産物を保存・輸送すると1か月もしないうちに、褐色に変色してしまい商品価値を失います。対策としては、マグロの保存温度として使われる $-50\sim-60^{\circ}\text{C}$ のような超低温保存や一酸化炭素（CO）処理があります。マグロ流通に使われている超低温保存・流通には、高額な装置やエネルギーコストがかかるため、日本、独特のものと考えていただければと思います。世界流通では $-20^{\circ}\text{C}$ が精々です。一方、CO処理については、変色に関わるミオグロビンに結合してCOミオグロビンが形成されます。鮮やかなピンク色となりますが、COミオグロビンは非常に安定なため、腐ってもその色調が維持され、鮮度誤認を起こすことが危惧されます。従い、世界の国のほとんど（日本、EU、オーストラリア、アジア諸国）では禁止されていますが、米国だけは許可されています。日本からの養殖ブリの輸出は伸びており、ここ数年130億円以上ですが、その9割程度は米国向けとなっています。世界の国に輸出することが可能となれば、その輸出量は倍以上になるでしょう。私たちの研究室では、世界の国々へ $-20^{\circ}\text{C}$ 程度の冷凍温度帯でブリを輸出できる仕組みを作ろうとしています。方法は、元々魚体に含まれているエネルギー物質のアデノシン三リン酸（ATP）のタンパク質変性抑制機能を利用するものです。ATPが高濃度で存在する魚肉では、筋肉タンパク質の変性は抑制され、ミオグロビンのメト化も抑制されます。この技術を実際に応用できるようにするために、国（農水省）は大型の補助事業で支援をしてくれています。すなわち、国はこの技術を是が非でも実現してほしいと期待してくれています。私たちも、この期待にしっかりと応えるべく、13機関が参画した研究チームにて取り組みを進めています。来年には私たちの開発した冷凍ブリ輸出が可能となると考えております。期待してください。



2016年 与論島での研究調査にて  
(与論島での伝統的な名前を付けていただきました)

## ◇留学生の近況

トラン クック ナン

Tran Quoc Nhan (Vietnamese)



Title of research: Analyses on rice contract farming and determinants of farm gate price of paddy in the Mekong delta, Vietnam

Advisory Professor: YUTAKA Tomoyuki (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: LEE Jaehyeon (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: TSUJI Kazunari (Saga University)

Year entered: April 2016

I am Tran Quoc Nhan, now the second year student of Ph.D. I come from the Mekong delta of Vietnam. The Delta is known as the “rice bowl” of Vietnam, contributing to 56% of total paddy production and 95% of total volume of export rice in Vietnam (GSO, 2014). Rice production is also the main income resource of the farmers in the Delta. Hence, rice production and marketing is playing a crucial role in the rice economy of Vietnam.

To gather primary data for the study, I did two field surveys in the Mekong delta. I conducted the first survey in An Giang and Dong Thap provinces to investigate the status and problems of rice contract farming enforcement in the Delta. I used the structured questionnaire to collect the primary data from one hundred and seven rice contract farmers through face-to-face interview in September 2015. I also interviewed local staffs who are responsible for the practice of rice contract farming. After gathering data, I discussed with my supervisor how to analyze the collected data and write the paper. I supervisor has suggested me to do presentation at the conference held by “The Agricultural Marketing Society of Japan” on 3rd July 2016 at Tokushima University. I have received a great number of valuable comments and contributing questions from other Ph.D. students and professors that help me a lot when writing the journal paper. After presentation, I have submitted my first journal paper to the Agricultural Marketing Journal of Japan and the paper has been accepted for publishing.

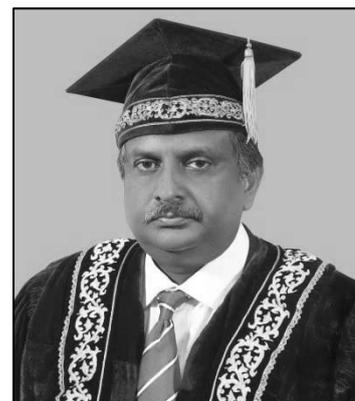
The second field survey, my supervisor also visited and interviewed rice farmers, representatives of agricultural cooperative, staffs of rice business companies in the Mekong delta in August 2016. We collected data from 161 rice farmers including traditional farmers, contract farmers, and stop-contract farmers. We analyzed the collected data to understand the rice contract farming between farmer and rice business firm in the Vietnamese Mekong Delta and find out the determinants of farm-gate price. I am going to do presentation at the conference held by the Agricultural Marketing Society of Japan in July 2017.

In this chance, I would like to express my great thanks to my major supervisor Professor YUTAKA Tomoyuki for his excellent guidance and valuable support during my study and living at Kagoshima University. I believe that my research will be helpful for policy making in rice production and marketing in the Mekong delta.

## ◇修了生より

### Profile of Professor Sampath Amaratunge

I am presently the Vice-Chancellor of the University of Sri Jayewardenepura. I obtained my B.A. (Hons.) in Economics from the same university and my M.A. in Economics from the University of Colombo. I also studied in Japan where I received a Master in Agricultural Economics from Saga University and a Ph.D. from the United Graduate School of Agricultural Science, Kagoshima University.



I have served more than 25 years as an academic at the University of Sri Jayewardenepura. Also, I have published more than 50 articles in international and national refereed journals and proceedings.

I was also a recipient of the prestigious Research Excellence Award in 2002, awarded by the Kyushu Society of Agricultural Economics, Japan in addition to several other local and international awards. I am an expert in the field of economics, specifically rural development.

The University of Sri Jayewardenepura is the oldest university in Sri Lanka. It was founded in 1873 as a Pirivena (Seat of Higher Learning for Buddhist Studies) under the name of “Vidyodaya Pirivena”. Later, it became a fully-recognized university, taking the name Vidyodaya University in 1959. With the passing of the Parliamentary Act of Universities in 1978, the university became the University of Sri Jayewardenepura and, currently, it is the largest state university in Sri Lanka in terms of student population.

When I became the Vice-Chancellor, the University had five faculties, including, the Faculty of Humanities & Social Sciences, Faculty of Applied Sciences, Faculty of Management Studies and Commerce, Faculty of Medical Sciences, and Faculty of Graduate Studies. Since then, two more faculties, the Faculty of Technology and Faculty of Engineering, were established. The first intake of students, which was about 500, was admitted to these new faculties in November 2016. Twenty-five Ph.D. holders serve the two faculties in the eight departments (Faculty of Technology – three departments and Faculty of Engineering – five departments).

While Dean of the Faculty of Management Studies and Commerce (FMSC) from 2009 to 2014, I strategically spearheaded the FMSC towards great developments in academic quality as well as in several important infrastructure projects that included the establishment of new building complexes for the FMSC and Ph.D. unit. Being a leader with a vision, I maintained a strong relationship with the students as well as faculty members and helped the FMSC achieve much success.

From 2012 to 2014, I rendered my service as a member of the University Grants Commission (UGC) of Sri Lanka and several other commissions and take pride in being the youngest professor ever appointed to the UGC. I was the Chairman of the Federation of University Teachers Associations (FUTA) of Sri Lanka from 2009 to 2012 and

it was my leadership and the strength of the team that led for the establishment of several sister unions of the FUTA and the introduction of the research allowance for academics and grade one school entrance concept for their children. FUTA is the strongest union of university academics which ensures the well-being of the university teaching field.

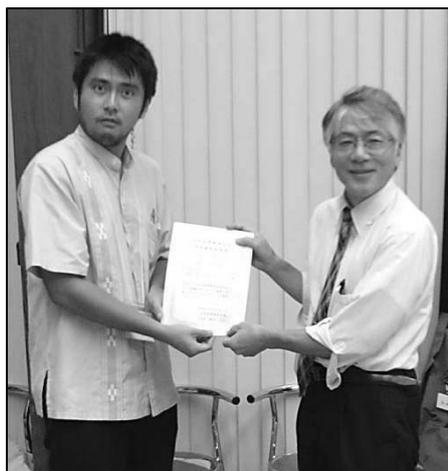
Being an avid sportsman, I have engaged in sports both at Ananda College Colombo, my alma mater, as well as at the university. I was the captain of the University of Sri Jayewardenepura cricket team and won accolades and best player awards for several years. I was also the President of Sri Lanka University Sports Association (SLUSA) from 2009 to 2010. During the time of my leadership as the Vice-Chancellor, the university sports team won the championship at the Sri Lanka University Games for the first time in the university's history. Also, one of the university athletes went on to participate at the 2016 Summer Olympics – the first time an undergraduate participates from Sri Lanka.

Ensuring the promotion of research culture within the university, I have taken a keen interest in forming the University Research Council. Annually, Rs. 500 million has been allocated as research grants. Research is mainly conducted to address national and international issues and to contribute to national development.

I command respect not only from academia but also from the corporate world as I currently serve as an independent director on various boards of directors of certain prominent companies in Sri Lanka. Thus, I am a renowned personality, whose service extends far beyond the university community.

My message to students is to make the most of their time at university. Academics and studying are the priorities, but beyond the books there is much to learn and discover. So, get involved in extra-curricular activities such as volunteering, sports and music, because your involvement and contribution to these groups and programs will allow you to build important, live-long relationships.

## ◇学会賞等受賞



所属：琉球大学農学部作物学研究室

職名：博士2年

氏名：竇川拓生

学 会 賞 名：日本熱帯農業学会学生優秀口頭発表賞

学会賞受賞研究題目：耐乾性の異なるサトウキビ2品種の混植が  
地下部形成に与える影響

受 賞 年 月 日：2016年10月8日

### [受賞内容]

昨年10月に鹿児島大学農学部で開催された日本熱帯農業学会第120回講演会にて上記演題にて口頭発表を行い、若手研究者を対象とした上記の賞（エントリー17課題）を受賞したのでここに報告する。

私は現在、本学博士過程においてサトウキビを対象作物として品種の有効活用に関する研究を行っている。特に、サトウキビの新しい栽培方法として異品種の混植について研究を進めており、本発表は地下部に関する混植の影響を報告したものである。耐乾性すなわち伸根性の異なる品種を自作した根箱および1m長の塩ビポットで混植したところ、地上部および地下部重に着いては変化が見られなかったものの、地下部の垂直分布および水平分布に関し変化が見られた、という内容である。受賞理由については思い出せないが、内容の新規性および質疑応答がスムーズであったことが要因ではないかと感じている。内容の論理性や充実具合については反省の余地が大いにあると感じた。現在、本研究結果を基にした論文投稿を控えており、後続実験も遂行中である。

受賞後だけでなく受賞前からも本発表後に多くの先生方からコメントを頂き大変光栄に感じた。これらは以降の研究の励みになっただけでなく、学会参加に対する姿勢を改めるきっかけになったように思う。他の学会に参加してもどのような発表および発表者が発表賞を受賞しているか注意深く見るようになった。研究内容だけでなく、その人から発せられる妙な説得力はどこから来るのか。最近、この答えは、日々の努力から来るもので、一朝一夕にはいかないと気が付き始めた。毎日がエブリデイである。

最後に、沖縄は海に囲まれ他県の学者との学術的な交流、学会参加は手軽ではない。このような研究成果の発信の場を快くかつ多く与えてくださる、川満教授に感謝申し上げます。また、本学の研究助成についても記してここに感謝申し上げます。





所属：鹿児島大学農学部農林環境科学科

職名：准教授

氏名：寺本行芳

学 会 賞 名：平成 28 年度日本雨水資源化システム学会賞（奨励賞）

学会賞受賞研究題目：荒廃地における植生遷移と水文・侵食環境の変化に関する研究

受 賞 年 月 日：平成 28 年 10 月 29 日

#### [受賞内容]

火山荒廃地、海岸砂丘地、斜面崩壊跡地および再造林放棄地（森林伐採後、植林が実施されない林地）などの荒廃地における植生遷移と、それに伴う水文・侵食環境の変化を明らかにすることは、荒廃地における植生回復の予測だけでなく、土砂生産の抑制や森林生態系の保全の面からも重要である。さらに、荒廃した林地における作業道の設置に伴う水文・侵食環境の変化を明らかにすることは、林地における侵食・崩壊の防止・軽減と、安全な林業生産作業の実施のために重要である。以上の視点を持って、今回受賞対象となった一連の研究を行った。

受賞対象論文の概要について以下に説明する。

火山活動により荒廃した火山荒廃地、海岸砂丘地および表層崩壊跡地においては、植生の生育環境が非常に厳しいため、植生は衰退しており、植生遷移の進行は非常に遅いこと、植生の衰退に伴う植生遷移の後退は、土壌の発達速度を低下させることを通じて、地表面の水吸収能力を示す土壌浸透能を低下させることなどを現地調査に基づいて明らかにした。以上の知見は、現在も活発な火山活動を継続する鹿児島県の桜島における火山防災計画の策定や、日本三大砂丘のひとつである鹿児島県の吹上砂丘地における海岸防災林の造成の際の基礎データとして重要である。

また、再造林放棄地においては、低コストで粗放な構造を持つ作業道の設置が、林地における水文・侵食環境を大きく変化させ、土壌浸透能の低下による侵食・崩壊とそれに伴う多量の土砂生産を招くことなどを現地調査に基づいて明らかにした。近年、林業の採算性悪化や後継者不足などの理由から、再造林放棄地が急速に増加し、そこでは多量の土砂生産が行われている。これらの土砂は土砂災害の引き金となるため、深刻な社会問題となっている。しかしながら、再造林放棄地における侵食・崩壊とそれに伴う土砂生産については、これまでその実態がほとんど明らかにされていない。今回得られたデータは、再造林放棄地における土砂災害防止や森林生態系保全のための基礎データとして寄与できると考えられる。

所属：鹿児島大学大学院連合農学研究科

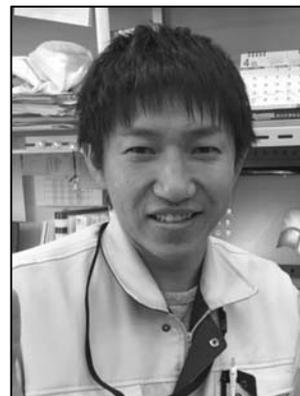
職名：博士後期課程1年

氏名：瀬戸口 翔

学会賞名：第16回糸状菌分子生物学コンファレンス企業特別賞

学会賞受賞研究題目：黒麹菌 *A. luchuensis* の酸性プロテアーゼ遺伝子破壊株  
および高発現株の機能解析

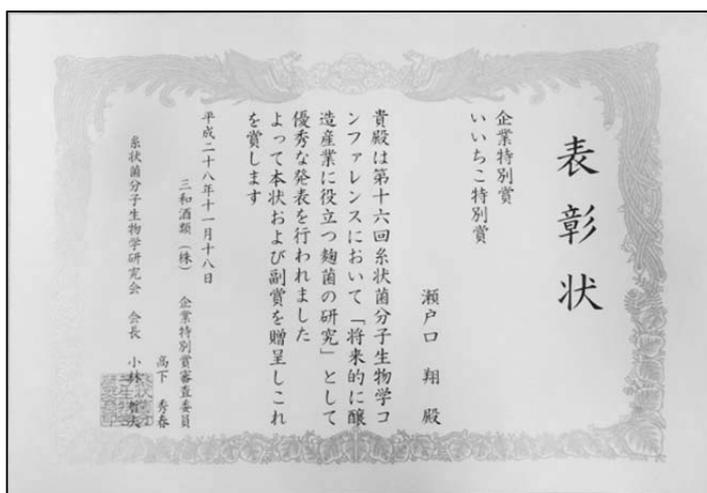
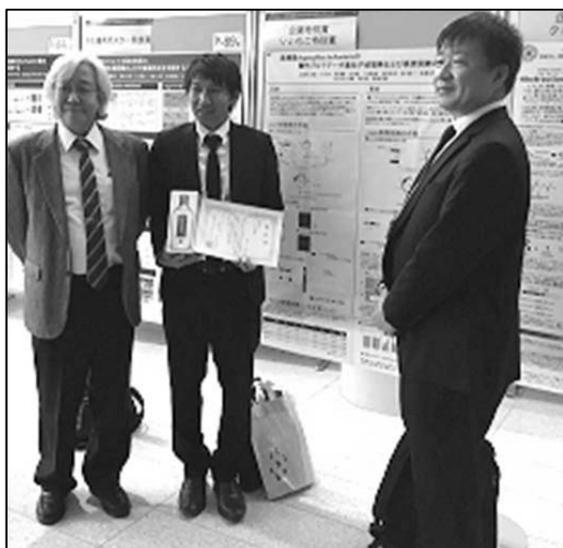
受賞年月日：平成28年11月18日

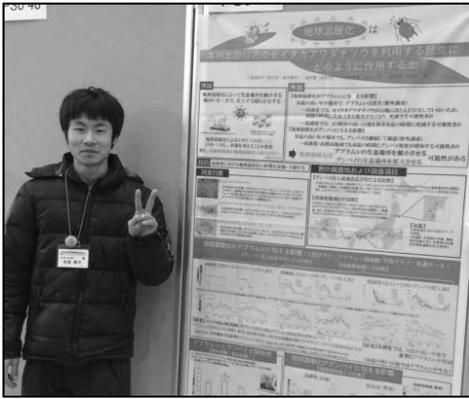


#### [受賞内容]

黒麹菌 *A. luchuensis* が生産する酸性プロテアーゼは焼酎もろみの酸性条件下でも作用することから焼酎香味への影響も大きいと考えられる。本研究では酸性プロテアーゼが焼酎麹菌の育種指標として有望かを調べるために *A. luchuensis* が持つ酸性プロテアーゼ遺伝子の破壊株および高発現株を作製し、その機能解析を行った。

黄麹菌で報告されているアスパラギン酸プロテアーゼ遺伝子 *pepA* と相同性の高い遺伝子が黒麹菌 *A. luchuensis* RIB2604 のゲノム上からも見出されたことから、本研究では *pepA* をターゲットとした。はじめに、*A. luchuensis* RIB2604 および *A. luchuensis* RIB2604  $\Delta$  *ligD* を親株としてアグロバクテリウム法により *pepA* 破壊株および高発現株を作製した。*pepA* 高発現には *glaA142* プロモーターおよび *agdA* ターミネーターを用いた。次に、得られた破壊株および高発現株を用いてカゼインプレートを用いたハロー形成能試験とフラスコ製麹試験を行った。その結果、カゼインプレートではハロー形成能と増殖速度に株間の差が確認され、活性が高い株ほどハロー形成能と増殖能が高くなる傾向であった。フラスコ製麹試験で得られた米麹の酸性プロテアーゼ活性を測定した結果、*pepA* 破壊株は親株の50%程度まで活性が低下し、*pepA* 高発現株は親株の24倍という非常に高い活性を示した。これらの結果より、*pepA* は黒麹菌においても酸性プロテアーゼ生産に大きく関連していることが示唆された。





所属：佐賀大学  
職名：博士課程3年  
氏名：安達 修平

学会賞名：日本応用動物昆虫学会ポスター賞  
学会受賞研究題目：地球温暖化は本州北限付近のセイタカアワダチソウを利用する昆虫にどのように作用するか？

受賞年月日：平成29年3月29日

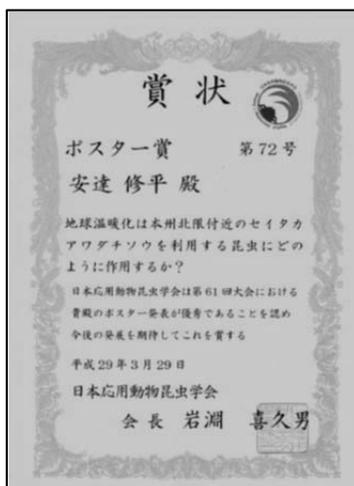
### [受賞内容]

地球温暖化の影響は、高緯度や高標高地域でより大きいと言われており、そのような地域における影響調査は特に重要である。また、地球温暖化が生物に与える影響はプラス方向に働くこともあれば、マイナスの方向に働くこともあるため、生物種ごとにその影響を評価する必要がある。

セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ（以下、アブラムシ）とアワダチソウグンバイ（以下、グンバイ）は、ともに北米原産の外来種で、それぞれ1980年代後半と2000年に日本へ侵入し、急速に分布を拡大した。両種はセイタカアワダチソウを寄主とし、東北地方から九州南部まで同所的に生息している。宮城県では、アブラムシは以前から分布していたが、グンバイは2012年に初めて確認された。

私は、本州における両種の分布北限付近である宮城県において、地球温暖化が両種にどのように作用するかを明らかにするため、2003～2004年と2015年～2016年にアブラムシとグンバイの発消長を調査し、また、より低緯度に位置する佐賀県で2013～2014年にアブラムシの、愛媛県で2012年にグンバイの発消長調査を同様に実施した。その結果、宮城県（高緯度地域）と佐賀県（低緯度地域）では、アブラムシは夏季に高温となる年や地点においてセイタカアワダチソウ上から一度消失し、その期間は気温の低い山地などでのみ継続して確認された。一方、宮城県（高緯度地域）と愛媛県（低緯度地域）では、グンバイは高温の年や地点でもセイタカアワダチソウ上で継続して見られ、むしろ夏季に高密度になることが判明した。以上の結果から、地球温暖化はアブラムシにとってはマイナス方向へ、グンバイにとってはプラスの方向に働くことが示唆され、セイタカアワダチソウという同じ寄主植物を利用する2種の昆虫間であっても、その影響は大きくことなると考えられた。

なお、本研究は共同研究者である城所隆氏、千葉美智雄氏、指導教員である徳田誠准教授のご協力があった成果である。受賞に関しては、上記の方々に心より御礼を申し上げる次第である。



所属：鹿児島大学

職名：特別研究員（DC2）

氏名：畑 晴陵

学会賞名：平成28年度笹川科学研究奨励賞

学会賞受賞研究題目：カタクチイワシ科タイワンアイノコイワシ属魚類の  
分類学的研究

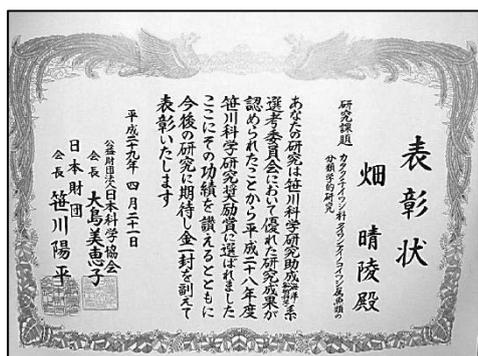
受賞年月日：2017年4月21日

[受賞内容]



笹川研究助成は公益財団法人日本科学協会による研究支援であり、課題設定の独自性、新規性や萌芽性などをもつ若手研究者の研究支援をおこなっています。笹川科学研究奨励賞は笹川研究助成を受けた研究者に対する研究奨励のために、平成19年度に設立されました。本賞は、助成を受けた研究者のうち、研究の内容や成果に加え、研究に取り組む真摯な姿勢や、研究遂行のための努力といった、研究者としての資質という面も含めた面において優れたものに対して授賞されるものです。平成28年度の研究助成対象者324名のうち、今年度は16名が受賞しました。

本研究の対象分類群であるタイワンアイノコイワシ属魚類 *Encrasicholina* は食用や大型魚の餌生物などとして水産業上非常に重要である一方で、その分類学的研究は25年以上にわたって、殆どなされていない現状がありました。その一方で、近年、本属の1種、シロガネアイノコイワシの日本における分布が初めて確認されたほか、インド洋北部産の未記載種が記載されるなど、分類学的発見が相次いだことから、本研究では笹川科学研究助成を受けて、本属魚類の分類学的研究をおこないました。世界中の研究機関を回り、また、東南アジア等における採集を通じて多数の本属魚類の標本を精査しました。その結果、本属魚類各名義種の分類学的位置づけが整理され、東南アジアなどにおいて重要な食用魚であるミズスルルとシロガネアイノコイワシ2種に適用すべき学名の変更がなされ、それぞれ *E. pseudoheteroloba* と *E. heteroloba* であることが明らかとなりました。また各名義種の分類学的位置づけの整理のほか、本研究を通じ、多数の未記載種の存在が確認されました。*Encrasicholina intermedia* と *E. gloria* はそれぞれアフリカ東岸およびインド沿岸とインド洋北部および地中海から得られた個体に基づき記載されました。2種はいずれもタイワンアイノコイワシに酷似しますが、鰓耙数などにより識別されます。タイワンアイノコイワシは従来、インド・太平洋に広く分布すると考えられてきましたが、インド洋における分布はこれら2新種を誤同定したものと思われ、タイワンアイノコイワシの分布域は太平洋に限られることも明らかとなりました。また、地中海から得られた *E. gloria* は紅海からスエズ運河を通じて侵入したものと思われ、こうした移入はカタクチイワシ科魚類において初めて確認されました。さらに、フィジーから得られた個体に基づき、*E. auster* の記載をおこないました。こちらはシロガネアイノコイワシに類似するが、体の鱗列数が多いことによって識別されます。その他、更なる未記載種の存在が確認され、魚類学会年会において発表をおこないました。また、既知種に関しても



それぞれの詳細な分布域や形態的特徴が明らかとなり、従来6有効種が知られていた本属魚類は本研究を通じ、未記載種1種を含む10種の存在が確認されました。こうした研究成果を含め、助成期間中に33論文の研究成果を出版すると同時に、遺伝子分類が優勢な分類学の中で、標本の形態観察をひたすら重ね、種の分類を追求するという、地道ではあるが古典的かつ重要な研究を重ねる姿勢が評価され、受賞となりました。

## ◇連大行事と活動

### 平成 28 年度 連合農学研究科学位記授与式（前期）

9月16日、平成28年度鹿児島大学大学院連合農学研究科の前期学位記授与式が挙行され、6名の修了生と本学の連合農学研究科教員および関係教員、構成大学の石丸幹二佐賀大学農学部副学部長、井上章二琉球大学大学院農学研究科長が出席し、列席のご家族、指導教員とともに新しい博士の誕生を喜びました。

学位記の授与に続く、糸井和朗連合農学研究科長からの告辞では、今後の人類の知の蓄積への貢献、ご家族やサポートされた方々への敬意が述べられました。岩井久農学研究科長からは、研究者として失敗の中から serendipity（セレンディピティ：探索していたものとは別の価値あるものを偶然に見出す才能）を発揮してもらいたいとの祝辞がありました。修了生を代表して本学配属の久永絢美さんから「謙虚な姿勢で、学の発展とよりよい社会づくりに貢献できるよう努める所存です」と謝辞がありました。

#### 【平成 28 年度（前期）学位取得者 8 名】

＜課程博士 7 名＞

- ・日本人 3 名
- ・外国人留学生 4 名（エジプト 1 名、タイ 2 名、バングラデシュ 1 名）

＜論文博士 1 名＞

日本人 1 名



久永さんによる謝辞

全員による記念撮影



## 平成 28 年度 連合農学研究科学位記授与式（後期）

3月13日、平成28年度大学院連合農学研究科後期学位記授与式が挙行され、課程博士26名（うち外国人留学生11名）と論文博士2名（うち外国人留学生1名）の計28名に前田芳實学長から学位記が授与されました。

前田学長から、「農林水産学は、人類の食料確保の基盤となる学問であるとともに、地域社会の課題解決に大きく貢献しています。特に、食と健康、環境、島嶼、水、エネルギー、防災に係わる課題には、グローバルな視点とローカルな視点での対応が必要となります。まさに皆さまは、人類が抱える問題に真正面から取り組むことのできるリーダーであり、明日の社会の牽引者でもあります。ここで学んだことを活かして科学の進歩にはもちろんのこと、地域及び国際社会の豊かな発展に大いに貢献していただきたいと願っています。」と告辞がありました。

続いて、構成大学である佐賀大学の宮崎耕治学長の代理として渡邊啓一農学研究科長、琉球大学の大城肇学長からそれぞれ祝辞がありました。その後、修了生を代表して琉球大学配属の渡邊健太さんから「栄誉ある称号をいただいたことは、家族や指導教員をはじめ、多くの方々の支えがあったからにはほかありません。連合農学研究科に入学して3年間、大好きな研究を存分に行うことが出来た一方で、思い通りにならなかったこと、やり残したことも多くありました。今後もこのような向上心を忘れず、ここで学んだことを十分に活かし、社会の発展に積極的に貢献していけるよう努める所存です」と謝辞がありました。

式には指導教員や学位取得者のご家族も出席し、新しい博士の誕生を喜びました。

### 【平成28年度の博士学位取得者 28名】

<課程博士26名>

- ・日本人15名
- ・外国人留学生11名（フィリピン1名、エジプト1名、ベトナム1名、ミャンマー1名、中国2名、ジンバブエ1名、タイ2名、バングラデシュ1名、インドネシア1名）

<論文博士2名>

- ・ブータン1名
- ・日本人1名

学位記を手渡す前田学長



修了生を代表して謝辞を述べる渡邊さん

全員で記念撮影



## 平成 29 年度 連合農学研究科入学式

鹿児島大学大学院連合農学研究科では、4月14日、平成29年度入学式を挙行し、社会人7名、5カ国からの外国人留学生13名を含む31名が入学しました。

前田芳實学長から31名の入学許可が行われた後、入学生を代表して佐賀大学配属の農水圏資源環境科学専攻 小野雅弥さんが「高度な研究能力を培い、学識の習得に専念することを誓います」と宣誓しました。

前田学長からは、「専門性を深め、高度な技術や解析能力を高め、人類社会の持続的発展と、この素晴らしい地球のために皆さんの惜しめない努力と情熱が注がれることを心から祈念します。」と告辞がありました。引き続き、構成大学の有馬進佐賀大学大学院農学研究科長、大城肇琉球大学長からそれぞれ祝辞が述べられました。

### 【留学生の国内訳：13名】

バングラデシュ5名、ベトナム3名、インドネシア3名、スリランカ1名、アメリカ1名



前田学長の告辞



宣誓を行う小野さん



地元テレビ局からインタビューを受ける Pham Quoc Hung さんと、通訳くださった寺田先生。Pham Quoc Hung さんは、連大でどのような研究に取り組みたいか、鹿児島島の印象などを話されていました。（このインタビュー内容は当日夕方の鹿児島県内のニュースとして放送されました。）

## 平成29年度入学式告辞（平成29年4月14日）

鮮やかな楠の若葉が春の光に輝き、まさに春爛漫の今日、御来賓及び関係者の方々にご出席を賜り、平成29年度の入学式を挙げていただけますことは、鹿児島大学大学院連合農学研究科にとりまして、大きな喜びであります。

本日、新たに本研究科にお迎えすることとなりました、31名の新入生の皆様を心から歓迎いたしますとともに、お祝いを申し上げます。

新入生31名の内訳は、生物生産科学専攻13名、応用生命科学専攻8名、農水圏資源環境科学専攻10名となっており、佐賀大学配属の学生が8名、琉球大学が9名、鹿児島大学が14名であります。入学生の中には社会人の方が7名おられ、仕事と研究を両立させながら研究と論文作成に励むこととなります。

また、新入生の中には5カ国から13名の熱い志を持った外国人留学生が入学されました。留学生の皆さんが本研究科で勉学・研究に研鑽を積まれるとともに、日本の生活・風土に触れ、日本文化への理解も深められますことを期待致します。遠く祖国を離れ、言葉や生活習慣など、いろいろ慣れないこともあろうかと思いますが、指導教員をはじめ多くの人々との交流がなされ、学ぶ事、研究する事の楽しさを味わい、目的を成し遂げられることを祈っております。

本研究科は、設置されて30年目を迎え、佐賀大学、琉球大学、鹿児島大学が参画する農林水産学系博士課程の大学院で、西日本及び広くアジア・アフリカを視野に入れた、熱帯・亜熱帯の特徴ある農業、林業、水産業と密接に関係した教育・研究が高く評価されています。

本研究科では、先端的生命科学を駆使した食料生産、生物資源の有効利用、農林水産学を取り巻く環境保全、食の安全・安心を基軸にした品種改良などの技術革新、国際化、地域貢献を目指して、それぞれの分野のリーダーとなる人材の養成を行っています。皆さんの研究テーマも、最先端の生命科学の研究から、農林水産業の基礎となる研究、地域に密着した研究、生物資源の開発と有効利用に関する研究、持続可能な農業や資源再生などの環境保全に関する研究など、多岐にわたっています。この中から、世界に輝く研究が生まれてくると信じております。

近年の科学技術の飛躍的發展はグローバル化の進行と共に、我々の日常生活に大きな影響をもたらし、社会を大きく変貌させる事となりました。

このような中で、温室効果に由来する地球環境の変化や自然災害、地球人口の急増と食料資源の生産、新たなエネルギー社会の構築や資源節約の克服のための革新的技術開発、貧困・較差・差別・紛争・感染症の脅威や新たな冷戦の懸念などが挙げられ、また、国内的課題として、急速な少子高齢化の進行と労働人口の減少や地域コミュニティの衰退、さらに、東日本大震災からの復興と再生の取り組みなど、様々な課題が立ちはだかっています。私達はこれらの課題に対して、知恵を出し合い、希望ある未来と安定的かつ持続的な社会の実現に向けて貢献しなければなりません。

鹿児島大学大学院連合農学研究科は、その責務として、社会の変革と発展にリーダーシップを発揮する人材、グローバル社会で活躍する人材、また、イノベーションの創出に貢献する人材の養成を行います。

本日、入学を果たされた皆さんは、本研究科での学びや出会いを通して、専門性を深め、高度な技術や解析能力を高めると共に、社会との関わりの中での研究を深め、多様な物の考え方、グローバルな視野と行動力、課題発見力、発信力、コミュニケーション力など、高度研究者としての基礎力をしっかりと身につけなければなりません。

これまでに本研究科より社会に送り出した895名の修了生は、日本だけでなく、世界各国で高い評

価を受けて、農林水産学分野のみならず、さまざまな専門分野で活躍しています。皆さんも、研究面だけでなく、人間的にも成長し、高い倫理観を備えた研究者に成長していただきたいと思います。高い志をもって、日々の研鑽に励んでください。3年後には、日本そして世界の新しいリーダーとして、ここを巣立っていかれることを心より期待します。人類社会の持続的発展とこの素晴らしい地球のために、皆さんの惜しみない努力と情熱が注がれることを、心から祈念して告辞いたします。

平成29年4月14日

鹿児島大学長 前田 芳實

## 平成 28 年度 連合農学研究科秋季入学式

鹿児島大学大学院連合農学研究科では、平成 28 年 10 月 3 日に 10 月入学コース入学式を挙行し、社会人 2 名、5 カ国からの外国人留学生 6 名を含む 9 名が入学しました。

入学許可後、入学生を代表して鹿児島大学配属の鹿子木聡さんが「21 世紀を担う国際的な研究者を目指して、高度な研究能力を培い、学識の修得に専念することを誓います」と宣誓しました。

梶井和朗連合農学研究科長から「高い志をもって、日々の研鑽に励み、研究面だけでなく、人間的にも成長し、高い倫理観を備えた研究者に成長していただきたいと思います。3 年後には、日本そして世界の新しいリーダーとして、ここ「連大」を巣立っていかれることを心より期待します」と告辞がありました。引き続き、構成大学の井上章二琉球大学農学研究科長から「一人一人の努力で、いばらの道を乗り越えて 3 年後に学位取得されますことを祈念いたします」と祝辞が贈られました。

### 【留学生出身国別入学生数】

バングラデシュ 1 名

ベトナム 1 名

スリランカ 2 名

パプアニューギニア 1 名

ベナン 1 名



梶井研究科長告辞



井上研究科長祝辞

## 平成 28 年度 全国連合農学研究科協議会

大学院連合農学研究科における教育及び運営等に関する諸問題を協議し、連合農学研究科の充実と発展を図ることを目的として、全国連合農学研究科協議会（以下「協議会」という。）が置かれている。

協議会は、構成大学全体会議と研究科長会議を包含し、構成大学全体会議は年 1 回、研究科長会議は年 2 回開催することとされ、さらに、研究科長会議は特に必要な場合は臨時に開催することができることとされている。

開催時期は、基本的に 6 月に構成大学全体会議と研究科長会議を東京農工大学大学院連合農学研究科が幹事となり開催し、研究科長会議は 10 月又は 11 月に東京農工大学以外の 5 連大の持ち回りにより開催している。

なお、平成 28 年度の秋の同研究科長会議は、岐阜大学の当番で実施されたところである。協議事項としては、「6 連大協定に基づく教育連携について」、岐阜大学から提案があり活発な意見交換があった。

### 全国連合農学研究科協議会規約

(昭和60年 5月28日制定)

#### (目的)

第 1 条 大学院連合農学研究科における教育及び運営等に関する諸問題を協議し、連合農学研究科の充実と発展を図ることを目的として、全国連合農学研究科協議会（以下「協議会」という。）を置く。

#### (組織)

第 2 条 協議会は、次の二種の会議を包含し、それぞれの会議は次の職にある者をもって組織する。

- 一 構成大学全体会議：各連合農学研究科の研究科長・専任教官及び各構成大学の農水産学部長（単科大学長を含む。）
- 二 研究科長会議：各連合農学研究科の研究科長及び専任教官

#### (委員以外の者の出席)

第 3 条 協議会が必要と認めたときは、議題により関係者の出席を求めることができる。

#### (会議の開催)

第 4 条 協議会の開催は、次のとおりとする。

- 一 構成大学全体会議は、国立大学農学系学部長会議の開催に合わせて、年 1 回開催する。
- 二 研究科長会議は、年 2 回開催する。ただし、特に必要がある場合は、臨時に開催することができる。

#### (庶務)

第 5 条 協議会の庶務は、東京農工大学大学院連合農学研究科が各構成大学の協力を得て処理する。

#### (雑則)

第 6 条 この規約に定めるもののほか、協議会の運営に関して必要な事項は、協議会が定める。

#### 附 則

この要項は、昭和 60 年 5 月 29 日から実施する。

附 則 (昭和 63 年 7 月 1 日)

この要項は、昭和 63 年 7 月 1 日から施行する。

附 則 (平成 3 年 6 月 7 日)

この要項は、平成 3 年 6 月 7 日から施行する。

附 則 (平成 6 年 6 月 8 日)

この規約は、平成 6 年 6 月 9 日から施行する。（連合農学研究科間連絡会議要項の改正。）

附 則 (平成 8 年 6 月 7 日)

この規約は、平成 8 年 6 月 8 日から施行する。

附 則 (平成 11 年 6 月 4 日)

この規約は、平成 11 年 6 月 5 日から施行する。

最近の秋の当番大学、開催日、実施場所は次のとおり

平成15年度	鹿児島大学	10.30(木)～31(金)	鹿児島東急イン
平成16年度	鳥取大学	10.28(木)～29(金)	ウェルシティ鳥取
平成17年度	岩手大学	10.27(木)～28(金)	ホテル安比グランド「花輪」
平成18年度	岐阜大学	11.16(木)～17(金)	ひだホテルプラザ
平成19年度	愛媛大学	11.1(木)～2(金)	メルパルク松山
平成20年度	鹿児島大学	10.30(木)～31(金)	ホテルレクストン鹿児島
平成21年度	鳥取大学	11.5(木)～6(金)	ホテルモナーク鳥取
平成22年度	岩手大学	11.4(木)～5(金)	いろり火の里「なの花ホール」(山形県)
平成23年度	岐阜大学	10.20(木)～21(金)	岐阜大学、ホテルグランヴェール岐山
平成24年度	愛媛大学	10.25(木)～26(金)	メルパルク松山
平成25年度	鹿児島大学	10.24(木)～25(金)	ウェルビュー鹿児島
平成26年度	鳥取大学	10.30(木)～31(金)	ホテルモナーク鳥取
平成27年度	岩手大学	10.22(木)～23(金)	ホテルメトロポリタン盛岡
平成28年度	岐阜大学	10.27(木)～28(金)	クーポール会館(静岡県)
平成29年度	愛媛大学	10.19(木)～20(金)	愛媛大学

## 連合一般ゼミナール「農学共通講義」

「農学共通講義」は、全国6つの連合農学研究科が合同で行う、集中講義形式授業であり、年2回（前期：日本語、後期：英語）開講される。SINET5による「多地点制御遠隔講義システム」を活用し、6連合農学研究科（18構成大学）が連携して、高い専門性、幅広い分野の講師を年度ごとに選定して開講している。

本特別講義は、前期連合一般ゼミナール、後期連合一般ゼミナールとして平成21年度から、全国6連合農学研究科連携のもと、選択科目として開講されたもので、全3日間で90分授業を12コマ用意している。

開催にあたっては、6連合農学研究科の持ち回り担当にて、後期（英語）及び前期（日本語）を1サイクルとしている。鹿児島大学は、平成28年度後期（英語）及び平成29年度前期（日本語）の担当となっている。

当該ゼミナールの講義名、修得コマ数及び付与単位に関しては、各連合農学研究科に委ねられており、本研究科においては、前期（日本語）に関しては、「農学共通講義Ⅰ（日本語）」として開講し、後期（英語）に関しては、「農学共通講義Ⅱ（英語）」として開講している。また、単位に関しては4コマ修得で0.5単位、8コマ以上で1単位としている。

平成28年度前期（日本語）は愛媛大学担当にて、平成28年6月15日（水）～17日（金）まで実施され、鹿児島連大から亀山 統一 琉球大学農学部助教授と、木村 郁夫 鹿児島大学水産学部教授が講師を務めた。また、平成28年度後期（英語）は鹿児島大学担当にて、平成28年11月16日（水）～18日（金）まで実施され、鹿児島連大からは講師として、神田 英司 鹿児島大学農学部准教授と辻田 忠志 佐賀大学農学部講師が参画した。

前期日本語の講義はすべて日本語で、後期英語の講義はすべて英語で行われるもので、専門的知識を修得するとともに、他連大の学生と講義を共有することにより幅広い視野を持てるものと期待している。

本特別講義は、SINET5を利用して18構成大学が同時受講する。



左：スクリーンには、最高 16 大学の講義室が映し出される

右：実際の講義時には、講師を中心として周りに最高 7 大学が映像センターのサポートにより交互に映し出されるようになっている。





鹿児島大学大学院連合農学研究科棟3階会議室での受講の様子。  
左側スクリーンには講師を中心に、構成大学の講義室が映し出される。  
右側スクリーンには合議資料が映し出される。

全国18構成大学は、次のとおりである。

- (1) 岩手大学大学院連合農学研究科（岩手大学、弘前大学、山形大学、帯広畜産大学）
- (2) 東京農工大学大学院連合農学研究科（東京農工大学、茨城大学、宇都宮大学）
- (3) 岐阜大学大学院連合農学研究科（岐阜大学、静岡大学）
- (4) 鳥取大学大学院連合農学研究科（鳥取大学、島根大学、山口大学）
- (5) 愛媛大学大学院連合農学研究科（愛媛大学、香川大学、高知大学）
- (6) 鹿児島大学大学院連合農学研究科（鹿児島大学、佐賀大学、琉球大学）

## 中間発表会

本研究科概要には、本研究科のアドミッション・ポリシーを掲載するとともに、各専攻・連合講座毎に、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等についての方針が記述されている。これらについては本研究科のホームページにも掲載し、広く学内外に周知している。学生の指導は、学生1名に対し、主指導教員1名と副指導教員2名の計3名の指導教員があたっているが、1年次の学生については「中間報告会」、2年次の学生については研究成果の「中間発表会」を行い、その達成状況を検証している。特に、2年次学生による中間発表会には、多地点遠隔講義システム（SINET3）により、各構成大学に配信され、学部生、修士学生及び教職員だれでも聴講することができるため、特に学生においては、他の学生の研究進捗状況を知る手段となり、自己研鑽の最適の要素となるものである。

中間報告会後の研究指導報告書には、1) 研究経過及び指導内容、2) 研究の進捗状況（学会誌への投稿状況及び3年以内に学位論文が提出できる可能性）、3) アドミッション・ポリシーについて（アドミッション・ポリシーに当該学生が沿っているか）の項目を設け、「中間発表会」終了報告書には、1)

研究の進捗状況（学会誌への投稿状況及び3年以内に学位論文が提出できる可能性）、2)今後の指導方針の項目を追加し、研究教育指導達成状況をより具体的に把握できるようになっている。

平成28年度の中間発表会

平成26年10月入学者  
平成27年10月入学社会人早期修了希望者 } 平成28年9月に実施

平成27年4月入学者・・・平成28年12月に実施



学生による中間発表会風景

連合農学研究科中間発表会時間割					
平成26年10月入学者 平成27年10月入学社会人早期修了希望者					
	平成28年9月12日(月)		平成28年9月27日(火)		平成28年9月28日(水)
11:00-11:40	<b>マヤ スルタ</b> 主 白武 義治(佐) ① 辻 一成(佐) ② 豊 智行(鹿農)	13:30-14:10	溝部 大和 主 三好 和睦(鹿農) ① 大久津 昌治(鹿農) ② 建本 秀樹(琉)	11:00-11:40	保 聖子 主 木村 郁夫(鹿水) ① 上西 由翁(鹿水) ② 安部 淳一(鹿農)
・発表20分・質疑応答20分とし、SINETで各構成大学に配信する ・発表場所(SINET設置教室) 佐賀大学:農学部1号館南棟1階学生演習室 鹿児島大学(農):連合農学研究科棟3階会議室 鹿児島大学(水):附属図書館水産学部分館セミナールーム 琉球大学:農学部2階会議室 ・学部学生・修士学生も聴講可とする ・知的財産管理の観点から、発表者以外の参加学生は「研究発表会情報管理確認書(別紙様式)」に所属氏名を記載する。参加教職員は、守秘義務が課せられているため、記載不要 ・終了後、主指導教員は「中間発表会」報告書及び「特別演習(必修2単位)」の成績報告表を提出する					

連合農学研究科中間発表会時間割(平成27年4月入学者)				
				指導教員は、H28.9.1現在
	平成28年12月5日(月)	平成28年12月8日(木)	平成28年12月14日(水)	平成28年12月15日(木)
9:00-9:40		上野 綾子 主 山本 智子(鹿水) ① 鈴木 廣志(鹿水) ② 大富 潤(鹿水)	レヌマ ホック 主 稲岡 司(佐) ① 上野 大介(佐) ② 豊 智行(鹿農)	コンスタンティン サカラ プスンク アタス クウイラサ 主 坂上 潤一(鹿農) ① 一谷 勝之(鹿農) ② 穴井 豊昭(佐)
9:50-10:30		小久保 洋平 主 越塩 俊介(鹿水) ① 山本 淳(鹿水) ② 石川 学(鹿水) 補 横山 佐一郎(鹿水)	ジョンビョル 主 本村 浩之(鹿農) ① 寺田 竜太(鹿水) ② 立田 晴記(琉)	
10:40-11:20		河野 真知 主 宇野 誠一(鹿水) ① 小山 次朗(鹿水) ② 吉川 毅(鹿水) 補 國師 恵美子(鹿水)		
11:30-12:10			齋藤 晴紀 主 酒井 一人(琉) ① 中村 真也(琉) ② 梶井 和朗(鹿農)	
13:00-13:40			木下 哲 主 辻 瑞樹(琉) ① 立田 晴記(琉) ② 徳田 誠(佐)	
13:50-14:30				
14:40-15:20	アハンゴンダ アラッチケ マトウカ スホテイニ 主 外山 博英(琉) ① 平良 東紀(琉) ② 玉置 尚徳(鹿農)			
15:30-16:10				知念 良之 主 芝 正己(琉) ① 内藤 重之(琉) ② 西野 吉彦(鹿農)
	平成28年12月16日(金)	平成28年12月19日(月)	平成28年12月21日(水)	平成28年12月22日(木)
9:00-9:40	王 偉隆 主 石川 学(鹿水) ① 越塩 俊介(鹿水) ② 小谷 知也(鹿水)			
9:50-10:30	上村 将彰 主 近藤 文義(佐) ① 宮本 英揮(佐) ② 伊藤 祐二(鹿農) 補 徳本 家康(佐)		金城 由希子 主 和田 浩二(琉) ① 玉城 一(琉) ② 侯 徳興(鹿農)	
10:40-11:20			マニクハルダ 主 和田 浩二(琉) ① 高良 健作(琉) ② 橋本 文雄(鹿農)	新垣 大地 主 及川 卓郎(琉) ① 建本 秀樹(琉) ② 下桐 猛(鹿農)
11:30-12:10				
13:00-13:40	シェイク モハト マスム 主 モハト アムサト ホサイン (琉) ① 赤嶺 光(琉) ② 坂上 潤一(鹿農)	張 曉霄 主 大塚 彰(鹿農) ① 岡本 新(鹿農) ② 川本 康博(琉)	當眞 嗣平 主 及川 卓郎(琉) ① 金野 俊洋(琉) ② 和田 康彦(佐) 補 長嶺 樹(琉)	
13:50-14:30		モハト ハルン ウル ラシト 主 モハト アムサト ホサイン (琉) ① 福田 雅一(琉) ② 穴井 豊昭(佐)	楯田 優希 主 弘中 和憲(琉) ① 平良 英三(琉) ② 紙谷 喜則(鹿農)	
14:40-15:20				
15:30-16:10		エルサイト アイマン カミス 主 徳田 誠(佐) ① 野間口 眞太郎(佐) ② 立田 晴記(琉)		
16:20-17:00		安達 修平 主 徳田 誠(佐) ① 早川 洋一(佐) ② 坂巻 祥孝(鹿農)		
<p>・発表20分・質疑応答20分とし、SINETで各構成大学に配信する</p> <p>・発表場所(SINET設置教室)</p> <p>佐賀大学:農学部1号館南棟1階学生演習室</p> <p>鹿児島大学(農):連合農学研究科棟3階会議室</p> <p>鹿児島大学(水):附属図書館水産学部分館セミナールーム</p> <p>琉球大学:農学部2階会議室</p> <p>・学部学生・修士学生も聴講可とする</p> <p>・知的財産管理の観点から、発表者以外の参加学生は「研究発表会情報管理確認書(別紙様式)」に所属氏名を記載する。参加教職員は、守秘義務が課せられているため、記載不要</p> <p>・終了後、主指導教員は「中間発表会」報告書及び「特別演習(必修2単位)」の成績報告表を提出する</p>				

## ティーチング・アシスタント（TA）研修会

本研究科では在學生を修士課程及び学士課程の教育補助者（ティーチング・アシスタント：TA）、あるいは研究補助者（リサーチ・アシスタント：RA）として採用し、教育研究指導者としてのトレーニングの機会を提供している。

平成18年度からTAの手引きを作成し、任務遂行のために必要な基本事項の周知を図ると共にTA活動実施報告書の提出を義務づけ、さらに平成19年度からは教育者の資質を効果的に向上させるシステムの一環として、TA活動の実態をより詳しく把握するためアンケート形式のTA活動評価調査を開始した。TAを行った本人が提出する活動報告書ならびにTAによる指導を受けた学生を対象とした活動評価調査の結果は、ファカルティ・ディベロップメント委員会で集計し、より質の高いTAの育成について継続的に検討している。

さらに、平成20年度から各構成大学で本研究科学生を対象としたTA研修会を連大主催で行い、より質の高いTAの育成を図っている。

平成19年度から平成28年度のアンケート形式のTA活動実施報告書によれば、TAを行ったことにより、将来学生を指導する際のトレーニングとして「とても役に立った」とする意見が圧倒的であり、「まあまあ役に立った」を含めると9割以上の学生がTA制度について有意義であると感じている。

次表は、平成22～28年度のTA、RAの採用状況である。例年、ほぼコンスタントに採用されているが、最近のTAの減少は入学者数の減少に伴うものである。また、TA学生にTA実施報告書や評価調査書を提出させ、さらには各構成大学でTAに関する研修を行い、資の高い教育補助者の育成を図っている。

平成28年度においては、7月20日（水）に代議委員によるTA研修会を開催したところである。

TA と RA の構成大学別年度採用数

年度 職種 構成大学	22		23		24		25		26		27		28	
	TA	RA												
佐賀大学	27	3	32	3	28	4	17	4	12	2	10	2	7	3
琉球大学	17	3	13	6	18	4	20	5	19	2	20	3	11	5
鹿大農学部	18	3	16	3	12	8	8	10	10	8	10	4	7	5
鹿大水産学部	6	7	11	5	11	6	6	4	5	6	8	4	18	4
宮崎大学	1		0											
合計	69	16	72	17	69	22	51	23	46	18	48	13	43	17

代議委員による TA  
研修会の様子



## 連合農学研究科 第3回男女共同参画セミナーを開催

佐賀大学、鹿児島大学、琉球大学の連合農学教員が一堂に会する数少ない機会である平成28年9月2日の連大教授会の前に、鹿児島大学男女共同参画推進センターコーディネータの山口 眞理先生を講師に招き、男女共同参画セミナーを開催しました。

本セミナーは平成26年度から引き続き開催されており、平成28年度で3回目となります。

連合農学研究科は、将来の農・水産学研究を担う女子学生が在籍していることから、直接指導を担当する連大教員に対して、男女共同参画のための意識啓発を推進するために、指導教員が揃う研究科教授会の前に合わせて、男女共同参画セミナーを開催しています。9月2日に第3回が開催され、佐賀大、琉球大、鹿大から108人が参加しました。「鹿児島大学の男女共同参画の推進」と題して、構成3大学の中期計画・中期目標の紹介、人権意識が問われる教育の場の指導する側における無意識の偏見やジェンダーバイアスが及ぼす悪影響の気づきの必要などについて、男女共同参画推進センターコーディネータが話しました。



男女共同参画推進センター  
コーディネータ 山口 眞理先生

梶井研究科長から、「ジェンダーバイアスやメディアリテラシーなどの説明を受け、男女共同参画の理念は理解していると思っていましたが、潜在的バイアスについて認識することができました。次世代の研究者育成に、連大は鹿児島大学の中で大きく貢献できる組織であり、留学生も多いことから、セミナーを通じて多様性の中から新しい発展を目指すことの意義をさらに深めることができました。」と感想がありました。

連合農学研究科は、女性・若手研究者を育成していくことを中期目標・計画に掲げ、次世代育成を目的とした研究科長裁量経費支援として、女子学生研究支援助成(30万円/1件;今年度は3件支援)を行っています。また、連大専任教員(副研究科長)および連大事務室長代理が「学生何でも相談窓口相談員」の立場で相談対応をしています。女性研究者に対しても、公募型研究支援で助成(20万円/1件)しており、今年度は6件の支援を決定しています。連合農学研究科のように、他学部、研究科等でもそれぞれの現状に合った男女共同参画にかかる意識啓発や具体的な手立てがより積極的に推進されることに期待しています。

～鹿児島大学男女共同参画推進センター発行「muse だより No20(2016年10月発行)」より～

## 連合農学研究科 ハラスメント防止のための講演会を開催

本研究科においては、昨年度に引き続き、佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部及び水産学部の教員を含めた連大教員に対して、ハラスメント防止のための意識啓発を推進する必要性があることから、連大主催のもと、平成 29 年 2 月 10 日（金）の連大教授会の開催前に、本学保健管理センター所長の伊地知 信二先生を講師に招いて、ハラスメント防止のための講演会を開催しました。

伊地知先生から、本学のハラスメントの定義（保健管理センターでの事例から）、ハラスメントをしないために必要な資質・知識等の説明やハラスメント事案及び実際の相談内容や対策・解決法などについて報告がありました。

当日は、佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部及び水産学部の教員 115 名の参加があり、充実した講演会となりました。



## 分野別セミナーの開催

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。



平成 28 年度は、平成 29 年 2 月 28 日から 3 月 1 日の日程で開催され、1 日目の 2 月 28 日(火)に外部講師による講演二題（「口臭のメカニズム」日本大学松戸歯学部 多田 充裕先生、「スフィンゴ糖脂質の化学構造の多様性」滋賀大学教育学部 糸乗 前先生）を実施した。その後、学生 11 名（博士課程学生 5 名）によるポスター発表を行い、質疑応答を行った。さらに、交流会で情報交換を行った。

2 日目の 3 月 1 日(水)は工場見学を実施した。午前には醤油、業務用加工食品・調味料を開発、製造している創業 135 年の宮島醤油妙見工場を見学し、宮島醤油基礎研究室の加藤 富民雄氏から説明を受けた。午後は明治 8 年から日本酒を製造している天山酒造を見学し、七田 謙介社長の説明を受けた。

参加学生は、講演、ポスター発表および交流会等を通して、分野の近い大学院生同士の情報交換や指導教員以外の教員からのアドバイスを受け、今後の博士論文研究の遂行と論文作成に本セミナーの成果が反映されると思われる。また、農芸化学分野に係わる工場での博士号を持つ研究員との交流や伝統的

な日本酒製造現場の見学は、今後の進路選択や就職後の業務に大いに役立つものと考えられる。

平成 28 年度参加者数 教員 21 名 学生 14 名(うち連大生 5 名) 計 35 名

右写真：2 日目の  
天山酒造見学風景



左写真：宮島醤油妙見工場前  
にて集合写真

## 平成28年度 連合農学研究科（博士課程） 「農学特別講義 I（一般セミナー）」実施報告

琉球大学農学部

本村 恵二

屋 宏典

中村 真也

平成28年度鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義 I（一般セミナー）」が平成28年11月7日（月）から11月9日（水）までの3日間の日程で行われた。この一般セミナーの趣旨は、「鹿児島大学大学院連合農学研究科に在籍する学生を対象とし、連合大学院教育の理念に基づき実施する」ことにある。本年度は琉球大学農学部が世話係となり、那覇市内の自治会館を会場とした。実施内容は外部講師によるセミナー（4コマ）、1年生による専攻セミナーおよび2年生による情報交換セミナーに加え、研究施設見学、交流会などある。本年度の参加学生数は74人（内訳：1年生39人、2年生33人、3年生2人；日本人学生35人、外国人学生39人）であった。

初日（11月7日（月））

14時15分からの開講式では榑井研究科長による挨拶、当番校の井上琉球大学農学研究科長による挨拶、司会担当（琉球大学屋代議員）による日程説明が行われた。開講式終了後、全員の記念撮影が行われた。

続く15時30分から初日のセミナーとなっている西村章先生（武田薬品工業(株)日本開発センタークリニカルサイエンスディレクター）による「日本での新薬製造承認申請における必要データ」をテーマに講義が行われた（17時まで）。新薬開発に関するプロセスを詳しく紹介され、受講生には大いに参考になったように見受けられた。



17時から交流会が行われ、専攻、年次、男女、国籍の区別なく談笑・飲食を楽しむ交流会となった。食事や飲み物が思い思いに楽しめるようにハラル食、沖縄の泡盛なども用意された。なお、会を盛り上げるためのアトラクションとして琉球大学職員らによるフラメンコダンスが本村代議員のギター伴奏で披露された。



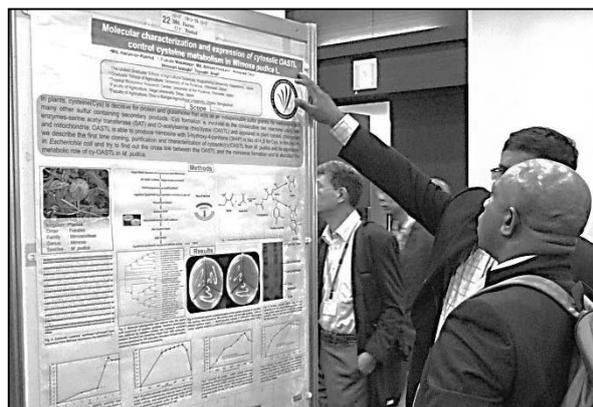
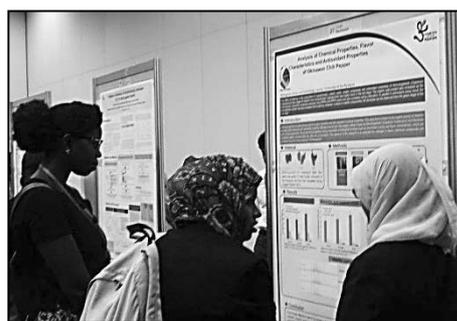
2日目(11月8日（火）)

9時から佐伯雄一先生（宮崎大学農学部教授）による「農耕地におけるダイズ根粒菌のゲノム生態学的研究」、10時40分から加藤進先生（三重大学伊賀研究拠点特任教授）による「狼煙あるいは烽火考—サイエンスからの想いを馳せて—」、昼食を挟んで13時10分から後藤貴文先生（九州大学大学院農学研究科准教授）による「代謝プログラミングと国内草資源による新しい和牛肉生産に関する研究」が講義された。佐伯先生にはダイズ根粒菌の生態形成と環境要因について、加藤先生には古代の伝達手段である狼煙における材料や風向・風速、可視範囲などによる科学的検証について、後藤先生には代謝プログ

ラミングによるウシの産肉性(肉質、肉量)をコントロールした効率的・省力的家畜飼養システムについての3テーマが詳しく紹介がなされた。いずれも興味深い内容であった。

14時50分からは専攻セミナーが行われた。昨年度は分野間の交流を促すことを意図して専攻の壁を取り除く形で学生の振り分けを行って実施されたが、今年度もそれに倣いクラス分け(4班)を行った。1年生においてはデータを用いて自己紹介および研究テーマのプレゼンテーション(持ち時間5分)、2年生においては口頭による自己紹介(持ち時間2~3分)が実施された。専攻内であれば当然、自分の研究分野以外でも触れる機会が多いが、専攻外分野の研究内容や手法についてはなかなか触れる機会が少ない。視野を広げることができ学際の見地からも有意義となったであろう。持ち時間をオーバーする学生も複数おり、次のスケジュール時間にずれ込むことを心配しながらの進行であったが、全ての班が時間内に済ませることができた。学生たちも限られた時間内で収まるようなプレゼン内容にする努力したと思われるが、時間厳守も発表者としての責務であるという認識を強く持つことが望まれる。なお、各班には3名の代議員の先生が出席し、円滑な進行を担った。

16時30分からポスターセッション(情報交換セミナー)が行われた(2年生32人)。文字の多用により、理解するのに時間がかかるポスター発表もあったが、全体としてそれぞれ自己の研究成果を視覚に訴えた分かりやすいポスター作りがなされていた。場内の混雑を避けるため、説明順序を奇数番号と偶数番号に分けて行い、その後個別的な自由討論・質疑応答に移った。代議員の投票により、1位1名、2位3名にポスター賞として賞状および副賞(USBメモリー)が贈られた。なお今後、学生たちにも投票に参加できるようにしてもいいのではないかという意見があった。



### 3日目(11月9日(水))

最終日の3日目は施設見学と閉講式が行われた。9時半に沖縄科学技術大学院大学(OIST)(恩納村在)に到着し、スタッフの与那嶺さん外による施設概要説明・研究室訪問が行われた。広大な施設・少人数制の下、進められている最先端の研究に皆さんも関心を抱いていた。

12時からOISTの講義室にて閉講式が行われた。初井研究科長の挨拶、井上当番校研究科長の挨拶、李雨桐学生代表挨拶に続き、寺田先生による次期当番校引き継ぎの挨拶が行われ、解散となり帰路に就いた。

3日間に亘り有意義にそして無事にスケジュールを運ぶことができたのは、講師の先生方、研究科長以下代議員の先生方、連大および当番校の事務、自治会館やOIST、そして学生たちの協力のたまものであり、この場を借りて皆様に感謝申し上げます。

## 平成28年度 連合農学研究科「人材養成学生支援セミナーI」実施報告

佐賀大学農学部

早川 洋一

濱 洋一郎

白武 義治

平成28年7月15日（金）、佐賀大学農学部学生演習室をメイン会場として、鹿児島大学連合農学研究科会議室、鹿児島大学水産学部図書館水産分館セミナールーム、そして琉球大学農学部会議室の各会場をSINETで結び、「人材養成学生支援セミナー I 2016」が開催された。4コマで0.5単位であるが、例年同様、各会場に講師をお招きして講義をしていただく形式で実施された。各会場から、それぞれ1つの演題が配信された。各会場とも、連大以外の学生や教員の参加もみられ、充実した内容のセミナーとなった。

セミナーは4つの講演と総合討論からなり、その概要は以下のとおりである。

9：00～10：20

講演1 小平 勘太氏（小平株式会社 代表取締役社長）

題目：農学部の研究者だった自分が経営者となるまで何を考えていたのか

10：30～11：50

講演2 稲福 桂一郎氏（金秀バイオ株式会社研究開発部執行役員部長）

題目：仕事としての研究開発について

13：00～14：20

講演3 黒木 豊氏（日本たばこ産業株式会社経営企画部）

題目：企業から見た博士の価値とは？ そして、博士のキャリアとは？

14：30～15：50

講演4 織田 康則氏（株式会社 ビークルマネージャー）

題目：理系大学院生が企業で活躍するためには何が必要か、今なにをすべきか

### 講演内容

全ての講演が、講演者自らの経験を踏まえた大変多岐にわたる内容であった。起業や将来の目標設定に際してのアドバイス、会社組織における研究開発、博士課程を経ての就職活動の心構え、そして、ベンチャー企業における製品開発のキーポイント等々、いずれも大変示唆に富む興味深い内容であった。さらに、全ての講師の方々が、大変念入りの準備をした上で今回のセミナーに臨んでいただいたこともあり、熱心に各講演に耳を傾ける聴講学生の表情が印象に残っている。

16:00～16:40

#### 総合討論

4つの講演の後、総合討論が行われた。今回のセミナーは講師全員が民間企業の方であり、通常の大学の講義では聴けない興味深い内容であった。その為、各会場より多数の質問が寄せられ、各質問に対して全ての講師の方々から其々示唆に富む真摯な回答がなされた。

最後に本セミナーでご講演下さった講師の方々に改めて厚く御礼申し上げますとともに、各会場で機器のセットアップや講演の準備をしていただいた各構成研究科の代議委員、事務職員の皆様に感謝いたします。このセミナーが連大生の今後の人生や将来のキャリア形成に役立つことを祈念いたします。以上、平成28年度「人材養成学生支援セミナーⅠ」の実施報告とさせていただきます。

**平成 28 年度開講報告書**  
**鹿児島大学連合農学研究科人材養成学生支援セミナーⅡ**  
**洋上セミナー**

平成 29 年 6 月 9 日

鹿児島大学水産学部 中村 啓彦

共同担当教員

鹿児島大学水産学部 小針 統

鹿児島大学水産学部 仁科 文子

## 1. 洋上セミナーの開催趣旨

鹿児島大学大学院連合農学研究科の博士課程大学院生5名を対象に、2016年11月12日～20日の期間、鹿児島大学水産学部附属練習船「かごしま丸」を利用して人材養成学生支援セミナーⅡ（洋上セミナー）を開講した。昨年度から、鹿児島大学水産学部の中村啓彦（教授）、小針統（准教授）、仁科文子（助教）が担当し、今回で2回目となる。従来の洋上セミナーは、デモンストレーション型実習（操船、操業、海洋観測等の体験）と人事交流型実習（近隣諸国に寄港して現地の大学等を訪問し研究発表）を組み合わせで行っていたのに対し、昨年度からは、研究に資する海洋観測を行う目的で航海を計画し、その目的を達成するための活動の一環として洋上セミナーを実施している。具体的には、「薩南海域の豊かな海洋生物資源を維持している黒潮の海洋環境と生態系の仕組みを明らかにする」という目標をもって、連大生とともに観測を実施し取得資料を考察することにより、研究者を目指す実習生（連大生）と専門家（担当教員・外部研究者）が協働して大きなサイエンスを志すという試みである。その結果、専門家は実習生の自然観や人生観に影響を与え、専門家は実習生から力を借りて学問を発展させられれば、この試みは成功と考える。

これらの目標を掲げて洋上セミナーをスタートさせたが、昨年度の実施報告書では、下記の改善点を報告した。

1. 洋上セミナーの実習生たちと、より一体感をもった授業内容にする
2. 乗船前に、お互いを知り、洋上生活を充実させる仕掛けを入れる
3. 洋上セミナー担当教員が一方的に与えるものではなく、学生が主体的に取り組める内容にする  
(洋上での博士研究の紹介と議論、観測目的や取得データについての議論の充実)

今年度の洋上セミナーでは、これらの点を踏まえて、昨年度の内容を改善した。ここに、その実施状況を報告する。

## 2. 乗船者および指導教員

鹿児島大学大学院連合農学研究科（5名）

D. Serge	農水圏資源環境科学・水産資源環境科学
Jeong Byeol	農水圏資源環境科学・水産資源環境科学
張 振龍	農水圏資源環境科学・水産資源環境科学
C. Sirikanya	農水圏資源環境科学・水産資源環境科学
福井 美乃	農水圏資源環境科学・水産資源環境科学

指導教員（3名）

中村 啓彦	鹿児島大学/水産学部/水圏科学分野
小針 統	鹿児島大学/水産学部/水圏科学分野
仁科 文子	鹿児島大学/水産学部/水圏科学分野

その他の乗船者（27名）

水産学研究科	大学院洋上観測乗船実習	4名
水産学部・水産学研究科の学生	による余席利用	6名
愛媛大学の教員・学生	による共同利用	5名
他大学・研究機関	による余席利用	12名

### 3. 活動記録

---

10月14日(金)	16:00	乗船説明会 (於: 鹿児島大学水産学部)
11月11日(金)	16:00	<u>セミナー I</u> (於: 鹿児島大学水産学部) ※アイスブレイク(自己紹介, 研究紹介を通して実習生活での連携を高める)
11月12日(土)	09:00	「かごしま丸」乗船 (現地集合) 船内生活説明, 救命艇操練
	17:00	観測開始
<p><u>連大生は, 他の乗船者に交じって, 1日2交替(各4時間)の観測に参加</u></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・水温・塩分・乱流・栄養塩・動植物プランクトン等の観測 (各種観測機器のオペレーション, サンプルの採取等を担当)</li><li>・係留型超音波多層式流速計の深海係留作業(設置および回収を実施)</li><li>・水中グライダーの投入・回収作業(見学)</li></ul>		
11月19日(土)	12:00	観測終了
	15:00	<u>セミナーII</u> ※海洋観測目的や取得資料の考察に関するレポート課題の説明 (提出期限:12月25日)
	17:00	<u>セミナーIII</u> ※他大学, 他研究機関から乗船した若手研究者によるキャリア形成と研究の講演会 堤英輔(九州大学・ポスドク研究員), 長谷川大介(東北区水産研究所・研究員), 吉江直樹(愛媛大学・准教授) ◇ 実習中盤で実施予定だったが、海況好転してから実施した
11月20日(日)	09:00	谷山港入港 積卸, 船内片づけ <u>観測データ紹介</u> ※取得資料を一次処理して作成した図に基づき, 観測結果の概要を説明
	12:00	昼食後解散

### 4. 実習内容

乗船に先立ち, かごしま丸の航海目的や実習内容に関する連大学生向けの説明会を10月14日に開催した。連大生には, この説明会で話した実習内容を参考にして乗船するかどうかを判断してもらったが, 結果として全員乗船することになった。また, 乗船学生の自己紹介・研究紹介を通して実習生活の連携を高めることを目的として, 乗船前日にセミナー I を開催した。当初, セミナー I は, かごしま丸に宿泊して実施する予定であったが, 参加学生全員が鹿児島大学所属であったこともあり, 大学内の教室を利用した実施と

なった。

洋上での実習は、「薩南海域の豊かな海洋生物資源を維持している黒潮の海洋環境と生態系の仕組みを明らかにする」という研究目標をもって実施された。この研究目標は、洋上セミナーの担当教員が所属する鹿児島大学水産学部水圏科学分野の戦略的研究課題であるとともに、海洋学に関する国内研究コミュニティの先端的研究課題とも深く関係している。洋上セミナーの実習生には、先端的な海洋学研究の観測現場の中で、高度な観測を担う一員として実習に参加することを要望するとともに、先端的な観測からしか経験することができない充実感を体感し、指導教員や他大学から乗船する研究者・学生との交流を通して自らの経験・知見を広げることがを要望した。また、観測機材を利用した海洋観測法を理解するのみならず、船舶という大型施設を利用し組織的に行う海洋観測の計画立案および現場運営の手法を身に付けることも目指した。乗船期間中、連大生は、その他の乗船者とともに3つの観測班に編成されて観測作業に従事した。

今年度のかごしま丸航海には、九州大学、愛媛大学、東北区水産研究所から若手研究者（30代前半～40代前半）が乗船したので、3人の方々に研究職キャリアの形成に対する経験や考え方を一人30分程度の時間で講演して頂いた。三人三様の興味深い講演であったが、ここでは、その中から東北区水産研究所の長谷川大介氏の講演題目と一枚のスライド内容を紹介する。

How I've been "hanging" onto exciting science & how much can scientist earn?

Tips... (from my subjective point of view)

At Graduate School:

Don't be hurry, you will not have much free time afterwards.

Discuss with your friends everyday about science, dream ...

Don't worry about your future. In time, the door will open.

Take care of your health, especially if you live alone.

Need money? join FRA cruises (e-mail ...deleted)

Job hunting:

Consider going to abroad (meet people, see other cultures...)

There are tons of opportunities. You need to check/ask around, advertise yourself and apply.

After getting employed:

Negotiate with your boss/employer about the terms of employment, such as salary and benefits.

Keep on looking for better positions.

Get married and have kids (i.e., enjoy your life.)

## 5. 成績評価

成績評価は、乗船実習中に修得すべき技術や知識の学修度に対する評価と、レポート課題に対する評価で行われた。レポート課題として、以下の設問が提出された。

1. 自分が目指す研究者・技術者へのキャリアプラン
2. そのキャリアプラン達成するために在学中に必要なこと

### 3. 講演に対する感想

## 6. 総括

今年度の洋上セミナーは、参加した5人の学生全員が農水圏資源環境科学・水産資源環境科学に所属する鹿児島大学の学生であった。そのため、学生の専門性と実習内容が近かったこともあり、洋上実習に対する学生の評価もよかった。主な評価理由は、「かごしま丸」という国内でも最先端の観測設備を備えた巨大施設を利用して、連大生と専門家が協働して観測するという特殊体験にあることが、実習レポートから窺える。

今年度の洋上セミナーでは、観測実習以外に、連大生が相互に自己紹介・研究紹介を行う機会を設け、実習生活での連携を高める試みをした。また、他大学・他研究機関から乗船した若手研究者にキャリア形成と研究の経験談や考え方を講演して頂き、連大生の将来設計に役立てる試みをした。特に、講演会は、講演者それぞれの人生観・研究観がストレートに伝わってきて、学生に好評であった。一方、まだまだ不十分な点は、観測目的・観測機器・取得データの解説に十分な時間を割けなかった点である。この点は、来年度以降、さらなる改善が必要である。

私たち担当教員は、洋上セミナーを、海洋学・水産学を専門とする学生のみを対象とした科目だとは考えていない。冒頭でも述べたとおり、洋上セミナーは、研究者を目指す学生（連大生）と専門家（担当教員および外部研究者）が協働して大きなサイエンスを志す試みであり、専門家は学生の自然観や人生観に影響を与え、専門家は学生から力を借りて学問を発展させることが目標である。この意味で、連大生の専門性とは関わりなく、このような内容に興味を持つ学生であれば誰でも参加可能なので、ぜひ参加して頂きたいと考えている。



◇資 料

学生数・教員組織等

# 年度別入学者数

平成29年4月1日現在

( ) 内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

		年度	昭と63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度
		入学定員	18	18	18	18	22	22	22	22	22	22	22
		志願者数	25	18	30	25	40	39	58	55	46	47	62
入学者数	構成大学※より	計	(社会人) 16 (留学生) (8)	(0) 14 (9)	(0) 21 (9)	(3) 15 (6)	(5) 23 (9)	(1) 28 (15)	(4) 45 (24)	(2) 44 (25)	(1) 36 (11)	(5) 34 (13)	(2) 43 (25)
	他大学より	計	(社会人) 9 (留学生) (5)	(0) 4 (3)	(0) 9 (8)	(0) 10 (8)	(1) 17 (14)	(0) 10 (9)	(1) 11 (10)	(1) 11 (9)	(0) 9 (8)	(1) 13 (10)	(2) 17 (12)
	計	計	(社会人) 25 (留学生) (13)	(0) 18 (12)	(0) 30 (17)	(3) 25 (14)	(6) 40 (23)	(1) 38 (24)	(5) 56 (34)	(3) 55 (34)	(1) 45 (19)	(6) 47 (23)	(4) 60 (37)
構成大学別配属内訳	佐賀大学(農)	計	(社会人) 7 (留学生) (4)	(0) 6 (4)	(0) 10 (4)	(1) 5 (1)	(1) 7 (2)	(0) 6 (5)	(0) 10 (7)	(0) 4 (3)	(0) 13 (3)	(1) 9 (5)	(0) 8 (5)
	宮崎大学(農)	計	(社会人) 8 (留学生) (3)	(0) 4 (3)	(0) 7 (4)	(2) 8 (4)	(1) 9 (6)	(0) 10 (5)	(1) 16 (9)	(1) 26 (16)	(0) 12 (7)	(3) 17 (7)	(0) 21 (16)
	鹿児島大学(農)	計	(社会人) 4 (留学生) (3)	(0) 3 (1)	(0) 9 (5)	(0) 8 (7)	(0) 9 (7)	(1) 6 (4)	(0) 14 (10)	(1) 9 (6)	(1) 7 (2)	(1) 5 (2)	(3) 12 (5)
	鹿児島大学(水)	計	(社会人) 6 (留学生) (3)	(0) 5 (4)	(0) 4 (4)	(0) 4 (2)	(3) 11 (6)	(0) 10 (7)	(0) 10 (7)	(1) 10 (6)	(0) 8 (3)	(0) 6 (4)	(1) 12 (7)
	琉球大学(農)	計	(社会人) /	/	/	/	(1) 4 (2)	(0) 6 (3)	(4) 6 (1)	(0) 6 (3)	(0) 5 (4)	(1) 10 (5)	(0) 7 (4)
	計	計	(社会人) 25 (留学生) (13)	(0) 18 (12)	(0) 30 (17)	(3) 25 (14)	(6) 40 (23)	(1) 38 (24)	(5) 56 (34)	(3) 55 (34)	(1) 45 (19)	(6) 47 (23)	(4) 60 (37)
	国籍別入学者数	国名	入学者数	日本 12 インドネシア 3 タイ 2 韓国 1 中国 4 バングラデシュ 2 西ドイ 1	日本 6 インドネシア 3 韓国 2 中国 4 バングラデシュ 1 フィリピン 1 マレーシア 1	日本 13 インドネシア 3 タイ 3 韓国 2 中国 3 バングラデシュ 1 フィリピン 2 マレーシア 2 エジプト 1	日本 11 スリランカ 1 インドネシア 2 タイ 3 韓国 4 中国 5 バングラデシュ 4 フィリピン 1 ミャンマー 1 アルゼンチン 1 グアテマラ 1 スペイン 1	日本 17 インドネシア 1 タイ 1 韓国 3 中国 4 バングラデシュ 5 フィリピン 4 ミャンマー 1 アルゼンチン 1 グアテマラ 1 スペイン 1	日本 14 インドネシア 1 タイ 1 韓国 2 中国 6 バングラデシュ 1 フィリピン 2 ミャンマー 1 コスタリカ 1 ブラジル 1 エジプト 1 ナイジェリア 1 セネガル 1 チュニジア 1	日本 22 インドネシア 9 スリランカ 1 タイ 2 韓国 2 中国 5 バングラデシュ 6 フィリピン 5 ミャンマー 1 コスタリカ 1 ブラジル 1 エジプト 1 ナイジェリア 1 セネガル 1 チュニジア 1	日本 21 インドネシア 7 タイ 1 韓国 3 中国 10 バングラデシュ 1 マレーシア 1 バングラデシュ 7 フィリピン 1 ミャンマー 1 エジプト 1 ナイジェリア 1 セネガル 1	日本 26 インドネシア 2 韓国 3 タイ 8 中国 4 バングラデシュ 1 フィリピン 1 ボリビア 1 ガーナ 1 ケニア 1 セネガル 1	日本 24 インドネシア 1 スリランカ 3 タイ 1 韓国 6 中国 5 バングラデシュ 2 フィリピン 1 ボリビア 1 ナイジェリア 2 ケニア 1 セネガル 1

※佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部、鹿児島大学水産学部、宮崎大学農学部出身者数。  
宮崎大学農学部は昭和63年～平成18年度まで、琉球大学農学部は平成4年度より構成大学である。

# 年度別入学者数

平成29年4月1日現在

( ) 内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

		年度		平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度											
		入学定員		22	22	22	22	22	22	23	23	23	23	23											
		志願者数		44	55		55	67	67	39	50	30	40	40											
入学者数	構成大学※より	計	(社会人) (留学生)	31 (2) (16)	37 (4) (23)	49 (7) (25)	37 (2) (19)	46 (4) (22)	62 (6) (20)	31 (3) (12)	36 (2) (19)	25 (3) (13)	30 (2) (16)	29 (5) (16)											
	他大学より	計	(社会人) (留学生)	12 (1) (10)	18 (3) (8)	14 (2) (7)	13 (5) (4)	18 (4) (12)	5 (1) (3)	7 (2) (5)	13 (3) (6)	3 (0) (2)	10 (2) (6)	11 (0) (10)											
	計	(社会人) (留学生)	43 (3) (26)	55 (7) (31)	63 (9) (32)	50 (7) (23)	64 (8) (34)	67 (7) (23)	38 (5) (17)	49 (5) (25)	28 (3) (15)	40 (4) (22)	40 (4) (26)												
構成大学別	佐賀大学(農)	計	(社会人) (留学生)	13 (2) (9)	11 (1) (6)	11 (0) (5)	7 (0) (5)	10 (1) (5)	17 (1) (8)	10 (1) (5)	13 (1) (6)	7 (0) (2)	10 (0) (6)	12 (1) (8)											
	宮崎大学(農)	計	(社会人) (留学生)	7 (1) (1)	12 (1) (8)	19 (3) (9)	10 (2) (3)	21 (4) (7)	15 (2) (5)	5 (1) (1)	8 (2) (3)														
	鹿児島大学(農)	計	(社会人) (留学生)	7 (0) (6)	13 (1) (8)	12 (2) (7)	17 (5) (7)	11 (1) (7)	13 (2) (4)	7 (1) (4)	13 (0) (7)	11 (2) (6)	13 (2) (6)	5 (1) (3)											
	鹿児島大学(水)	計	(社会人) (留学生)	8 (0) (6)	11 (2) (7)	12 (0) (7)	9 (0) (5)	12 (1) (9)	8 (0) (4)	5 (0) (4)	4 (0) (4)	4 (0) (4)	7 (6) (6)	12 (1) (9)											
	琉球大学(農)	計	(社会人) (留学生)	8 (0) (4)	8 (2) (2)	9 (4) (4)	7 (0) (3)	10 (1) (6)	14 (2) (2)	10 (2) (3)	10 (3) (5)	6 (0) (3)	10 (2) (4)	11 (2) (6)											
	連携大学院	計	(社会人) (留学生)								1 (0) (0)	1 (0) (0)	0 (0) (0)	0 (0) (0)	0 (0) (0)										
	計	(社会人) (留学生)	43 (3) (26)	55 (7) (31)	63 (9) (32)	50 (7) (23)	64 (8) (34)	67 (7) (23)	38 (5) (17)	49 (6) (25)	28 (15) (15)	40 (4) (22)	40 (4) (26)												
国籍別入学者	国名数	日本	17	日本	24	日本	31	日本	27	日本	30	日本	44	日本	21	日本	24	日本	13	日本	18	日本	14		
		インド	1	インド	1	インド	1	インドネシア	3	インド	1	インド	1	インドネシア	2	インドネシア	1	インドネシア	4	インド	1	インドネシア	9		
		インドネシア	8	インドネシア	7	インドネシア	4	カンボジア	1	インドネシア	3	インドネシア	2	タイ	1	スリランカ	1	インドネシア	1	スリランカ	1	スリランカ	2		
		韓国	3	スリランカ	1	カンボジア	1	スリランカ	1	カンボジア	1	カンボジア	1	韓国	1	韓国	1	タイ	1	スリランカ	3	タイ	1		
		中国	3	スリランカ	3	スリランカ	2	中国	7	スリランカ	1	スリランカ	2	中国	6	中国	6	韓国	1	タイ	2	韓国	1		
		ネパール	1	中国	9	タイ	2	バングラデシュ	1	タイ	2	タイ	1	パキスタン	1	バングラデシュ	4	中国	1	中国	3	中国	2		
		バングラデシュ	4	バングラデシュ	6	中国	8	エジプト	2	韓国	3	中国	7	バングラデシュ	2	フィリピン	1	バングラデシュ	2	パキスタン	1	ネパール	2		
		フィリピン	2	フィリピン	1	バングラデシュ	2	ベトナム	2	中国	9	パキスタン	1	マレーシア	1	ベトナム	2	フィリピン	2	バングラデシュ	4	バングラデシュ	1		
		マレーシア	1	マレーシア	1	フィリピン	1	マレーシア	2	バングラデシュ	1	バングラデシュ	1	エジプト	1	マレーシア	1	マレーシア	1	ベトナム	1	ブータン	1	フィリピン	1
		メキシコ	1	コロンビア	1	ベトナム	3	ミャンマー	2	フィリピン	3	フィリピン	3	カンボジア	1	ミャンマー	2	ミャンマー	1	フィリピン	1	ベトナム	2	ベトナム	2
		イラン	1	エジプト	1	ミャンマー	3	メキシコ	1	ベトナム	2	グアテマラ	1			コロンビア	1	カンボジア	1	キューバ	1	ミャンマー	2	ミャンマー	2
		タンザニア	1			アメリカ	1	モリタニア	1	ミャンマー	2	トルコ	1			オマーン	1			ケニア	1	台湾	1	台湾	1
						ブラジル	1			アルゼンチン	2	ヨルダン	1			コートジボワール	1			タンザニア	2	ケニア	1	ケニア	1
						ルーマニア	1			イエメン	1	ガーナ	1			ナイジェリア	1			チュニジア	1	チュニジア	1	チュニジア	1
						ヨルダン	1			トルコ	1					マダガスカル	1								
						イラン	1			ケニア	1					リビア	1								
										マラウイ	1														

※佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部、鹿児島大学水産学部、宮崎大学農学部出身者数。  
宮崎大学農学部は昭和63年～平成18年度まで、琉球大学農学部は平成4年度より構成大学である。

# 年度別入学者数

平成29年4月1日現在

( )内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

		年 度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	平成32年度				
		入学定員	23	23	23	23	23	23	23	23	23						
		志願者数	45	38	36	29	28	36	44	31							
入 学 者 数	構成大学※ よ	計	(社会人) 27 (留学生) (10)	(5) 26 (10)	(3) 22 (6)	(4) 16 (5)	(4) 20 (6)	(5) 20 (3)	(4) 18 (7)	(1) 15 (5)							
	他大学 よ	計	(社会人) 16 (留学生) (12)	(2) 12 (9)	(4) 13 (8)	(3) 13 (10)	(2) 6 (3)	(2) 15 (11)	(2) 24 (17)	(6) 16 (8)							
	計	計	(社会人) 43 (留学生) (22)	(5) 38 (19)	(7) 35 (14)	(7) 29 (15)	(6) 26 (9)	(7) 35 (14)	(6) 42 (24)	(7) 31 (13)							
構 成 大 学 別 配 属 内 訳	佐賀大学(農)	計	(社会人) 14 (留学生) (8)	(1) 12 (7)	(0) 5 (2)	(2) 3 (1)	(1) 7 (1)	(0) 6 (4)	(1) 5 (3)	(2) 8 (5)							
	鹿児島大学(農)	計	(社会人) 10 (留学生) (3)	(2) 8 (3)	(4) 8 (0)	(3) 7 (2)	(3) 10 (4)	(2) 5 (3)	(2) 6 (2)	(3) 12 (4)							
	鹿児島大学(水)	計	(社会人) 11 (留学生) (7)	(1) 11 (7)	(0) 6 (3)	(1) 9 (7)	(1) 4 (2)	(1) 7 (2)	(1) 19 (14)	(0) 2 (0)							
	琉球大学(農)	計	(社会人) 8 (留学生) (4)	(1) 7 (2)	(3) 16 (9)	(3) 10 (5)	(1) 5 (2)	(4) 17 (5)	(2) 12 (5)	(2) 9 (4)							
	連携大学院	計	(社会人) /	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/				
	計	計	(社会人) 43 (留学生) (22)	(5) 38 (19)	(7) 35 (14)	(7) 29 (15)	(6) 26 (9)	(7) 35 (14)	(6) 42 (24)	(7) 31 (13)							
国 籍 別 入 学 者	国 入 学 者 名 数	日本	21	日本	19	日本	21	日本	14	日本	17	日本	21	日本	18		
		バングラデシュ	7	インドネシア	4	ベトナム	3	タイ	3	中国	3	バングラデシュ	6	バングラデシュ	4	バングラデシュ	5
		インドネシア	4	ベトナム	3	スリランカ	2	エジプト	2	バングラデシュ	2	中国	3	スリランカ	3	インドネシア	3
		中国	4	スリランカ	2	マレーシア	2	スリランカ	2	エリトリア	1	インドネシア	1	中国	3	ベトナム	3
		フィリピン	2	バングラデシュ	2	タイ	1	バングラデシュ	2	ジンバブエ	1	エジプト	1	ベトナム	2	スリランカ	1
		ベトナム	2	フィリピン	2	フィジー	1	ベトナム	2	タイ	1	韓国	1	ベトナム	3	アメリカ	1
		セネガル	1	ミャンマー	2	フィリピン	1	タンザニア	1	ミャンマー	1	スリランカ	1	エジプト	1		
		タイ	1	ウガンダ	1	ボリビア	1	フィリピン	1			タンザニア	1	ソロモン	1		
		ミャンマー	1	トンガ	1	ミャンマー	1	マラウイ	1					タイ	1		
				マレーシア	1	韓国	1	中国	1					パナマ	1		
		モリタニア	1	中国	1							パナマ	1				
												パプアニューギニア	1				
												フィジー	1				
												フィリピン	1				
												ミャンマー	1				

※佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部、鹿児島大学水産学部、宮崎大学農学部出身者数。  
宮崎大学農学部は昭和63年～平成18年度まで、琉球大学農学部は平成4年度より構成大学である。

平成28年10月入学生及び指導教員名簿

専攻	連合講座	フリカナ 氏名 (国籍) (性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補指導補助教員	備考
生物生産科学	地域・国際 資源経済学	ゲエン ティゴク トゥオン Nguyen Thi Ngoc Thuong (ベトナム) (女)	稲岡 司(佐)	①辻 一成(佐) ②豊 智行(鹿農)	私費
応用生命科学	生物機能化学	セトクチ ショウ 瀬戸口 翔 (日本) (男)	玉置 尚徳(鹿農)	①二神 泰基(鹿農) ②外山 博英(琉)	
		タカ ツシ 田中 剛士 (日本) (男)	金子 哲(琉)	①高島 幸司(琉) ②藤田 清貴(鹿農)	
農水圏資源 環境科学	生物環境 保全科学	カコキ サシ 鹿子木 聡 (日本) (男)	津田 勝男(鹿農)	①坂巻 祥孝(鹿農) ②徳田 誠(佐)	
	地域資源 環境工学	マワナネ ハーワ ジャカ プラサダ ゲナラタ Mawanane Hewa Janaka Prasad Gunarathna (スリランカ) (男)	酒井 一人(琉)	①仲村渠 将(琉) ②靱井 和朗(鹿農)	私費
		ラージ ユパ ケハ パティランネラーゲ サカリヤ サマディ ラージ ユパ ケ Rajapakse Pathirannehelage Sakalya Samadhi Rajapakse (スリランカ) (女)	田中 宗浩(佐)	①鄭 紹輝(佐) ②濱中 大介(鹿農)	私費
	水産資源 環境科学	アディシントウイト オルビエ オスワルト Adissin Tohouindo Olivier Oswald (ベナン) (男)	石川 学(鹿水)	①越塩 俊介(鹿水) ②寺田 竜太(鹿水)	国費
		モハマト マスム ビラ Md Masum Billah (バングラデシュ) (男)	宇野 誠一(鹿水)	①安樂 和彦(鹿水) ②吉川 毅(鹿水) 補國師 恵美子(鹿水)	国費
		ライナス アサキ Linus Asamaki (パプアニューギニア) (男)	石川 学(鹿水)	①越塩 俊介(鹿水) ②山本 淳(鹿水) 補横山 佐一郎(鹿水)	国費

平成29年4月入学生及び指導教員名簿

専攻	連合講座	フリカナ 氏名 (国籍) (性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補指導補助教員	備考	
生物生産科学	熱帯資源・ 植物生産科学	マジュンダ エムディ サギル イスラム Majumder Md. Sagirul Islam (バングラデシュ)(男)	モハマト アムザト 村伊(琉)	①赤嶺 光(琉) ②遠城 道雄(鹿農) 補仲村 一郎(琉)	国費	
		サルカー エムディ アブドゥル ローフ Salkar Md Abdur Rauf (バングラデシュ)(男)	穴井 豊昭(佐)	①鈴木 章弘(佐) ②橋本 文雄(鹿農)	国費	
		トモト タケ 豊元 大希 (日本)(男)	一谷 勝之(鹿農)	①清水 圭一(鹿農) ②穴井 豊昭(佐)		
		クハラ カズシ 栗原 一寿 (日本)(男)	藤田 大輔(佐)	①鄭 紹輝(佐) ②坂上 潤一(鹿農)		
		モハマト カビル イスラム Mohammad Kabirul Islam (バングラデシュ)(男)	モハマト アムザト 村伊(琉)	①佐野 文子(琉) ②坂上 潤一(鹿農)	私費	
		グエン デイン クン Nguyen Dinh Cuong (ベトナム)(男)	藤田 大輔(佐)	①鄭 紹輝(佐) ②一谷 勝之(鹿農)	私費	
	動物資源 生産科学	動物資源 生産科学	カセ フミエ 川瀬 史恵 (日本)(女)	建本 秀樹(琉)	①金野 俊洋(琉) ②三好 和睦(鹿農)	
			カチュン ハフィザ Khatun Hafiza (バングラデシュ)(女)	和田 康彦(佐)	①山中 賢一(佐) ②建本 秀樹(琉)	国費
			シュウモト コウダイ 周本 剛大 (日本)(男)	佐野 文子(琉)	①寺嶋 芳江(琉) ②山本 淳(鹿水)	
			アセップ セティアジ Asep Setiaji (インドネシア)(男)	及川 卓郎(琉)	①建本 秀樹(琉) ②和田 康彦(佐)	国費
	地域・国際 資源経済学	地域・国際 資源経済学	オシロ タケ 大城 健 (日本)(男)	内藤 重之(琉)	①杉村 泰彦(琉) ②豊 智行(鹿農)	
			フナム クオック フン Pham Quoc Hung (ベトナム)(男)	豊 智行(鹿農)	①坂井 教郎(鹿農) ②辻 一成(佐)	私費
			ペレグリーニ クリストファー カー Pellegrini, Christopher Carr (アメリカ)(男)	李 哉沄(鹿農)	①高峯 和則(鹿農) ②内藤 重之(琉)	私費

平成29年4月入学生及び指導教員名簿

専攻	連合講座	フリガナ 氏名 (国籍) (性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補指導補助教員	備考
応用生命科学	生物機能化学	カノカチロ 門岡 千尋 (日本)(男)	二神 泰基(鹿農)	①玉置 尚徳(鹿農) ②後藤 正利(佐)	
	食品機能科学	オシキ 大石 一樹 (日本)(男)	塩崎 一弘 (鹿水)	①小松 正治(鹿水) ②藤田 清貴(鹿農)	
		シモトキ 島元 紗希 (日本)(女)	井尻 大地(鹿農)	①大塚 彰(鹿農) ②永尾 晃治(佐)	
	先端応用 生命科学	ゲイアムララクシ Fina Amreta Laksmi (インドネシア)(女)	石橋 松二郎(鹿農)	①花城 勲(鹿農) ②渡邊 啓一(佐) 補鶴丸 博人(鹿農)	国費
		カミラミ 上村 美優 (日本)(女)	橋本 文雄(鹿農)	①岡本 繁久(鹿農) ②石丸 幹二(佐)	
		ゾハラファティマテュス Zohra Fatema Tuz (ハンガリー)(女)	光武 進(佐)	①古藤田 信博(佐) ②山本 雅史(鹿農)	私費
		タシマトキ 高島 智也 (日本)(男)	平良 東紀(琉)	①橋 信二郎(琉) ②光富 勝(佐) 補上地 敬子(琉)	
		キトクミ 木戸 めぐみ (日本)(女)	侯 徳興(鹿農)	①坂尾 こず枝(鹿農) ②和田 浩二(琉)	

平成29年4月入学生及び指導教員名簿

専攻	連合講座	フリガナ 氏名 (国籍) (性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補指導補助教員	備考
農水圏資源 環境科学	生物環境 保全科学	オノ マサ 小野 雅弥 (日本)(男)	吉賀 豊司(佐)	①早川 洋一(佐) ②津田 勝男(鹿農)	
		オオタニ ユイ 大谷 結 (日本)(女)	岩井 久(鹿農)	①岡本 繁久(鹿農) ②鈴木 章弘(佐)	
		モリヤマ ミチ 森山 美穂 (日本)(女)	大島 一里(佐)	①草場 基章(佐) ②岩井 久(鹿農)	
		リスカ Riska (インドネシア)(女)	岩井 久(鹿農)	①中村 正幸(鹿農) ②大島 一里(佐)	私費
		ゴトウ ヒデアキ 後藤 秀章 (日本)(男)	坂巻 祥孝(鹿農)	①曾根 晃一(鹿農) ②徳田 誠(佐)	
	地域資源 環境工学	イズミカ ムナリ 泉川 良成 (日本)(男)	中村 真也(琉)	①平良 英三(琉) ②田中 宗浩(佐)	
		クワン チトアン Cuong Chi Doan (ベトナム)(男)	田中 宗浩(佐)	①長 裕幸(佐) ②鹿内 健志(琉)	私費
		マヤカデ ユワゲ ナデーカール クマール Mayakaduwege Nadeeka Kumari (スリランカ)(女)	酒井 一人(琉)	①中村 真也(琉) ②弓削 こずえ(佐)	国費
		マキノ コウスケ 牧野 耕輔 (日本)(男)	岡 勝(鹿農)	①寺本 行芳(鹿農) ②芝 正己(琉)	
	水産資源 環境科学	コヅノ ジュンペイ 小園 淳平 (日本)(男)	寺田 竜太(鹿水)	①山本 智子(鹿水) ②本村 浩之(鹿農) 補遠藤 光(鹿水)	

## 平成28年度奨学金及び研究助成金受給状況

### 奨学金

名 称	申請者数	採用者数
国内採用による国費外国人留学生	0名	0名
公益財団法人旭硝子奨学会	1名	1名
公益財団法人大塚敏美育英財団奨学金	1名	1名
公益財団法人清川秋夫育英奨学財団奨学金	1名	0名
公益財団法人佐藤奨学会奨学金	1名	0名
公益財団法人東南アジア国際奨学財団	1名	1名
一般財団法人東和食品研究振興会奨学金	2名	0名
公益財団法人戸部眞紀財団奨学金	1名	0名
公益財団法人中村積善会奨学金	1名	0名
公益財団法人日揮・実吉奨学会留学生給与奨学金	1名	1名
公益財団法人日揮・実吉奨学会留学生第2種給与奨学金	1名	1名
公益財団法人平和中島財団奨学金	1名	0名
公益財団法人米山ロータリー記念奨学会奨学金	4名	3名

### 日本学生支援機構奨学生

学 年	申請者数	採用者数
1年次（第一種）	9名	9名

## 平成28年度入学料及び授業料免除状況

### 入学料免除

\	申請者数	全額免除者数	半額免除者数	不許可者数
4月入学	3名	0名	1名	2名
10月入学	3名	0名	2名	1名

### 授業料免除

\	申請者数	全額免除者数	半額免除者数	不許可者数
前 期	26名	4名	20名	2名
後 期	26名	7名	19名	0名

## 学位記授与状況

### I. 課程博士

H29.4.1現在

専攻名	年度	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
生物生産科学		4 (3)	5 (4)	4 (4)	3 (2)	5 (5)	9 (7)	14 (8)	12 (9)	14 (9)	14 (8)	9 (7)
生物資源利用科学		3 (3)	1 (1)	2 (2)	4 (1)	4 (1)	8 (3)	10 (7)	13 (10)	7 (2)	7 (1)	9 (3)
生物環境保全科学		1 (1)	2 (2)	6 (3)	6 (5)	6 (4)	2 (2)	15 (11)	15 (10)	6 (5)	12 (9)	11 (6)
水産資源科学		4 (2)	6 (4)	7 (5)	7 (6)	9 (7)	10 (8)	7 (7)	7 (5)	5 (3)	10 (4)	9 (2)
計		12 (9)	14 (11)	19 (14)	20 (14)	24 (17)	29 (20)	46 (33)	47 (34)	32 (19)	43 (22)	38 (18)

専攻名	年度	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
生物生産科学		10 (7)	16 (10)	19 (12)	9 (8)	20 (14)	12 (8)	13 (7)	16 (9)	9 (5)	6 (3)
生物資源利用科学		8 (6)	14 (5)	7 (5)	19 (9)	9 (3)	10 (3)	9 (3)	10 (2)	9 (2)	7 (2)
生物環境保全科学		8 (7)	6 (3)	5 (2)	7 (3)	6 (3)	9 (3)	6 (5)	10 (6)	9 (5)	8 (2)
水産資源科学		10 (6)	11 (5)	10 (7)	9 (4)	10 (6)	9 (7)	7 (3)	8 (7)	6 (4)	5 (4)
計		36 (26)	47 (23)	41 (26)	44 (24)	45 (26)	40 (21)	35 (18)	44 (24)	33 (16)	26 (11)

専攻名	年度	23	24	25	26	27	28	29	30	31	合計
生物生産科学		8 (4)	2	3 (2)	2						238 (155)
生物資源利用科学		5 (3)	3 (1)		1						179 (78)
生物環境保全科学		2 (1)									158 (98)
水産資源科学		1 (1)	1 (1)								168 (108)
生物生産科学		6 (4)	8 (7)	10 (7)	9 (6)	7 (4)	8 (4)				48 (32)
応用生命科学		2 (2)	7 (6)	5 (3)	7 (4)	8 (5)	12 (4)				41 (24)
農水圏資源環境科学		8 (4)	13 (9)	11 (4)	9 (5)	9 (3)	13 (7)				63 (32)
計		32 (19)	34 (24)	29 (16)	28 (15)	24 (12)	33 (15)				895 (527)

平成21年度4月入学者より、4専攻から3専攻に改組。

( )内数は、外国人留学生で内数。

【国別内訳】

国名	日本	インド	インドネシア	カンボジア	スリランカ	タイ	韓国	中国	台湾	ネパール	パキスタン	バングラ デシュ	ブータン	フィリピン	ベトナム	マレーシア
人数	368	8	76	4	18	33	29	117	2	5	4	73	1	34	21	14
国名	ミャンマー	アメリカ	アルゼンチン	グアテマラ	コスタリカ	コロンビア	ブラジル	ボリビア	メキシコ	ギリシャ	スペイン	ドイツ	トンガ	パプア ニューギニア	フィジー	イエメン
人数	17	1	1	2	1	2	3	2	1	1	2	1	1	1	1	1
国名	トルコ	イラン	オマーン	ヨルダン	エジプト	カーナ	ケニア	コートジボ アール	ザンビア	セネガル	タンザニア	チュニジア	ウガンダ	ナイジェリア	マダガス カル	マラウイ
人数	2	2	1	2	10	5	5	1	1	3	6	2	1	3	1	2
国名	モルタニア	リビア	ジン バブエ													合計
人数	1	1	1													895

II. 論文博士

年度	人数	国名	年度	人数	国名	年度	人数	国名
3	2	日本	14	3	日本・タイ・フィリピン	25	1	日本
4	2	日本	15	19	日本・ベトナム・中国	26	0	
5	4	日本・マレーシア・韓国・中国	16	5	日本	27	1	インドネシア
6	1	中国	17	9	日本	28	3	日本・ブータン
7	7	日本・米国・インドネシア・タイ	18	17	日本・エジプト・スペイン			
8	2	日本・インドネシア	19	9	日本・アルジェリア・インドネシア・フィリピン			
9	2	日本	20	10	日本・アメリカ			
10	9	日本・フィリピン	21	12	日本・フィリピン・インドネシア			
11	3	日本	22	0				
12	5	日本	23	0				
13	8	日本	24	3	日本	合計	137	

## 平成 28 年度学位取得者名簿

### 課程博士

学位授与年月日	専攻 連合講座	フリガナ 氏名 (性別)(国籍)	主指導教員
平成 28 年 9 月 16 日	応用生命科学 先端応用生命科学	カトリ 功 高取 由佳 (女)(日本)	橋本 文雄(鹿農)
平成 28 年 9 月 16 日	応用生命科学 先端応用生命科学	ヒサカ アヤミ 久永 絢美 (女)(日本)	侯 徳興(鹿農)
平成 28 年 9 月 16 日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	マハムド アブドゥルハミッド オムラン ダウウド Mahmoud Abdelhamid Omran Dawood (男)(エジプト)	越塩 俊介(鹿水)
平成 28 年 9 月 16 日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	ワチャポン チュムチュン Watcharapong Chumchuen (男)(タイ)	安樂 和彦(鹿水)
平成 28 年 9 月 16 日	農水圏資源環境科学 水産資源環境工学	プリーチャー カペチ Preecha Kapetch (男)(タイ)	酒井 一人(琉)
平成 28 年 9 月 16 日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	モハマト サハワット ホサイン Md.Sakhawat Hossain (男)(バングラデシュ)	越塩 俊介(鹿水)
平成 28 年 9 月 16 日	応用生命科学 生物機能化学	サダタ カズノブ 澤田 和敬 (男)(日本)	北垣 浩志(佐)
平成 29 年 3 月 13 日	生物生産科学 動物資源生産科学	シラ エキ 主税 裕樹 (男)(日本)	中西 良孝(鹿農)
平成 29 年 3 月 13 日	応用生命科学 食品機能科学	フナヒ アキ 舟橋 亜希 (女)(日本)	上西 由翁(鹿水)
平成 29 年 3 月 13 日	応用生命科学 生物機能化学	ヒロシゲ リョウイチ 廣重 亮一 (男)(日本)	井上 章二(琉)
平成 29 年 3 月 13 日	農水圏資源環境科学 地域資源環境工学	オカダ ショウゴウ 岡田 正三 (男)(日本)	川満 芳信(琉)
平成 29 年 3 月 13 日	応用生命科学 先端応用生命科学	フィーベアー ザパンタ トリオ Phoebe Zapanta Trio (女)(フィリピン)	侯 徳興(鹿農)
平成 29 年 3 月 13 日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	エルサイド モハマト エルナバウイ Elsaid Mohamed Elnabawy (男)(エジプト)	津田 勝男(鹿農)
平成 29 年 3 月 13 日	応用生命科学 生物機能化学	ドアン ダン フィ コン Doan Dang Phi Cong (男)(ベトナム)	寺嶋 芳江(琉)
平成 29 年 3 月 13 日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	ヒグチ サトシ 樋口 聡志 (男)(日本)	津田 勝男(鹿農)
平成 29 年 3 月 13 日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	シムラ アヤ 下村 彩 (女)(日本)	鈴木 章弘(佐)

学位授与年月日	専攻 連合講座	カタナ 氏名(性別)(国籍)	主指導教員
平成29年3月13日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	ワタベ ケタ 渡邊 健太 (男)(日本)	川満 芳信(琉)
平成29年3月13日	生物生産科学 動物資源生産科学	ウイン ミトウエ Win Mi Htwe (女)(ミャンマー)	川本 康博(琉)
平成29年3月13日	生物生産科学 地域・国際資源経済学	ハン ハン 樊 帆 (男)(中国)	秋山 邦裕(鹿農)
平成29年3月13日	応用生命科学 先端応用生命科学	イスマエル ムタンダ Ishmael Mutanda (男)(ジンバブエ)	屋 宏典(琉)
平成29年3月13日	応用生命科学 先端応用生命科学	ゴ ジュシヨウ 伍 樹松 (男)(中国)	侯 徳興(鹿農)
平成29年3月13日	応用生命科学 先端応用生命科学	シライ 洋平 白石 洋平 (男)(日本)	高峯 和則(鹿農)
平成29年3月13日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	サウ カズキ 佐藤 一輝 (男)(日本)	吉賀 豊司(佐)
平成29年3月13日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	ヤカ リョウカ 八坂 亮祐 (男)(日本)	大島 一里(佐)
平成29年3月13日	農水圏資源環境科学 地域資源環境工学	ジャンノック ピヤマート Jannok Piyamart (女)(タイ)	芝山 道郎(鹿農)
平成29年3月13日	農水圏資源環境科学 地域資源環境工学	フジヤマ ヌ 藤山 宗 (男)(日本)	靱井 和朗(鹿農)
平成29年3月13日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	ジヤナトル ファーナ Zannatul Farhana (女)(バングラデシュ)	大富 潤(鹿水)
平成29年3月13日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	ワタベ ヨキ 渡邊 裕基 (男)(日本)	寺田 竜太(鹿水)
平成29年3月13日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	ウロ スリ スルティ Woro Sri Suharti (女)(インドネシア)	鄭 紹輝(佐)
平成29年3月13日	応用生命科学 先端応用生命科学	タラ ナオキ 平良 直幸 (男)(日本)	屋 宏典(琉)
平成29年3月13日	応用生命科学 生物機能化学	トキムラ カエ 時村 金愛 (女)(日本)	北原 兼文(鹿農)
平成29年3月13日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	タンコン ジェポン Thanankom Jaiphong (男)(タイ)	川満 芳信(琉)
平成29年3月13日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	ニシザワ ヨウ 西澤 優 (男)(日本)	モハト アムダト 村伊(琉)

論文博士

学位授与年月日	フリガナ 氏名(性別)(国籍)	紹介教員
平成28年9月16日	ワタベ ヒサヲ 渡辺 久修 (男)(日本)	一色 司郎(佐)
平成29年3月13日	ツェリン ペンゾ ヨール Tshering Penjor (男)(ブータン)	山本 雅史(鹿農)
平成29年3月13日	コノ クミ 河野 久美子 (女)(日本)	小山 次朗(鹿水)

## 平成28年度学位取得者（課程博）就職状況

### 職種別

職 種	人 数	
大学教員	8人	(24.2%)
研究所・団体等研究員	12人	(36.4%)
民間企業研究員（職）	2人	(6.1%)
その他（含む研究生等）	8人	(24.2%)
自 営	0人	(0.0%)
未定・不明（含む調査中）	3人	(9.1%)
計	33人	(100.0%)

### 就職先等

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Faculty of Agriculture</li> <li>・ Jenderal Soedirman University</li> <li>・ Township Officer</li> <li>・ Kasetsart University Kamphaeng Saen campus</li> <li>・ Mitr Phol Sugarcane Research Center</li> <li>・ 鹿児島大学</li> <li>・ 福岡県庁</li> <li>・ 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構</li> <li>・ Dela Salle University</li> <li>・ 佐賀県農業試験研究センター</li> <li>・ 鹿児島県大隅加工技術研究センター</li> <li>・ Hunan Agricultural University</li> <li>・ Vietnam Petroleum Institute-Research and Development Centre for Petroleum Safety and Environment</li> <li>・ 佐賀県工業技術センター</li> <li>・ 株式会社ビオック</li> <li>・ オフィス廣</li> <li>・ Rajamangala University of Technology Isan</li> <li>・ 国立研究開発法人理化学研究所 横浜事業所</li> <li>・ 神戸大学 内海域環境教育研究センター</li> <li>・ Kafrelsheikh University</li> <li>・ Sylhet agricultural university</li> <li>・ Sukhothai Agricultural Research and Development Center</li> <li>・ Department of Fisheries Thailand</li> <li>・ 熊本県県南広域本部球磨地域振興局</li> <li>・ 株式会社 三祐コンサルタンツ</li> </ul>
--

研究科教員組織

平成29年8月1日

専攻名	連合講座	鹿児島大学農学部		鹿児島大学水産学部		佐賀大学		琉球大学		合計				
		教授	准教授・講師・助教	教授	准教授・講師・助教	教授	准教授・講師・助教	教授	准教授・講師・助教	教授	准教授・講師・助教	計		
生物生産科学	熱帯資源・植物生産科学	a1 遠城 道雄 A1 坂上 志水 A 山本 雅史	B 一谷 勝之 b 角 明夫 b 朴 炳幸			因 穴井 豊昭 A 有馬 進 A 一色 司郎 A1 鈴木 嘉弘 因 鄭 紹輝	b 上笠 喜八 b1 古藤田 信博 b 辻田 有紀 B 藤田 大輔	A1 猪野 健次 因 川 芳信 A 本村 恵二	b1 赤嶺 光 B 仲村 一郎					
	小計	4 (3)	3 (1)	0	0	5 (5)	4 (1)	3 (3)	3 (1)	12 (11)	10 (3)	22 (14)		
	動物資源生産科学	因 岡本 新 A2 中西 良孝 A 三好 和睦	b1 大久津 昌治 b 大島 一郎 B 下桐 猛 b 高山 耕二			因 和田 康彦	b1 山中 賢一 b 江原 史雄	因 及川 卓郎 A2 川本 康博 因 佐野 文子 因 建本 秀樹	b 伊村 嘉美 b1 金野 俊洋 d 長嶺 樹					
	小計	3 (3)	4 (1)	0	0	1 (1)	2 (0)	4 (4)	3 (0)	8 (8)	9 (1)	17 (9)		
	地域・国際資源経済学	A1 秋山 邦裕 a 田代 正一 a 牧田 邦宏 因 豊 智行	B 李 哉法 B1 坂井 教郎	a 佐久間 美明 因 佐野 雅昭	b 鳥居 享司 b1 久智みず保	因 福岡 司 因 白武 義治	b1 辻 一成 b 中井 信介 b1 藤村 美穂	因 内藤 重之	b1 木島 真志 b1 杉村 泰彦 d 藤 碧霞					
小計	4 (2)	2 (2)	2 (1)	2 (0)	2 (2)	3 (0)	1 (1)	3 (0)	9 (6)	10 (2)	19 (8)			
計	11 (8)	9 (4)	2 (1)	2 (0)	8 (8)	9 (1)	8 (8)	9 (1)	29 (25)	29 (6)	58 (31)			
応用生命科学	生物機能化学	A2 北原 兼文 A 玉置 尚徳	b1 花城 勲 B2 藤田 清貴 B 二神 泰基 b 南 雄二 b1 吉崎由美子 B MCMマスタークラウド			因 北垣 浩志 A 小林 元太 A2 後藤 正利 A2 光富 勝		因 金子 哲 A1 高島 幸司 A1 寺嶋 芳江 因 外山 博英	b1 橋 信二郎 b1 福田 雅一 b1 石井 貴広					
	小計	2 (2)	6 (3)	0	0	4 (4)	0	4 (4)	3 (0)	10 (10)	9 (3)	19 (13)		
	食品機能科学	A2 安部 淳一 A1 田代 正一 因 大塚 彰	B 井尻 大地 b 宮田 健	A 上西 由翁 因 木村 郁夫 因 小松 正治	B 塩崎 一弘 d1 加藤 早苗	A2 永尾 晃治 A 濱 洋一郎 A 林 信行	b 野間 誠司	因 和田 浩二	b1 高良 健作 b1 玉城 一					
	小計	3 (3)	2 (1)	3 (3)	2 (1)	3 (3)	1 (0)	1 (1)	2 (0)	10 (10)	7 (2)	17 (12)		
	先端応用生命科学	因 石橋 松二郎 因 徳興 和則 因 橋本 文雄	b1 岡本 繁久 b1 清水 圭一 b 吉田理一郎 d1 坂屋こす枝			A2 石丸 幹二 A 宗 伸明 A2 渡邊 啓一	B2 永野 幸生 B 光武 進 c 辻田 志志	因 黒 宏典 因 平良 東紀	B 小西 照子 b1 岩崎 公典					
小計	6 (6)	5 (1)	0	0	3 (3)	3 (2)	2 (2)	2 (1)	11 (11)	10 (4)	21 (15)			
連携大学院 (タカラハ・イオ(株))	A 大野木 宏 A 峰野 純一	B 榎 竜嗣												
小計	11 (11)	13 (5)	3 (3)	2 (1)	10 (10)	4 (1)	7 (7)	7 (1)	31 (31)	26 (9)	57 (40)			
農水圏資源環境科学	生物環境保全科学	因 岩井 久 A1 曾根 晃一 因 壺 雅夫 因 津田 勝男	B1 池永 誠 B 鶴川 信 B 坂巻 祥孝 b 橋本 直也 b1 中村 正幸 b2 畑 邦彦 b1 濱中 大介			因 大島 一里 因 染谷 孝 A1 野間口真太郎 A1 早川 洋一	B1 上野 大介 B1 草場 基章 B 徳田 誠 B 吉賀 豊司	因 梶田 忠 A 鬼頭 誠 A1 立田 晴記 a 谷口 真吾 a 田場 聡 因 辻 瑞樹	b1 金城 和俊 b 関根健太郎 b 松本 一穂 b1 渡辺 信					
	小計	4 (4)	7 (3)	0	0	4 (4)	4 (4)	6 (5)	4 (0)	14 (13)	15 (7)	29 (20)		
	地域資源環境工学	a 岩崎 浩一 因 岡 勝 A 芝山 道郎 a 地頭蘭 隆 A2 西野 吉彦 A2 羽井 和朗	b 井倉 洋二 b2 伊藤 祐二 b2 紙谷 喜則 b 神田 英司 B1 寺本 行芳 b 服部 芳明			因 近藤 文義 因 田中 宗浩 A1 長 裕幸	b 阿南 光政 b 福葉 繁樹 b 郡山 益実 b 原口 智和 b1 宮本 英揮 B2 弓削 こす枝	A 井上 章二 因 酒井 一人 因 芝 正己 因 中野 拓治 因 中村 真也 因 弘中 和憲	b2 鹿内 健志 b 瀬戸内秀規 b1 平良 英三 b1 仲村 崇将 b ラザフンベハ d 安元 純					
	小計	6 (4)	6 (1)	0	0	3 (3)	6 (1)	6 (6)	6 (0)	15 (13)	18 (2)	33 (15)		
	水産資源環境科学	因 本村 浩之		因 石川 学 因 大富 潤 因 越塚 俊介 A2 重廣 律男 因 鈴木 廣志 因 寺田 竜大 因 中村 啓彦 A1 西 隆一郎 A1 前田 広人 A1 山本 淳 因 山本 智子 因 吉川 毅	因 安楽 和彦 b 石崎 宗周 b 宇野 誠一 b 江崎 恵吾 B 小谷 知也 B 小針 統 b 西 隆昭 b1 山中 有一 d 竹内 裕									
小計	1 (1)	0	13 (13)	9 (4)	0	0	0	0	14 (14)	9 (4)	23 (18)			
計	11 (9)	13 (4)	13 (13)	9 (4)	7 (7)	10 (5)	12 (11)	10 (0)	43 (40)	42 (13)	85 (53)			
合計	33 (28)	35 (13)	18 (17)	13 (5)	25 (25)	23 (8)	27 (26)	26 (2)	103 (96)	97 (28)	200 (124)			
注	因	15	6	12	4	10	4	17	2	54	16	70		
	A1	4	3	3	0	4	2	4	0	15	5	20		
	A2	5	1	1	0	5	2	1	0	12	3	15		
	a1	1	7	0	2	0	5	0	14	1	28			
	a2	0	3	0	0	0	0	0	1	0	4			
	c1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	c2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	d1	1	1	1	0	1	0	1	0	1	2			
	d2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	25	21	16	7	19	13	22	17	82	58	140			

注) 1 氏名の前の大文字 (A・A・B・B) はD号(主指導教員資格者)を示す。 2 小文字 (a・b・c・d) はD号(副指導教員資格)を示す。  
 3 A(a)は教授を、B(b)は准教授、cは講師、dは助教を示す。 4 因・Bは主指導教員、氏名の前の数字1は第1副指導教員、数字のない者は学生を担当していないことを示す。  
 5 ( )内の数字は、指導教員資格者のうち主指導教員資格者を内数で示す。 6 アンダーラインは女性を示す

代 議 委 員 会 委 員 名 簿

- A 任期 平成29年4月1日～平成31年3月31日(新任)  
 B 任期 平成28年4月1日～平成30年3月31日(継続)

専 攻	連 合 講 座	所 属 大 学	氏 名
	連合農学研究科長	鹿児島大学(農)	もみ い かず ろう 靱 井 和 朗
	副研究科長	鹿児島大学(連大)	てら だ りゅう た 寺 田 竜 太
生物生産科学	熱帯資源・植物生産科学	琉球大学(農)	B もと むら けい じ 本 村 恵 二
	動物資源生産科学	鹿児島大学(農)	A み よし かず ちか 三 好 和 睦
	地域・国際資源経済学	佐賀大学(農)	B しら たけ よし はる 白 武 義 治
		鹿児島大学(農)※	A ゆたか とも ゆき 豊 智 行
応用生命科学	生物機能化学	鹿児島大学(農)	B きた はら かね ふみ 北 原 兼 文
		佐賀大学(農)※	A こ ぼやし げん た 小 林 元 太
	食品機能科学	鹿児島大学(水産)	B き むら いく お 木 村 郁 夫
	先端応用生命科学	琉球大学(農)	A たい ら とう き 平 良 東 紀
農水圏資源環境科学	生物環境保全科学	佐賀大学(農)	A そめ や たかし 染 谷 孝
	地域資源環境工学	琉球大学(農)	B なか むら しん や 中 村 真 也
	水産資源環境科学	鹿児島大学(水産)	A にし りゅう いち ろう 西 隆 一 郎

※は講座外枠選出

## 平成29年度年間行事予定表

(鹿児島大学大学院連合農学研究科) H29.2.10 教授会承認済

年 月 日	行 事	備 考
平成29年 4. 14(金)	連合農学研究科入学式(11:00) 連合農学研究科オリエンテーション 代議委員会(第172回)	履修登録(Web) 「Newsletter 第37号」原稿依頼
5. 12(金)	代議委員会(第173回) [琉球大学 担当]	研究科教員候補者推薦依頼 (〆切 7. 3) 前期学位論文(論博含む)提出 (〆切 5. 31) 秋季入学出願資格認定申請受付→審査→報告→通知
6. 1(木) ～2(金)	平成29年度第1回全国連合農学研究科協議会(当番 東京農工大学)	秋季入学願書受付 (6.12～6.16)
6. 14(水) ～16(金)	平成29年度前期連合一般ゼミナール(日本語)(当番 鹿児島大学)	
6. 16(金)	代議委員会(第174回) [佐賀大学 担当] 学位論文の受理及び審査委員会委員の選出	
7. 7(金)	代議委員会(第175回) (SINET利用)	学位論文「公開審査会」・・・1週間前までに公示 学位論文審査・最終試験等結果報告 (〆切 8.21) 授業料免除(後期)申請
7. 26(水)	秋季入試説明会 入試実施方法	
8. 7(月) 8. 10(木)	事務会議及び事務連絡会[場所:鹿児島大学農学部] 人材養成学生支援セミナーI(鹿児島大学農学部担当)	「Newsletter 第37号」発行予定
9. 7(木) " " " " " " " "	秋季入学試験・入試委員会 入試合否判定 代議委員会(第176回) 教員候補者資格審査の付託 専攻会議(第1回) 教員資格審査委員会の設置 教員資格審査委員会 専攻会議(第2回) 教員候補者資格審査結果(報告)	中間発表会(平成27年10月入学者)9月中旬予定 学位授与申請→授与の可否決定(学長) 秋季合格通知書・入学手続き案内の発送
9. 8(金)	代議委員会(第177回) 学位論文審査結果 研究科教授会(第27回) 教員資格審査判定 入試合否判定 学位論文合否判定 教員資格審査判定	
9. 12(火) 9. 19(火) 9. 22(金)	秋季合格発表 秋季入学手続き(入学料免除申請等)(～21日) 学位記授与式	
10. 6(金) " " " " " "	秋季入学式 オリエンテーション 連合農学研究科運営会議 代議委員会(第178回) 第1次意向投票管理委員会	
10. ( ) 10. 19(木) ～20(金)	平成29年度第2回全国連合農学研究科協議会(当番 愛媛大学) (予定)	
11. 8(水) 11. 8(水) ～10(金)	代議委員会(第179回) [鹿児島大学水産学部担当] 農学特別講義(一般セミナー)実施 [鹿児島大学水産学部担当]	研究科教員(特例)候補者推薦依頼 (〆切 12.8)
11. 11(土) ～20(月)	人材養成学生支援セミナーII(洋上セミナー) 開催予定地:未定 (鹿児島大学水産学部担当)	
11. 15(水) ～17(金)	平成29年度後期連合一般ゼミナール(英語)(当番 岩手大学)	
12. ( ) 12. 15(金)	第1次意向投票 代議委員会(第180回) 学位論文の受理及び審査委員会委員の選出 次期代議委員の調整	後期学位論文(課程博)提出 (〆切12.5) 出願資格認定申請受付→審査→報告→通知 入学願書受付 (12/11～12/15) 中間発表会(平成28年4月入学者)未定
平成30年 1. 5(金) 1. ( ) 1. 17(水)	代議委員会(第181回) (SINET利用) 教員候補者(特例)資格審査の付託 第2次意向投票管理委員会 入試説明会 入試実施方法	学位論文「公開審査会」・・・1週間前までに公示 学位論文審査・最終試験結果報告 (〆切 1. 31)
2. 2(金) " " 2. ( ) 2. 15(木) 2. 16(金) " " 2. 20(火)	教員資格審査委員会の設置 代議委員会(第182回) 教員資格審査委員会 学位論文審査結果 次期代議委員の決定 第2次意向投票 入学試験 入試委員会 合否判定(午前) 研究科教授会(第28回) 合否判定(午後) 学位論文の合否判定 合格者発表	授業料免除(前期)申請 学位授与申請→授与の可否決定(学長) 合格通知書・入学手続き案内の発送
3. 6(火) 3. 16(金) " "	入学手続き(入学料免除申請等)(～8日) 代議委員会(第183回) 学位記授与式、構成法人連絡調整委員会	兼職申請書等作成 秋季入学募集要項発表 (中旬～下旬) 教育研究指導計画書・職務内容調書等の作成依頼

※ 委員会等の日程については、都合により変更することがあります。

## 平成 28 年度連合農学研究科活動記録

### 28 年

4 月 8 日(金)	平成 28 年度連合農学研究科入学式・オリエンテーション
〃	第 157 回代議委員会
5 月 13 日(金)	第 1 回入学試験検討委員会
〃	第 1 回教務委員会
〃	第 1 回 F D 委員会
〃	第 158 回代議委員会
6 月 9 日(木)~10 日(金)	平成 28 年度第 1 回全国連合農学研究科協議会(当番 東京農工大学)
6 月 15 日(水)~17 日(金)	平成 28 年度前期連合一般ゼミナール(日本語)(当番 愛媛大学)
6 月 17 日(金)	第 2 回入学試験検討委員会(佐賀大学で開催)
〃	第 2 回教務委員会 ( 〃 )
〃	第 2 回 F D 委員会 ( 〃 )
〃	第 159 回代議委員会 ( 〃 )
6 月 20 日(火)	T A 研修会
7 月 8 日(金)	第 3 回入学試験検討委員会(鹿児島大学水産学部で開催)
〃	第 3 回教務委員会 ( 〃 )
〃	第 160 回代議委員会 ( 〃 )
7 月 15 日(金)	人材養成学生支援セミナー I (担当 佐賀大学)
7 月 27 日(水)	秋季入学説明会
8 月 17 日(月)	平成 28 年度連合農学研究科構成大学事務会議・事務連絡会 (鹿児島大学水産学部で開催)
8 月 25 日(木)	第 161 回, 162 回代議委員会(メール会議)
9 月 1 日(木)	秋季入学試験
〃	第 163 回代議委員会
〃	専攻教員会議、教員資格審査委員会
9 月 2 日(金)	第 164 回代議委員会
〃	第 25 回研究科教授会
9 月 6 日(火)	秋季合格者発表
9 月 16 日(金)	平成 28 年度連合農学研究科学位記授与式(前期)
10 月 3 日(月)	秋季入学式・オリエンテーション
〃	第 17 回(平成 28 年度)鹿児島大学大学院連合農学研究科運営会議
〃	第 165 回代議委員会
10 月 12 日(水)	第 166 回代議委員会(メール会議)
10 月 27 日(木)~28 日(金)	平成 28 年度第 2 回全国連合農学研究科協議会(当番 岐阜大学)
11 月 7 日(月)	第 167 回代議委員会(沖縄自治会館で開催)
11 月 8 日(火)	第 4 回教務委員会 (沖縄自治会館で開催)
〃	第 4 回入学試験検討委員会( 〃 )
〃	第 3 回 F D 委員会 ( 〃 )

11月7日(月)～9日(水)	農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)(担当 琉球大学農学部)
11月12日(土)～20日(日)	人材養成学生支援セミナーⅡ(洋上セミナー) (担当 鹿児島大学水産学部)
11月16日(水)～18日(金)	平成28年度後期連合一般ゼミナール(英語)(当番 鹿児島大学)
11月24日(木)	国際農学特論(英語)(担当 鹿児島大学農学部)
12月16日(金)	第5回教務委員会
〃	第5回入学試験検討委員会
〃	第4回FD委員会
〃	第168回代議委員会

## 29年

1月6日(金)	第6回教務委員会
〃	第6回入学試験検討委員会
〃	第169回代議委員会
〃	教員資格審査委員会
1月18日(水)	入試説明会
2月3日(金)	第7回教務委員会
〃	第170回代議委員会
2月9日(木)	入学試験
2月10日(金)	ハラスメント防止のための講演会
〃	第26回研究科教授会
2月14日(火)	合格者発表
3月13日(月)	第171回代議委員会
〃	平成28年度鹿児島大学大学院連合農学研究科 構成法人連絡調整委員会
〃	平成28年度連合農学研究科学位記授与式(後期)

## 事務局だより

○連大事務室 連大事務係長 河本 政展



私は、1984年4月に鹿児島大学事務局に採用されました。

私と農学部ならびに連合農学研究科との関わりは、現時点で10年間になります。

1989年4月に農学部附属演習林総務係に配属され、同年9月から1993年3月まで農学部会計係に配属となり、1990年に連合農学研究科棟が竣工した際は、建物内に設置する設備・備品の購入契約と予算執行に携わりました。

また、2001年4月から2003年3月の間には農学部高隈演習林の事務に携わりました。

2014年7月からは農学部・農学研究科・共同獣医学部の教務事務に携わり、2017年6月まで従事しました。

今回、2017年7月の人事異動で連大事務室に配属されました。

学務系の仕事には、学士課程は農学部・理学部・医歯学総合研究科、修士課程は農学研究科・理工学研究科で携わりましたが、博士課程については連合農学研究科が初めてです。

学生の皆様・教職員の皆様へ、迷惑を掛けることのないよう心がけて職務に専念します。

よろしくお願い申し上げます。

代議委員会委員・連大事務室事務係メールアドレス一覧表

所 属	氏 名	E-Mailアドレス
連合農学研究科長	もみい かずろう 籾井 和朗	rendean@ml.agri.kagoshima-u.ac.jp
連合農学研究科 副研究科長	てらだ りゅうた 寺田 竜太	terada@fish.kagoshima-u.ac.jp
佐賀大学農学部	しらたけ よしはる 白武 義治	shiratay@cc.saga-u.ac.jp
	こばやし げんた 小林 元太	gentak@cc.saga-u.ac.jp
	そめや たかし 染谷 孝	someyat@cc.saga-u.ac.jp
鹿児島大学農学部	きたはら かねふみ 北原 兼文	kitahara@chem.agri.kagoshima-u.ac.jp
	みよし かずちか 三好 和陸	kmiyoshi@agri.kagoshima-u.ac.jp
	ゆたか ともゆき 豊 智行	yutaka@agri.kagoshima-u.ac.jp
鹿児島大学水産学部	きむら いくお 木村 郁夫	kimura@fish.kagoshima-u.ac.jp
	にし りゅういちろう 西 隆一郎	nishi24@fish.kagoshima-u.ac.jp
琉球大学農学部	もとむら けいじ 本村 恵二	motomura@agr.u-ryukyu.ac.jp
	なかむら しんや 中村 真也	s-naka@agr.u-ryukyu.ac.jp
	たいら とうき 平良 東紀	tokey@agr.u-ryukyu.ac.jp
連大事務室長事務代理 (兼務)	もみい かずろう 籾井 和朗	rendean@ml.agri.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室長代理	みなみ ゆうこ 南 祐子	rendairi@kuas.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室連大事務係長	かわもと まさのぶ 河本 政展	renjimu@kuas.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室再雇用職員	あいこう たかのり 愛甲 貴徳	
連大事務室連大事務係 補佐員	ふくのうえ てよこ 福之上 天代子	
	いしかわ まゆみ 石川 まゆみ	
	かわばた みちこ 川畑 倫子	
	おく あやこ 奥 あや子	

## 編集後記

鹿児島大学大学院連合農学研究科ニュースレター第 37 号をここに刊行することが出来たことをご報告させていただきます。今回の表紙は屋久島の弥生杉，裏表紙には構成研究科とその周辺で見られる景色，入学式等の写真を用いました。37 号の刊行に際して，執筆および資料等を提供して下さった先生方，学生の皆さんにこの場をお借りしましてお礼の言葉を申し上げさせていただきます。また，連大事務室の事務職員の方々にも多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成 29 年 10 月

Newsletter 編集委員長

寺田 竜太

# MEMO



平成 28 年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科 農学特別講義（一般セミナー）』  
平成 28 年 11 月 7～9 日 於：沖縄県市町村自治会館 2 階

## 鹿児島大学大学院連合農学研究科

Doctoral Course Newsletter

第 37 号 平成 29 年 10 月発行

編集 鹿児島大学大学院連合農学研究科  
鹿児島市郡元 1 丁目 21 番 24 号  
電話（ダイヤルイン）市外局番 099  
研究科長 285-8780  
副研究科長 285-8781  
連大事務室長代理 285-8791  
連大事務係（総務系）285-8792  
連大事務係（学務系）285-8795  
FAX 285-8799  
URL <http://homeugs.agri.kagoshima-u.ac.jp/>  
E-Mail [renjimu@kuas.kagoshima-u.ac.jp](mailto:renjimu@kuas.kagoshima-u.ac.jp)



鹿児島大学大学院連合農学研究科  
 The United Graduate School of Agricultural Sciences  
 Kagoshima University  
 〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21番24号  
 Phone 099-285-8792 FAX 099-285-8799  
<http://homeugs.agri.kagoshima-u.ac.jp/>